
インフィニット・ストラトス 黒き叡智

竜華零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 黒き叡智

【Nコード】

N0293Z

【作者名】

竜華零

【あらすじ】

IS、それは宇宙開発を目的に開発されたマルチフォーム・スーツ。現行兵器を遙かに凌駕する性能を持つそれは、瞬く間に世界を変革させた。

そしてそんな世界に生きる少女、名は「篠ノ之 楓」。

IS開発者、篠ノ之 束の実妹にして、IS操縦者養成所「IS学園」の女生徒、篠ノ之 篝の双子の妹。好きなものは姉、将来の夢は宇宙進出、そんな女の子。篠ノ之姉妹の未っ子、ただいま15歳。長姉、束によって黒き叡智を授けられた彼女は、はたしてこの世界

で何を見るのか ？

この物語は、「インフィニット・ストラトス」を原作とするオリジナル主人公再構成モノです。苦手な方はご注意ください。原作準拠・非アンチが基本原則、でも原作の範囲を超えたらオリジナル展開になる可能性があります、ご注意ください。

*パロディ要素あり、そういった表現が苦手な方はご注意ください。

プロローグ：「お姉ちゃんのお願い」（前書き）

はい、それでは……。

妹「はーじまーるよー」

……!?!?

プロローグ：「お姉ちゃんのお願い」

プロローグ：「お姉ちゃんのお願い」

インフィニット・ストラトス、通称『IS』。

人間が宇宙に進出し、活動することを目的に開発されたマルチフォーム・スーツ。

核である「コア」とそれを守る装甲から成る、人類を次のステージへと押し上げることを可能とする鍵。

開発者の名は、篠ノ之 束。

しかし従来の機械を遥かに凌駕する性能を知った主要国は、これを宇宙開発では無く「兵器」として利用することを考える。

結果、『IS』は現行兵器を超える「機動兵器」として世界に認知されることになった。

しかしこの新たな「兵器」には、致命的な欠陥が2つ、存在した。1つは『IS』の起動に不可欠な「コア」の存在、これは世界に467個しか存在しない。

開発できる唯一の人間である篠ノ之 束がそれ以上の数を製作しなため、これにより『IS』の絶対数は467機と制限されることになった。

。そしてもう1つ、むしろこちらの方が致命的かつ決定的な欠陥……

『IS』は、女性にしか使用できない。

原因は不明、開発者である篠ノ之 束ですらわからないとされている。

しかし、いずれにせよ『IS』の絶対性と欠陥は、世界を変革した。誰が望んだ変革かは別として・・・そう。

世界は、変わったのだから。

・・・「誰か」のために、「誰か」によって。

Side 篠ノ之 楓^{しののの かえで}

某国・某地域・某秘密ラボ・某部屋 。

正確な位置を教えられなくてごめんなさい、でも一応、私は潜伏中なので。

誰にともなく謝りながら、私は空中投影のディスプレイ3枚と睨めつこう中。

2枚の空中投影型のキーボードに指を踊らせつつ、12畳四方くら

いある部屋の中央にある「モノ」に、時折視線を投げる。
そこは、ちよつと普通では無い部屋。

「・・・お？」

灰色の無機質な部屋には無数の大きな機材とケーブルの束があつて、
そこら中に小さなネジやボルトが散らばつてゐる。
そして今、私と目が合ったのは・・・機械仕掛けのリス。
ドングリのようにネジを齧る姿は、何だか可愛い。

東お姉ちゃんが作つたりスだけど、用途は良く知らない。
でも東お姉ちゃんが作つた物の中では比較的マトモな部類で、結構
好き。
だつて、可愛いし。

「何より、無害だし・・・無害なのは良いよね」

ここは、東お姉ちゃんの秘密ラボ。
場所は定期的に移動するから、何とも言えないけど・・・設備はた
ぶん、世界一。
かれこれ数年間、ここで東お姉ちゃんと「クーちゃん」さんと過
してゐる。

「・・・えーでーちゃ〜んっ」

「・・・お？」

「かーえーでーちゃーんっ！！」

声が、した。

次いで、ドタドタドタ・・・と言う誰かが駆けて来る音。

それに反応して、すぐに私は身構える。

過去の経験から、「あの人」は部屋のドアから突撃してくることはわかってる。

彼我の距離7メートルを物ともせず、まさに「飛びついて」「来るのだ。」

危ないからやめてって言うてるのに、全くもって聞いてくれない。

だから、私の方がちゃんと対応してあげないと。

「だあくいニユースだよっ、楓ちゃんっ！！」

しかし、相手の方が上手だった。

何故なら相手は、ドアの方ばかりに気を取られていた私の虚をついて、上から来たから。

がぱっ、と天井の一部を外して、上から飛び下りると言う形で。

むぎゅっ。

・・・人が潰される音をいくらコミカルに変換してみても、痛みは

変わらないと言ったことがわかった。

何と言うか、押し潰された。

首と腰とか足とか、諸々の骨が軋んで　むしろ、何で折れ無か

ったんだろう　潰された。

成人女性が身体の上に落ちてくれば、それなりの音と衝撃が駆け抜けるわけで……。

「……お、お姉ちゃん……お姉ちゃんが全力で飛びつくと私の命が危ないと何度お願いしたら……」

「あつははは、楓ちゃんは今日もラブリーだねっ、お姉ちゃんは嬉しいよっ」

息も絶え絶えな私の言葉を軽くスルーするこの人は、私のお姉ちゃん。

天井から落ちて来たのは、20代の女性。

腰まで伸び放題になった髪に、どこことなく「不思議の国のアリス」を思わせる青色のワンピース。

頭には何かの機械らしいウサミミカチューシャ、眠そうな目を目一杯笑みの形に歪めて、私を抱き潰そうとしている。

名前は、篠ノ之 たはね 束。

私の実の姉で、『IS』を開発した本物の「天才」。

「天才」の名に恥じず……と言うか「天才」という言葉がバカらしくなるくらい「天才」のだけど、何だろう、身内かそくに対する距離感がゼロ距離な人……。

「ねえねえねえ、楓ちゃん楓ちゃん、大ニユースだよ大ニユース、もう大ニユース過ぎてお姉ちゃんは楓ちゃんに抱きつかざるを得なかったよー」

「・・・それは良いから、離してお姉ちゃん・・・」

「実はねえ、いっくんがね　あ、いっくんは知ってるよね？」

知ってるに決まってるよね、楓ちゃんだもんね　うん、いっくんがねえ、どどーんっ、何と『IS』を動かしました〜、ぱふぱふ〜」

そして、人の話を聞いてくれない。

でも、まるで緊張感も何も無いような人だけど、絶賛世捨て人中。

先程も言ったように、私・・・と言うか東お姉ちゃんは世間的に言うところ、失踪中だから。

どうして世間から身を隠そうとしたのかとか、それは良く知らない。でも数年前のある日、何を思い立ったのか失踪した。

でも『IS』開発者である東お姉ちゃんの失踪は、他の人にとっては無視できない大事件。

何しろ、『IS』のコアを作れる唯一の人物の居場所を把握できないわけだから。

まあ、東お姉ちゃんがどう感じているかは、わからないけど。

そしてどう言うわけか、東お姉ちゃんはある日、私も一緒に連れ出しました。

・・・何で私まで連れ出したのか、東お姉ちゃんはさっぱり教えてくれないけど。

「いっくん・・・ああ、一夏さんですか、篝姉さんの幼馴染

の

「ほし姉さんは、日本にいる私の双子の姉。」

「おひむらいちか織斑一夏さんは、そのほし姉さんの小さい頃のお友達。」

私も、何度か会った覚えがある。」

私は小さい頃は身体が弱くて、ずっと家にいたから……。
……だから同年代で会った子は少なくて、良く覚えてる。
……あれ、でも一夏さんって。」

「……男の子、だよな？」

「うんうんっ、不思議だよねっ、ISは女の子専用なのにねえ」
「それは……うん、本当にびっくりだね……」

東お姉ちゃんの作った『IS』は、男性には使えない。

と言うか、唯一にして最大と言っても良い欠陥で……なのに、男性の一夏さんが動かした。」

東お姉ちゃんですえ、驚いている……みたい。」

いつもニコニコしてるから、何を考えているかはわからないけど。」

「本当はお姉ちゃんが行きたいんだけど、でもでも、お姉ちゃんにはやる事が一杯なのでした〜！」

「はあ……」

「と言うわけで、そこで登場お姉ちゃんのエンジェルっ、楓ちゃんに見て来て貰おうと思いまーすっ」

「はあ？」

ダメだ、脈絡が無さ過ぎてダメだ。
でもお姉ちゃんの笑顔は、花のエフェクトを飛ばしながら全力全開状態。

こうなると、私は嫌と言えないわけで……。

「いつくんはねえ、何だかどうでも良い連中が勝手にちーちゃんと
篝ちゃんのいる所に放りこんじゃったみたいなんだよねえ」

「ちーちゃ……千冬姉様と、篝姉さん？」

千冬^{ちふゆ}姉様は、東お姉ちゃんの親友、ついでに言えば一夏さんのお姉さん。

その人と篝姉さんがいる所……って、まさか、「あそこ」！？

「む、無理無理無理っ！ 東お姉ちゃんと一緒に失踪してた私が突然現れて良い場所じゃ無いでしょ！？」

「んん……のーぷろぶれむっ！」

「そんなバカな！？」

親指を上を拳を握り込んでウィンク、そんな東お姉ちゃんに私は悲鳴を上げる。

『IS』のコアを作れる東お姉ちゃん……にくつついて失踪してた私が、突然ひよっこり「あそこ」に出現したらどうなるか……考えただけで恐ろしい、と言っかりアルに怖い！

突然黒服に囲まれて拉致とかされたら、何とするっ!?

「あっはははは、楓ちゃんは心配性だねえ」

「いやいやいや、そう言う問題じゃ・・・」

「だーいじょーぶっ、これまでお姉ちゃんが大丈夫って言って大丈夫じゃ無かったことがあるかなあ?」

ある。

例えば、今。

「むう、楓ちゃんお願いっ、お姉ちゃんのお願いを聞いてほしいなあ」

顔の前で手を重ねて「お願い」ポーズ、うう・・・そ、そんな風にされると。

ああっ、そんなウルウルした眼差しで見つめられたらあ・・・! う、うう・・・。

「しよ、しょうが無いな、今回だけだよ・・・?」

「ほんと? ありがとうっ、楓ちゃん大好きっ!!」

「ろ、了解ロク・・・」

結局、私が折れて・・・むぎゅっつと、東お姉ちゃんに強く抱き締められる。

豊富な胸に顔を埋められて凄く苦しいけど、でも私は引き剥がさない。

むしろこっそり、お姉ちゃんの背中に手を回してみたりして。

はあ、私ってどうして東お姉ちゃんに甘いのかなあ……。

……でも、お姉ちゃんってポカポカだよな。

「あ、ちなみに筆記試験って言うのが明日あるんだって。会場はイスタンブール」

「な、何でイスタンブール……？」

「あみだくじー」

「え、ええええ……？」

はあ……東お姉ちゃんから離れて、私は傍の『IS』の黒い装甲に触れた。

何か、物凄く不安だけど……でも、お姉ちゃんが大丈夫って言ってるし。

それに、篝姉さんにも久しぶりに会えるし……。

何より……「学校」に、行けるんだ。

……それじゃ、行くこうか、『黒叢』

いつか、お姉ちゃん達と宇宙を飛ぶために。

プロローグ：「お姉ちゃんのお願い」（後書き）

篠ノ之 楓：

はい、ではここでは「IS」についての説明をしますねー。

お姉ちゃんの方がよく知ってるんですけど、説明とかしない人なので。

えーと……。

アイエス

IS：

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。まあ、ちよつと大きな機械仕掛けの鎧みたいな物だと思って頂ければ……黄金聖 みたいな物です。

開発当初は認められませんでした。ある事件以降、世界にその性能が認められます。はい、でも宇宙開発には使用されずに軍事転用されました。現在では核兵器に替わる「抑止兵器」とも呼ばれますね、数は500もありませんけど。

国際条約で、各国のIS保有台数は厳格に定められています。

ISはコアと腕や脚など装甲から形成されています。シールドエネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによって現行兵器（核兵器含む）ではISに乗ったパイロットを倒すことはできません、チートです、流石は東お姉ちゃんです。なお、物質の量子化と言うトンドデモ機能もついています。

最大の特徴は「自己進化」。経験を積むとISのコアは学習して成長します。成長するとより性能が上がります、まるで人間みたいですよね。

篠ノ之 楓：

・・・はい、この世界で一般に知られているISの情報を説明しました。

もちろん、これで全てではありませんので、後は本編での説明をお待ちください・・・っと。

ふう・・・疲れた。

飴食べよ・・・って、あれ、ドロップ缶が空っぽ？

篠ノ之 束：

あつはつはつ、中身はお姉ちゃんがぜえんぶ頂いたよ！

楓ちゃんの説明が長かったからね！

篠ノ之 楓：

え、えええええ・・・。

主人公設定（物語スタート時点）（前書き）

お久しぶり、あるいは初めまして。

この度「IS」に参入致しました、竜華零です。

最近読み始めた作品ですが、頑張って完結まで持つて行きたいと思
います。

まずは本編を投稿する前に、主人公設定を公開。

今後、増えて行く可能性がありますのでご注意ください。

では、どうぞ。

主人公設定（物語スタート時点）

主人公設定（物語スタート時点）

氏名：篠ノ之 楓（しののの かえで）

誕生日：7月7日 年齢：15歳

身長：156cm 体重：43kg

スリーサイズ：B74/W56/H80

髪の色：黒 瞳の色：黒

特技：

東お姉ちゃんの暇潰しに付き合うこと。

パソコン関係（ハッキング、プログラミング、タイピング等）。

IS関係（整備・設計・解析・改良等・・・勿論、実姉の束の足下にも及ばないが）。

好きなもの：

パソコン関係、読書、機械（特にIS）弄り、飴（オレンジ味）。

苦手なもの：

「劣化束（あるいはそれに類する呼称）」と言われること、言われ
たらキレます。

激しい運動（幼少時に身体が弱かったことが原因）。

略歴：

肩先まで伸びた黒髪に黒い瞳、白い肌の少女、日本人形のように例
えられることもある容姿。顔立ちは双子の姉である筈にそっくり、
ただし筈よりも柔らかい印象。

篠ノ之家の3女にして末娘、束の実妹にして筈の双子の妹。実家は
剣道場でもある篠ノ之神社、ただ幼少時から身体が弱かったため、
双子の姉である筈と違って剣道は習わなかった。現在ではそれほど

身体は弱くないが、それでも激しい運動は苦手。あまり学校に行けなかったので、学校生活に淡い期待あり。

IS開発者である実姉、束が世間から身を隠す（つまり失踪）する際、その姉によって拉致・誘拐される（おそらく、IS開発直後の重要人物保護プログラムから守るためと思われる）。この際、束は篁も連れて行くつもりだったらしいが、結果として楓のみが束についていくことになる。

その後、束と共に逃亡生活・研究生生活を送ることに。そして15歳になったある日、束がいつものように持ってきた「お願い」が、彼女に新しい扉を開かせることになる……。

人物：

2人の姉が大好き、2人の「お願い」を聞くのが自分の生きがいだと思っている。

2人の姉はそれぞれが別分野で才能を開花させている（束はIS、篁は剣道など）が、身体が弱かった頃から活動的な2人の姉が憧れだった。そのためいずれの姉にも自分は劣ると考えており、ある種のコンプレックスを抱いている。特に双子でありながら身体も丈夫で強い篁に対しては、幼少時から強い憧れにも似た感情を抱いていた。だが身体的スタイルについては、神の不公平さを呪っている。たまにカッコつけて姉の頼みごとに「了解」と返すが、これは幼い頃に読んだ小説の影響だとか。別に本人はミリタリーが趣味なわけでは無い。

将来の夢は「姉妹で宇宙を飛ぶこと」。

束の「ISは宇宙開発のため」という言葉を、本気で信じてる。だから軍事に使ってる今の世界には少し不満があるらしい。

他者との関係性（束に拉致される前の時点）：

対織斑 一夏・・・

実は直接の面識があまり無い、何せ幼少時はほぼ布団の中。とは言え、何度かは顔を合わせたことはある。それと姉の箒が仲良くしていることや、束の親友の弟であることは知っている。個人的には、一応「お友達」カテゴリ！。

対織斑 千冬・・・

長姉である束により、嫌と言うほど話を聞いた。引き合わせてもらったこともあり、回数で言えば弟の一夏よりも多い。束に連れ出されていた間も束から（過剰に）話を聞いていたので、「凄い人」と認識。個人的には、束の唯一の抑止力として尊敬している。

対篠ノ之 束・・・

上の姉、楓の全ての基となった相手。まったく同じでは無いが一夏にとつての千冬が、楓にとつての束。大好きだが苦手、尊敬しているが何を考えているのかわからなくて怖い。連れ出されている間は、束によつて手ずからIS関係のスキルを学んだ。最も、教え方も宇宙的だったが・・・。

対篠ノ之 箒・・・

下の姉、身体が弱かった幼少時には憧れの的。箒のようになりたいと願っていたし、箒も運動のできない妹の分も・・・と思っていた節がある。楓が束に連れ出されてからも、ちよくちよく連絡はとっていた。でも何だか、少し距離感が・・・。

IS（専用機）：「黒叢」^{こくそう}（楓が把握している範囲内）

国籍：無 所属：無（名目上は篠ノ乃 束の個人所有）

*現在、国際IS委員会で対応を協議中。

楓の専用機、楓が束に連れられていた3年間で束から盗ん・・・学んだ技術を活用して基本設計した機体。そのため楓は「私の子供！」と呼んで可愛がっている。実姉、束のラボで製造、コアは束の個人所有の物を縁故で譲渡された（束曰く、妹へのプレゼント）。製造の過程で束からいろいろと調整を受け、世代としては第3世代相当の性能を持つ。

設計コンセプトは「ISを助けるためのIS（by 楓）」、しかし束は「ISを制するISだよん」と言っているらしい。束が第4世代型の開発の直前に製造したいわば「過渡期」の機体と言う側面も持つ。なお、束の「少し手伝う」の範囲がおかしいため、楓も把握していない機能がある可能性が高い。

機体色は黒、全体的に流線型で、肩先、腰部などが丸みを帯びたデザインになっている。スラスタは腰部の後ろについている2基、それと背中に2基のタンクがあるが、これはナノマシン格納庫になっている（用途については下記参照）。

待機形態は菱形の黒い指輪、楓は普段左手の中指に嵌めている。

ISの装備：（IS学園に提出するスペック・データより抜粋）

「黒叢」の初期装備は2種類しか無い、と言うのも元々ISを補助・コントロールするために設計した「非戦闘用」のISだからである。そのため、楓本人は「お手伝いIS」と呼称。

「黒翼」：

単純に言ってソードビット、機体腰部に6基装備されている特殊な複合素材製の短剣型ビット。それぞれが固有のスラスタを持っており、自立した行動が可能。制御は原則として全自動、攻撃では無

く防御が主目的であり、至近距離での直接的な脅威からIS搭乗者を守るための兵装。また、全ビットを円環状に配置することで限定範囲にシールドを展開することもできる。ただしシールドは一方方向に一つしか展開できず、自動なため機械的な動きにならざるを得ない。

「黒叢」：

機体名の由来となったシステム。

書類上は自機以外のISの機体内にナノマシンを侵入させ、エネルギー供給の効率化などを行う仕様。

製作者は東、コアの開発者である東だからこそ可能にした新世代装備と言える。

使用時は「黒叢」の背中部分に搭載されたタンクの中に貯蔵されているナノマシンを、周辺に散布する。この際、散布したナノマシンの群れが影が広がるように見えることから、「黒叢」の名が付けられた。

*装備についてのさらに詳しい設定は、本編で少しずつ紹介する予定。

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」（前書き）

前書き、妹語録コーナー。

妹「ねえお兄ちゃん、私、お兄ちゃんとパパ、どっちのお嫁さんになるの？」

その日、我が家で戦争が起きました。

最終的に母が「ソレスタルビ イング」のように武力介入、紛争は早期に終結致しました。

妹がまだ、小学生だった頃のお話です・・・。

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」

Side

おじむ/おしむゆ
織斑千冬

・・・『IS学園』、それはIS操縦者育成のための特殊国立高等学校。

運営と資金提供は日本国、しかしそこで得た技術は世界に公開する義務がある。

学園内においては、いかなる国家も介入できないことに表向きにはなっている。

IS技術独占国である　正確には、「だった」　日本、そ

してここIS学園には世界中からISを、技術を、人材を求めて多くの生徒が入学してくる。

私の役目は、そんな連中を使えるように鍛えてやることだ。

一応、教師だからな。

「まあ、正直・・・どうかとも思うが」

コツ、コツ・・・そのIS学園の敷地内を歩きながら、私はその声に出す。

だがその声は誰にも届かない、と言っか、教師も生徒も入学式だからだ。

もちろん、私も先程までは入学式に出席していた、教員として。

本来ならそのまま担当する1年1組の教室に向かう所だが・・・実は1人、迎えに行かねばならない小娘がいる。ただの小娘なら捨てている所だが、ただの小娘では無いからそうもいかない。

「・・・束の奴・・・」

ここにはいない親友　　親友、か　　を罵りながら、私は思考を続ける。

ただでさえ今年は、「世界でISを使える唯一の男」と言う触れ込みで私の弟が入学してきているんだ。

1年1組、私が面倒を見る。

私のたつた1人の弟、家族、織斑一夏。

それだけでも手がかかると言うのに、ここに来てまた1人、面倒な生徒が増える。

篠ノ之　楓、私の親友でIS開発者でもある束の妹。

妹と言うだけなら、すでに私のクラスには筈と言うもう1人の妹がいる。

問題は・・・今度の妹が、失踪中の束と行動を共にしていた可能性が高い、と言うことだ。すでに政府の方からいろいろと言われている、私としても捨てておけない。

・・・個人的にも、だ。

「それを、メール1つで『よろしくサンキュ〜』だと？ 今度会ったら殺す」

もう数年間会っていない上に、殺しても死なないだろうが。

まあ、奴の考えていることなど私もわからん。

メールには詳細な・・・そう、不必要なまでに詳細な情報が添付されていたが。

『飴ちゃんあげたらついてっちゃう子だから、気を付けてあげてね〜』だとか、特にいらん。

後は何だ、方向音痴で都会に慣れて無いからどうなの・・・。

「がっ・・・学校

っ!!!」

・・・はあ。

顔を手で覆って、私は溜息を吐く。

一夏だけでも、大変だと言うのに・・・。

そんな私の目の前には、正門ゲートの前で奇声を上げる1人の女生徒。

せめて、次女はつひに似ていてくれればと願った私が馬鹿だった。

何年かぶりに再会した、束お姉ちゃんの親友。それは何と、IS学園の先生だった……。しかも、出会い頭に出席簿で頭を殴られた。かなり、痛かったとだけ明言しておく。

「あう……。私の脳が二つに割れるかと……。千冬姉様、酷い……」

「ほう、良かったな、これからは左右の脳で別のことが考えられるぞ……。後、学校では織斑先生と呼べ」

「学校……。そう、学校だ つ！！ ぶぐつ！？」

2 撃目、しかも今度は角で……。かなり痛い。軽く泣きそう、あ、涙が。

「私に、同じことを2度言わせる気か……。？」

「い、いえっ、大丈夫、静かにします！！」

びしっ、敬礼しもって元気よく返事。

何年かぶりに再会した千冬姉様は、子供の頃よりもずっと厳しい人になってた。

黒のスーツをビシッと着こなす、カッコ良い20代の女性。

名前は織斑千冬さん、東お姉ちゃんの親友さん。

子供の頃からの知り合い、今ではここ「IS学園」の先生・・・学園、「学校」。

そう、私は学校に来てるんだ・・・！

子供の頃は良くて保健室登校、東お姉ちゃんに拉・・・連れ出されてからは逃亡生活。

ちゃんと学校に通うのは、実はこれが初めて！

「もう、興奮するなって言うのが無理・・・！」

「・・・篠ノ之・・・？」

「す、すみませんデス！」

再び出席簿を掲げる千冬姉様に、私は頭をガードしながら返事をする。

あ、アレは・・・アレだけはどうかお許しを・・・！

・・・でも、学校に来て嬉しいのは本当。

校門で興奮して叫んじやって、千冬姉様に叱られたけど。

東お姉ちゃんに教えて貰った自己紹介も覚えだし、きつと大丈夫だよな。

お友達とか、できるかなあ・・・。

「あ、あの、千・・・織斑先生、入学式に間に合わなくてごめんなさい・・・」

「それについては後で罰則を加える」

「あう・・・」

いや、だって束お姉ちゃんがいきなり言い出したから準備が……。は、初登校でいきなり罰則……。あ、でも結構、憧れてたかも。学校の罰則って、伝説のアレかな、トイレ掃除1週間？

「……束は」

「はい？」

「束は、どうしてる？」

私が学校の罰則について考えていると、千冬姉様が束お姉ちゃんのことを聞いて来た。

やっぱり親友、お姉ちゃんのこと気がなるのかな。

お姉ちゃんが言ってた通り、本当はとても優しい人なのかも。

「えっと、ここに私を送り出した後、移動したと思うので……。どこにいるかは。あ、でも凄く元気ですよ、千冬姉様のことでも良くお話してくれました」

「ちっ」

何故か、舌打ちされた。

あ、あれ……。？

その後は、お喋りはせずに廊下を歩く。

でもこう言う学校に来ること自体が初めてに近い私は、周囲をキョ

口キヨ口と見回す。

だって、何もかもが新鮮で、珍しいんだもの！
今日からここが、私の学校！

・・・っと、興奮するとまた叱られる、落ち着かなきゃ。

「・・・新学期早々、騒がしいな」

「え？」

不意に、立ち止まる。

そこは、「1年1組」のプレートがかけられた教室の前。
中からは、複数の声が聞こえて・・・。

「・・・大丈夫か？」

扉に手をかけた所で、千冬姉様が私に声をかける。
相変わらず厳しそうな声だけど、気のせいで無ければさっきまでは
無かった柔らかさを感じる。

・・・東お姉ちゃんの、言ってた通りの人。

「はい、大丈夫です！」

ハッキリと答えると、少しだけ笑ってくれた気がする。

・・・初めての学校、初めてのクラス。

もちろん、凄く凄く緊張するけれど、でも。

それ以上に・・・楽しみ。
これから、どんな毎日を過ごすことになるんだろう。

「・・・では、入るぞ」

ガララツ・・・千冬姉様が、教室の扉を開ける。

見ててね、東お姉ちゃん。

楓は、お姉ちゃんのために頑張るよ・・・！

S i d e 織斑 一夏

あの日、女にしか動かせないはずの『IS』を動かした瞬間から、俺の人生は一変した。

変な黒服に『IS』操縦者のための特殊国立高校、「IS学園」に入学願書押し付けられてから、選択肢も無のまま・・・ほとんど無理矢理、この学園に押し込められた。

「セシリア・オルコットですわ。ご存知でしょうが、イギリスから派遣されて日本へ・・・」

いや、「IS学園」と「藍越学園（学費の安さと就職率の高さが売りの私立高校）」の受験会場を間違えたり、勝手に置いてあった『IS』に触った俺にも悪い所はあったのかもしれないけど。けどさ……これは罰にしては重すぎると思うんだ、神様。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。オルコットさんの自己紹介も終わったからね、だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

いや、別にそこまで謝らなくても……と言いたくなるほどに俺の目の前でオドオドとペコペコしているのは、俺のクラスの副担任、山田真耶先生。

低い身長、だぼつとした服に大きめの眼鏡、短い緑色の髪の水教師……見た目的には、学生で通りそうな先生だな。

ここで状況を再確認、今日はIS学園の入学式で初めてのクラス、絶賛、自己紹介中。

ここまでは良くある話だ、つまり次は俺が自己紹介する番と言っただけで。

未だにペコペコ頭を下げる山田先生に「大丈夫、ちゃんとしますから」と答えて、最前列ど真ん中と言っある意味最悪の席で立ち上がる。

ここまでは良い、極めて普通だ、問題は……。

「織斑一夏です、えー……よろしくお願いします」

問題は、クラスメイトが……いや、全校生徒、教員から用務員に至るまで、ほぼ全員が女だと言うことだ！

実際、俺の他のクラスメイト29名は全員、女だ。

そりゃそうだよな、『IS』は女しか使えないんだから、その操縦者を養成する学校は女しかいないに決まってる、おかしいのは俺だよ悪かったな。

「えー……以上です」

ガタタタンツ、と何人かの女生徒がズツコケた。

し、仕方無いだろ、他に女子相手にどんな自己紹介をしろと……あれ？

その時、俺は窓際に座る女子と目が合った。

と言うか、あの黒髪ポニーテールは、確か……。

「……箒？」

そう、箒ノ之箒だ。

小学校まで一緒だった、幼馴染と言う奴で……「凜とした」って雰囲気ピッタリ当てはまりそうな、典型的な大和撫子。

ただし、何と言うか目つきが鋭くて睨んでいるように見える……性格は、見た目通り「キツイ」。

「・・・まともに自己紹介もできんのか、お前は？」
「は？・・・いつ！？」

突然、何か固い物で頭をはたかれた。

こ、この速度、この容赦の無さ、そして声。
もしかしてと思って振り向いてみれば、そこには思った通りの人物
がいた。
げえっ、関　！？　じゃなくて・・・。

「ち、千冬ね・・・」

「学校では織斑先生と呼べ、馬鹿者が」

ちふゆねえ
千冬姉・・・俺の実の姉が、そこにいた。

黒のスーツとタイトスカート、狼を思わせる眼差しとスラリとした
体形。

箒とは別の意味の「鋭さ」を備えた、見るからに才色兼備な・・・
と言っか、何でここに？

「あ、織斑先生、会議はもう終わられたんですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

・・・って、先生！？

先生って言ったか今！？　そ、そんな話、聞いて無いぞ・・・と、
俺が抗議するよりも先に。

クラスの女子達が、黄色い声を上げた。

「キヤ　　ッ、本物の千冬様！　千冬様よ！」

「愛してます！」「美しすぎます！」「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れて北九州からこの学園に来たんです！」

「お姉様のためなら死ねます！」

・・・大人気、だった。

いや、まあ・・・仕方無いけどさ、でも当の千冬姉は「馬鹿が多いな・・・」とか言ってるし。

それをクールと勘違いしたのか、女子達はさらにヒートアップ。

み、皆さん？　あれはポーズじゃなくて本気で言ってるんですよ・・・？

いや、「もつと罵って」とか「躡けてください」とか言ってる場合じゃ無くてね？

「ほら、静かにしろガキ共・・・ちょっとした事情で入学式に間に合わなかった生徒を紹介する」

・・・あ、まだいるのか、どうせ女子だろうけど。

女の中に、男が1人、しかも3年間。

・・・いや、思ったよりキツいんだぜ・・・？

俺がそんな風にこれから先のことを思い悩んでいると、廊下から教室に入ってきて、千冬姉の隣に立ったのはやっぱり女子。

肩のあたりまで伸びた黒髪に、シャープで綺麗な顔立ちだけどキツさは感じない雰囲気。

むしろ、ほわほわと柔らかい感じ・・・制服はもちろんIS学園、1年用の青いリボンが胸元で揺れる。

太腿まで覆う黒い靴下・・・オーバーハイって奴か？ 良く分からないけど。

・・・あれ？ でも何だかどこかで会ったような・・・？

「えーっと、篠ノ之楓です。何年か行方不明になってましたけど、どうぞよろし・・・はうっ!？」

すぱーんっ、自己紹介を始めた瞬間に千冬姉に頭をはたかれた。

あ、少し親近感・・・じゃなくて、篠ノ之、楓？ 楓って言えば・・・。

・・・の、妹の？

ゆ、行方不明だったって・・・俺は慌てて、窓際の箒の方を見た。

・・・箒は、まるでそっぽを向くように窓の外を見ていた。

Side セシリア・オルコット（イギリス代表候補生）

織斑千冬、元IS日本代表にしてISの世界大会である「モンド・グロツソ」の総合優勝及び格闘部門優勝者、わかりやすく言えば元

「世界最強」。

現役を退いた後は、ここIS学園の一教師に甘んじている……とは言え、今でも彼女の崇拜者は多い。

『ブリュンヒルデ』……織斑千冬は、現役引退から数年経っても、敬意をもってそう呼ばれますの。

ISのイギリス代表の候補生、つまりエリートである私もわたくし織斑千冬
のことは認めざるを得ませんし、国からも「できれば仲良くするよ
うに」と言い含められておりますわ。

「……であるからして、ISの運用には……」

今は、山田先生がISの基本的に関する基本的な抗議をしています
わ。

織斑千冬……織斑先生は、教室の後ろで腕を組んで授業の様子を
見えています。

そちらももちろん、気になりますが……私が国から気にしると言
われているのは、別の人間。

織斑一夏、あの織斑先生の実の弟にして「世界で唯一ISを動かす
る男」……。

……でも正直、拍子抜けですわ。
基礎の基礎の部分の再確認の授業に過ぎませんが、彼はそれにつ
いていけない様子なのですから。

山田先生が「どこがわからない」と聞けば、「全部わからない」と
答える始末。

その上……。

「……織斑、入学前に渡した参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました！」

……と、バカ丸出しで答えて織斑先生に殴られています。

ISは現行の兵器を凌ぐ新時代の兵器、基礎知識も訓練も無しに動かせる物ではありませんのに。

本当にあの男がISを動かしたのでしょうか、どうにも信じられませんが。

所詮、男なんてそんなもの。

このエリートの私がこんな極東の島国に来たのは、あの男の調査も一つの目的ですけど。

正直、男であると言う以外に取り立てて報告すべき点は見つかりませんわね。

大体、男がISに乗るだなどと生意気に過ぎますもの。今は、物珍しさで優遇されて目立っているだけ……。

「はい、では2時間目は終了です。休憩時間ですよ。」

山田先生がそう言って、授業が終わりましたわ。

内容としては、代表候補生である私にはつまりませんでしたが。

まあ、なかなかお上手な講義だったのでは無くて？

・・・本当は、男などに話しかけるなど、私のプライドが許しませんけれど。

1時間目の休み時間は、ポニーテールの女子に先を越されて話しかけられませんでしたから、今、仕掛けることにしますわ。

これも国のため、私のプライドは一時置いて、話を聞いてみることにしますわ。

「ちょっと、よろしくて？」

・・・本当は、嫌で嫌でたまりませんが。

ああ、代表候補生も楽ではありませんわね。

私が声をかけると、その男は振り向いて・・・。

Side 篠ノ之 楓

東お姉ちゃん、私は今、凄く興奮してるよ。

学校、しかも教室でちゃんと授業を受けられる日が来るなんて。

子供の頃は病弱で寝たきり、それからは東お姉ちゃんについて行ってたから・・・。

人がたくさんいるのは少し怖いけど、それでもやっぱり楽しい。もう、ソワソワしちゃってもう、押さえきれないよね・・・！おおっといけない、さっきも千冬姉様に叱られたし、平常心平常心・・・。

「ねえねえ、楓ちゃんって呼んでも良い？」

「おおっ!？」

「・・・？ どうしたの？」

「い、いえ、何でも無いです、何でも無いですよ!」

「そっか、じゃあ良いや」

早速、クラスの人に話しかけられた。

こ、これは、お友達になるチャンス・・・かも。

私に声をかけてきたのは、何だかおっとりした感じの女の子。

袖丈がやけに長い制服 ある程度の制服改造は校則で許容

を着た子で、ネズミさんの髪飾りをつけた長い髪に、とても眠そうな目が特徴的。

・・・心無し、東お姉ちゃんに似てる気がする。

「あ、えっと・・・」

「あ、私？ 私はねー、のほこけ布仏 ほんね本音だよ」

「布仏さん、布仏さん・・・はい、覚えました」

「ありがとー、でも本音で良いよ」

「どういたしまして、本音さん」

おお、普通に会話できてる、できてるよ……！
このまま、お友達になれたりして……あれ？
……お友達って、どうやってなるんだろう？

「でねでね、楓ちゃんは どうして入学式に来なかったのかな、かな？」
「え、えー……道に迷って？」

「おお、楓ちゃんは方向音痴さんなのかな？」

「ちん……ああ、いや、そんなはずは……」

ただ学校と言う物に興奮してただけで、普段は……道に迷うなんて。

……ち、ちよつとだけしか。

それに千冬姉様にも会えだし、篝姉さんにだって……ああ、そう、篝姉さん！

慌てて振り向くと、窓際の座席で1人、窓の外を見ている篝姉さんを見つけろ。

最後に会った時と変わらない髪型と雰囲気、私のもう1人のお姉ちゃん。

私があここに来たのは、東お姉ちゃんの「お願い」のせいだけ……でも、篝姉さんにも会いたかった。

年に2、3回くらい、電話で話すくらいしかできなかったし、早速声を……。

「私を知らない！？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの

代表候補生にして入試主席のこの私を！？ 私の華麗な自己紹介が胸に響かなかつたと！？」

急に大きな声がして、教室が静まり返った。

何かと思えばこのクラス唯一の男子　　わ、そう言えば一夏さんとも同じクラスなんだよね、声かけなきや　　の前で、金髪の女の子が凄く怒ってた。

かすかにロールのかかった長い綺麗なプラチナブロンドと、透き通った青い瞳。

欧米人特有の肌の白さとスタイルの良い身体、全身から「私、優秀です」なオーラを放ってる女の子。

セシリア・オルコットって名前は知らないけど・・・イギリスの代表候補生なんだ。

代表候補生は読んで字のごとく、国家のIS代表の候補生のことだよ。

オルコットさんが、今まさに一夏さんに説明してる。

「つまり私は、エリートなのですわ！　泣いて頼むなら、優しくしてあげても良くてよ？」

・・・えっと、アレは学校で友達を作る時に言う台詞なのかな？
よし、じゃあ私も早速、えっと・・・な、泣いて頼むなら。

「何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから

「……入試つてアレか？ ISを動かして戦つてやつ？」
「それ以外に入試などありませんわ」
「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」
「は……？」

ざわっ……な、何だか教室の雰囲気が。
に、入試？ 入試……私は何か、東お姉ちゃんがいろいろしてた
ことしかわからないけど。
えっと、どれのことかな……？

「あ、貴方も……教官を倒したつて言うんですの！？ 入試で！
？」
「あ、ああ……たぶん」
「たぶんつて何ですの、たぶんつて」

あ、チャイムだ。
3時間目が始まる、オルコットさんは何か言いながら自分の座席に
戻る。

「楓ちゃん、じゃあまた後でね」
「あ、はい……また……」

そして当然、本音さんも座席に戻る。
くう、お友達になり損ねた！

まあ、でもまた後ですってことは話しかけて貰えるってこと……。

「……あ」

ふと、窓際の座席から篝姉さんが私のことを見ていることに気付いた。

笑顔で小さく手を振ったら、ぷいってそっぽを向かれた。

……あ、あれ……？

Side 千冬

3時間目は、ISで実際に使われる武装に関する講義……の前に、再来週のクラス對抗戦（もちろん、ISで、だ）のクラス代表いごうたいひょうを決めるつもりだった。

……が、何だこの状態は。

「納得できませんわっ!!」

どう言うわけか知らんが、オルコットが息を巻いている。

それはクラスのガキ共が私の弟……つまり一夏をクラス代表にしようとする推薦を重ねた後のことだ。

……本人はやりたがっていないようだが、それはどうでも良い、

推薦された者に拒否権など無い。

オルコット曰く、男がクラス代表など恥さらし以外の何者でも無い。クラス代表はそのクラスの実力ナンバー1がなるべきで、それには代表候補生であり「専用機」持ちである自分こそが相応しい・・・と言つのが言い分だ。

まあ、「実力ナンバー1がなるべき」と言つ部分には首肯してやつても良いが。

「物珍しさで男をクラス代表にするなんて・・・サーカスじゃありませんのよ!？」大体、文化としても後進的な極東の島国で暮らさなければならぬこと自体、私にとっては耐え難い苦痛ですのに・・・!」

「イギリスだつて島国だし、大したお国自慢無いだろ」

口を滑らせおつたな、馬鹿者が。

聞き流せば良いだろうに、一夏がオルコットの祖国を「侮辱」

先に日本を「侮辱」したのはオルコットだが したことに腹を立てたオルコットが、一夏に決闘を申し込んだ。

「・・・良いぜ、四の五の言つよりわかりやすい」

そして一夏も、それを受ける・・・何だこの流れは。

大体、一夏はまだ機体も無いと言つのにどう「決闘」するつもりだ、馬鹿が。

・・・まあ、一夏には政府が「専用機」を用意するらしいから、そこは問題無いだろうが。

・・・「専用機」。

代表・代表候補生や企業に所属する人間に与えられる専用のIS。特定の個人にしか使用できない、まさに「専用機」だ。IS学園でも、「専用機」を持っているのは数える程しかない。このクラスで言えば、オルコットと・・・一夏、そして・・・。

「・・・」

私の視線の先には、まだ実技試験を受けていないのに入学が確定している生徒がいる。

篠ノ乃楓、後で日程は伝えるが・・・ISさえ動かせれば基本は合格だ。

第一、アレは束の下でISについて叩き込まれた馬鹿だ。

一夏も似たような状態で入試を受けたが、それは形式として受けたに過ぎない。

その意味では、無意味な通過儀礼に過ぎない、が・・・。

・・・脳裏に、束の送りつけて来たデータの内容を思い浮かべる。

束は、本当に何を考えているんだろうな。

妹に個人所有の「専用機」を授けて、IS学園に送りつけてくるのだから・・・。

はぁ・・・疲れた。

今日の授業が終わって、自分に割り振られた寮の部屋に向かいながら、俺は溜息を吐く。

今日は本当に疲れた、女子にはジロジロ見られるし、変な奴・・・
セシリア・オルコットだっけ？ には、突っかかられるし。

しかも、来週の月曜に第3アリーナとか言う場所で勝負しなくちゃいけないとなった。

勝負自体は良いとして、ISバトル（最近はその言う名前の「スポーツ」として定着）なんてやったこと無いし・・・大体、教科書すら専門用語ばかりでさっぱりわからない。

「・・・まあ、やるしかないな。男が一度決めたことを撤回するわけにゃいかねーし」

教室でのことを思い出す、「男が女に（特にISで）勝てるわけが無い」と言わんばかりのあの雰囲気。

クラスの女子は皆、「セシリアに頼んでハンデつけて貰ったら？」とか言う始末だ。

しかもしれは、嫌味でも何でも無く・・・当然のこととして受け止められてる。

今の時代、男の立場は圧倒的に弱い、女尊男卑と言っても良いくらいに。

ISは現行兵器を鉄屑同然にした新時代の兵器、だからそれを扱える女性の立場が急上昇するのもわかる、IS（及び操縦者）の保有数が即軍事力・防衛力になる時代なんだから。

実際、ISを操縦できる可能性のある女性に対しては国も企業もこれでもかと言っくらいに優遇措置を取る、それもわかる。

だけど・・・国家の軍事力になるからIS操縦者、つまり女性は偉くて男性はいらない。

・・・それだけは、何か違うと思う。

「まあ、男と女で戦争したら男陣営は3時間で負けるだろうけど」

悲しい現実を口にしつつも、俺は頬をぱんつと両手で叩いた。

いけないいけない、思考がマイナスになっちまってたな。

とにかく、この1週間で基礎だけでも・・・き、基礎・・・基礎か・・・。

「・・・はあ、東さんも面倒な物を作ってくれたよなあ」

別に東さんが悪いわけじゃ無いけど・・・千冬姉の親友の顔を思い出す。

記憶の中にあるのは、何を考えているんだかわからない人を喰った

ような笑顔。

・・・あの人がISを開発したって言うの、わからなくも無いけど、イマイチ実感がわかない。

昔からやたらに天才だったのは覚えてるけど・・・そうだ、束さんだよ！

「箒と・・・あと、楓か」

今日、6年ぶりに再会した幼馴染2人のことを思い出す。

・・・って言っても、箒とはガキの頃に通ってた剣道の道場で良く一緒だったけど、楓とはあまり会ったこと無いんだよな。

確かアイツ、身体弱くて・・・今は、どうだかわかんねーけど。

と言うか、自己紹介の時の行方不明って、アレ何だろうな？

束さんは今も絶賛、失踪中だけど・・・。

小4の時に箒の家が引越してから全然連絡取って無かったから、今アイツらの家がどうなっているのかもわからないし・・・いやいや。

「はぁ・・・今日はもう良いや、とにかく寝よう」

とにかく、疲れた・・・もう寝たい。

えっと、千冬姉が用意してくれた寮の部屋「1025室」に向かう。部屋に入った後、俺は真っすぐにベッドに向かった・・・。

Side 篠ノ之 篇^{ほつき}

・・・6年ぶりに、一夏に会った。
休み時間にほんの少しだが、話せた。
私だとすぐにわかったと言ってくれた、髪型が同じだったからと・
。

「・・・良く、覚えていたものだ」

私の髪は、頭の後ろで結んでも腰まである程に長い。

それこそ、子供の頃から変えていない・・・もしかしたらと、思っ
ていたから。

一夏と会えた時、すぐに気付いてくれるだろうかと・・・。

・・・はっ!?

いやいやいや、一夏は関係無いぞ、一夏は、うん。

私は単純に、この髪型が気に入っているだけだ、それだけだ、うん。
・・・ま、まあ、覚えていてくれて、良かったと思わなくも無いが。
いやいや・・・軽く頭を振って、私はリボンを解く。

制服と下着を脱いで、タオルを手に寮の部屋のシャワールームへ。

「・・・ふう」

熱い湯のシャワーを浴びると、小さく息を吐く。

ぼんやりと湯を浴びながら考えるのは・・・やはり、一夏のこと。当たり前だが、6年前とは何もかも違う。

記憶にあるよりずっと大人で・・・そして、男らしくなっていた。

ニュースで見た時は、本当に驚いた。

忘れるはずも見間違えるはずも無い姿がテレビに映ったのだ、驚きもする。

世界で初めて、ISを動かした男として・・・。

「・・・だが」

キュツ・・・蛇口を捻って、湯を止める。

ポタポタと髪先から垂れる雫を見つめながら、私はもう1人のことを考えた。

そのもう1人とは・・・楓のこと。

この数年間、姉さん・・・「IS開発者」篠ノ乃 束と行動を共にしていただろう、双子の妹。

年に2回か3回、短い時間だが電話で話したことはある。

姉さんとは、1度も話したことが無いが・・・いや、それ自体はどうでも良い。

もっと、重要なのは……。

「……楓……」

……昔は、身体の弱かったあの子のためにと世話を焼いたこともある。

それなりに、姉妹仲は良かったと思う。

少なくとも、私と姉さんの関係よりはマシだったはずだ。

ただどあの日、姉さんが楓を連れ出して、どこかに消えて……それ。

……ボスンッ。

……？

今、シャワールームの外から、何か音がしたか？

「誰か、いるのか？」

シャワールームの外に声をかけながら、バスタオルを身に纏う。

……ああ、そう言えば今日から相室になるんだっただか、元々2人部屋だしな。

となると、外にいるのは同室になる者か。

まあ、1年間一緒に生活するんだ、それなりの関係を築いた方がいいだろう。

「・・・こんな格好ですまないな、私は篠ノ乃箒と・・・」

シャワールームの外に出て、部屋の中にいるだろう同居人に向けて挨拶する。

そして濡れた髪を払いながら顔を上げると、そこには・・・。

Side 篠ノ之 楓

放課後、私はホクホク顔で寮の廊下を歩いていた。

と言うのも、本音さんが彼女のお友達に私を紹介してくれて、その子達とも仲良くなれたから。

これって、お友達になれたってことかな？

だとしたら嬉しいなあ、同年代の女の子のお友達なんて初めてだから。

東お姉ちゃんはお友達とかいらない人だけど、私は普通に嬉しい。

明日は私の実技試験をやるって千冬姉様が言ってたけど、ISが動かせれば良いらしいから。

えっへへー、お友達げつと！

そして同時に、買って所でドロップ缶もげつと！

「学校って楽しいなあ、本当に本当に楽しいなあ」

私のだつて言う寮の部屋に戻ったら、東お姉ちゃんに秘匿通信で教えてあげないと。

まあ、メールを送り合うだけで電話とかじゃ無いけど・・・でも、その前に。

篤姉さんに会いたいな、昼間は結局、話せなかったし。

電話で話せなかったこととか、近況報告とか・・・東お姉ちゃんのこととか、いろいろ。

たくさん、お話しすることがあるからね。

えーっと、千冬姉様によれば姉さんの部屋は「1025室」で・・・。

「かりつとね・・・」

口の中に早速一粒、飴を放り込む。

普段は地図に弱い私も、飴を舐めてる間は大丈夫。

糖分を摂取した脳が活性化して、断然OKな状態に・・・。

「・・・お？」

とぼとぼ歩いていると、廊下に人だかりができている場所を見つけた。

廊下のそれぞれの部屋から女生徒が顔を出して、一つの部屋を見ている。

その部屋からは、何かドタバタと言う音が・・・かりっと、飴を上下の歯の間に入れてカリカリする。

次の瞬間、激しい物音がしていた部屋から何かが転がり出て来た。

・・・ドアが物凄い勢いで開いて、何かがまさに「転がり出て」きたの。

それは反対側の壁に激突する「いつてえ!？」と、唸りながら身悶えてた。

と言うか、一夏さんだった。

かりっ・・・小さくなった飴玉を、噛み潰してから飲み込む。

「・・・あつ、もしかしてこれって、最近の学校で流行ってる何かのゲームで」

「んなわけ無いから!・・・って、楓?」

「お久しぶりです、一夏さん。実に久しぶりなのですが、ゲームで無いならいつたい何を・・・と言うか、箒姉さんはどこにいるか知りません?」

「・・・まさに今、その箒に殴られた所なんだが・・・」

「お?」

一夏さんの指差した先には、何故か剣胴着姿の箒姉さん、手には木刀を持つてる。

もしかしてあの木刀で一夏さんを殴打したのかな、だとしたら凄く

危ないよ篝姉さん。

長い髪に鋭い目、数年ぶりに会う私の双子の姉が、そこにいた。

「篝ね……」

声をかけようとする、篝姉さんは即座にドアを閉めた。

私を一瞥して、驚いた顔……それからキツイ顔になって、即座に。

……あ、あれ？

「……機嫌、悪かったのかな……？」

「まあ、良くは無いだろうけど」

一夏さんは、篝姉さんに何をしたのか……でも、今の篝姉さんの態度は、あくまで私に向けられていた気がする。

その後聞いた話だと、篝姉さんと一夏さんはこれから同じ部屋なのだとか。

あー、私知ってるよ、同棲って言うんだよねそれ。

……結局。

その日は、篝姉さんと一言も話せなかった……。

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」（後書き）

篠ノ之 楓：

はい、どうも、楓です。

今日は、ウチの家と家族環境について説明したいと思いまーす。

東お姉ちゃん、箒姉さんの事以外はあんまり教えてくれないので、自分で調べてみました。

篠ノ之家・・・

篠ノ之家は、神社の神主の家系です、つまり私達姉妹は巫女さんなんですな。

私と東お姉ちゃんは全然ですけど、箒姉さんはお神楽を舞ったりしてましたよ。ご近所ではお祭りとか・・・割と親しまれてた家みたいですね。あと、剣術道場もしてましたよ、篠ノ之の流派はもともと、女性のための古い剣術でした。神に捧げる舞と古武術がくっついて剣術に変わったらしいです、剣舞・・・と言うような意味で。だから私達姉妹の中では、箒姉さんだけが正統な篠ノ乃流の継承者たり得ると言うわけですね。

で、家族。

私は東お姉ちゃんと世界を巡ってましたが、箒姉さんはずっと日本に。政府の重要人物保護プログラムで両親と各地を転々としてたらしいですね。東お姉ちゃんがプログラムの実行機関に「何か」してからは、千冬姉様のいるIS学園に・・・と言う感じだそうです。でも、何故か両親はそのまま政府の保護下に放置・・・まあ、東お姉ちゃんにも何か考えがあるんだろうけど・・・。

篠ノ之 楓：

はい、今回はここまでです。

次回から、学園生活がスタートですね。

えーと、私は束お姉ちゃんにいろいろと教えて……。

あれ？ データ消えてる……。

篠ノ之 束：

データは全部頂いたぜー！ ばーい、束おねーちゃん。

篠ノ之 楓；

えええ……。

第2話：「クラス代表決定戦・前編」

第2話：「クラス代表決定戦・前編」

Side 織斑 一夏

入学式の翌日、つまりは俺が幼馴染の箒との同居（と言うか、同室？）になってから一晩。

あれ以来、箒が機嫌が直してくれない。

確かにシャワー上がりの姿を見てしまったのは俺が悪い・・・悪いのか？ むしろ幼馴染とは言え年頃の男女を同室にする学園側に問題があるんじゃないだろうか。

まあ、この学園はそもそも男が通うことを想定して無いから・・・

何せ、男性用トイレも無いってんだから・・・あと、大浴場も使えない。

どこを見ても女性、女子、女・・・。

ちなみに物心ついた頃から親がおらず、千冬姉と2人暮らした俺は女子に夢を見る程ウブじゃない。

なので、リアルに疲れるばかりで・・・。

「・・・と言うわけで、ISは宇宙での活動を想定して設計されているので、特殊なエネルギーバリアで身体を包んでいて・・・」

ちなみに今は授業中、セシリアとの決闘に向けて頑張ろうと意気込んでは見た物の。

・・・さっぱり、わからない。

千冬姉に貰った参考書で予習した分、単語がわかる程度で・・・根本的な所が、さっぱり。

だけど他の皆はうんうん頷いてるし、理解できてる様子だ。つまり、俺だけがついていけない。

窓際の幼馴染、箒を見ても・・・特段、困った様子はない。

つまり、今やってるのはそれくらい基礎なわけで。

・・・結論、俺1人じゃどうにもならない。

「それからISにも意識のような物があって、対話・・・つまり、一緒に過ごした時間だけ、わかり合う・・・操縦者の特性を、把握しようとするわけなんですね。これがいわゆる『コア』に経験を積ませると言われることで・・・練習は裏切らないと言ったことですね」「先生、それって彼氏彼女みたいな関係ですかー？」「え、えー・・・と、そうですね。でも私は経験が無いので、わかりませんが・・・」

彼氏彼女・・・恋人とか恋愛とか、そういう話になると空気が華やかく。

と言うか、甘くなる・・・色で言うと黄色か桃色？

一言でいえば、「女子校」的な雰囲気。

まあ、男って俺1人だしな・・・むしろ、俺が邪魔な感じだ。

その割に、周りから物珍し気にジロジロみられるもんだから・・・
困る。

何と言うか、いたたまれない。

「んんっ、山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

教室の後ろに立っていた千冬姉が、咳払い一つで教室の空気を引き
締める。

このあたりは流石だと思う、おかげで助かった。

俺は小さく息を吐くと、教科書に目を戻して・・・。

・・・やっぱり、わからない。

まあ、ここに来て初めてISの勉強を始めたわけだから、仕方が無
い、はず。

でもセシリアとの勝負は、来週なわけで。

困り果てた俺は、もう一度、篝の方を見る。

「・・・っ」

一瞬だけ目が合って・・・って、おい、目を逸らすなよ、傷付くだ
る。

はぁ・・・とにかく、篝に教えてくれるよう頼んでみよう。

同じ部屋だし、教えて貰う分には不自由しない・・・と、思う。

千冬姉に頼んでも教えてくれるだろうけど、忙しいだろうし・・・

鼻屑だと思われるのもアレだし。
でも箒って、まだ機嫌直って無い、よな？

憂鬱な気分になりながら、教室を歩く山田先生の姿を追いながら少し後ろを見る。

すると、視界の隅の座席に見た顔がいた（いや、クラスメイトは全員見た顔だが）。

箒と似た顔だが雰囲気は真逆、むしろ束さんに近い幼馴染。

篠ノ之楓・・・何故か背筋を伸ばしてニコニコしながら両手で教科書を開いてる。

・・・何がそんなに楽しいんだ・・・？

「・・・はあ」

溜息を吐いて前を向いて、教科書のページを開きながら、ふと昨夜のことを思い出す。

箒に会いに来たらしい楓と、少しだけ話した。

箒自身は、どうしてか楓と会おうとしなかったけど。

・・・後で聞いても、箒はその件については何も答えてはくれなかった。

まあ、元々機嫌、悪かったしな。

で、楓からは束さんが元気だと言うことを聞いた。

あの人が元気で無い所が想像できないけど、元気だと聞いて悪い気はしない。

楓もすっかり身体も良くなったって言うし、良いことづくめだ。

何はともあれ健康が1番、だからな。

Side 篠ノ之 楓

はあ、、「授業」って楽しいなあ！

こう、本当に教科書に沿って進めて行くんだね。

学校にあんまり来たことが無いから、感無量だよ。

まあ、でも・・・ぱらぱら、教科書をめくってみる。

・・・ISを完全に「兵器」扱いしてるのは、ちよつとだけ不満。
だって、東お姉ちゃんはそのためのためにISを作ったわけじゃ
無いもの。

「おお、楓ちゃんがご機嫌だお」

「うんっ、学校って面白いね！」

「はわ、え、笑顔が眩しい」

休み時間には、お友達とお喋り。

本音さんはお友達が多い人みたいで、おかげでたくさんのお友達に
紹介して貰えた。

本音さんには感謝感激、ちなみに本人が私に声をかけてきたのは。

「生徒会長に聞いて、興味あったからだよ」

とのこと。

ははあ、生徒会長、私の入学資料でも見たのかな。
実技試験、ただだけど。

何でも本音さんは「生徒会」のメンバーで、しかも整備科志望なのだとか。

ちなみに、私も整備科志望。

2年生からは科が別れると言う話で・・・本音さんはお姉さんが整備科にいるとか。

私も東お姉ちゃんの影響でISは動かすより整備したりする方が好きで・・・親近感が湧く。

私がそう言つと。

「じゃあ今度、かんちゃんを紹介するよあ」

「かんちゃんさん？」

「うん、4組の子。きつと仲良くできると思つよ」

本当に本音さんはお友達が多い、まだ学校が始まって2日目なのに。うーむ、この間延びした独特な喋り方が人を引き寄せるのだろうか・・・。

私も、見習った方が良いかな・・・？

「ええ　　っ、織斑君って専用機が貰えるんですか!？」

「1年の、しかもこんな時期に!？」

その時、一夏さんの周辺から大きな声が聞こえた。

そこには千冬姉様と山田先生もいて、前者はうるさそうに、後者はアワアワしながら一夏さんに話しかけてる。

「・・・で、だ。本来なら専用ISは国が企業に所属する人間しか与えられないが、お前は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく・・・」

専用機、専用IS。

読んで字の如く、個人に与えられる専用のISのこと。

ISはコアの数(467個)しか作れないから、つまりはどう頑張っても世界で467人しかISを持ってない。

東お姉ちゃんは、467個目を作ってから国にも企業にも提供しなくなつたから・・・。

世間的にはいろいろ言われてるけど、個人的には飽きただけだと思う。

「あ、あの、先生。篠ノ之さん達って、篠ノ之博士の関係者なんですか・・・?」

「ああ、2人ともアイツの妹だ」

おおっと、いきなり個人情報漏洩・・・いや、別に隠してないけど。

東お姉ちゃんは、ISのコアが作れる唯一の人間。
そして、今も失踪中（今や私にも居場所がわからない）。
でもいろいろ言われるかと思っただけど、思ったほど私、何も聞かれ
なかったな……。

「す、すごいっ、このクラス。有名人の身内だらけじゃん!？」
「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？ やっぱり天才!？」
「篠ノ之さん達も天才だったりする!？ 今度ISの操縦教えてよ
!」

そして、にわかに活気づく1年1組。

篝姉さんと、あと私の所にもたくさんの女生徒がやってくる。
おお、こんなにたくさんの人に囲まれると……緊張する。
子供の頃も東お姉ちゃんと一緒にいた時期も、人に囲まれた経験が
無いから。

でも、東お姉ちゃんは本当に人気者なんだね。
それは嬉しい、だから私は話せる範囲で東お姉ちゃんのことを……。

「あの人は関係無い!!」

耳元で叫ばれたかと錯覚するような、大きな声。
声の主は、篝姉さん。

「・・・大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃ無い。教えられるようなことは何も無い」

静まり返る教室、篝姉さんは足早に歩き出して・・・どうしてか一旦、私の方へ。

お、お・・・？

何か話しかけられるのかと思えば、私の目の前を通り過ぎてそのまま廊下へ。

篝姉さんに押しつけられるような形で、私に寄ってきていた生徒が私から離れる。

・・・？

「ね、姉さ・・・」

声をかけようとしても、にべも無く教室の扉が閉められる。うう・・・昨日もだけど、今日も篝姉さんと話せないかも・・・。と言っか篝姉さん、授業だよー・・・？

「・・・ほら、不満そうにするなガキ共、授業だ授業」

後には、千冬姉様の手を打つ音が、虚しく響く・・・。と言っか、不満って何？

不満そうにする箇所、どこかにあったかな？

Side セシリア・オルコット（イギリス代表候補生）

男が、生意気にも専用機！

データほしさ物珍しさでの提供と言うことらしいですが、それにしても不愉快ですわね。

専用機持ちと言う意味で、あんな男と私が同格に置かれたと言うことなのですよ……。

……まあ、良いですわ。

専用機持ちにも、格の違いがあることを教えて差し上げますわ。それに同じ条件で戦った方がフェア……そして嫌でも実力の違いを思い知るでしょうから。

男が女に勝てるなんて、あり得ないのだと言うことを。

「安心しましたわ、まさか訓練機で対戦するとは思っていなかったでしょうけど？」

授業が終わった頃を見計らって、あの男に声をかける。

織斑一夏、不愉快にも世界中が注目していると言う男に。

「私も専用機持ちですから？ 訓練機を相手にするのもフェアではありませんからね」

「へー……」

「馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーとは思っけど……どうすげーのかわからないだけで」

それを一般的に、馬鹿にしていると言うのではなくて!?

……ふう、いけませんわ、庶民、それも男に感情を乱すなんて私らしくも無い。

ま……男ですから、知らないのも無理はありませんわね。

専用機は、極端に言えば世界人口60億の中で選ばれた467名にしか与えられない稀少な機体。

代表候補生の中でも、専用機を与えられるのは私を含めてほんの一握り。

すなわち、エリート中のエリートにしか与えられない特権。

女性優遇のこの時代、専用機持ちはある意味で国家首脳よりも強い権限を持っていますのよ?

それを、こんな男などに……本当に気に入りませんわ。

「……そう言えば貴女、篠ノ之博士の妹さんなんですってね?」

どう言うわけかこの男……織斑一夏の傍にいる篠ノ之箒と言う少女に、声をかける。

入学時に見た名簿と自己紹介の時にもしやと思っっていました、先程の休憩時間の騒動で言質を取れましたもの。

何しろ、日本人の名前の特徴とか、まだ良くわかりませんの。

とにかく、この篠ノ之箒と言う少女はあの稀代の大天才、篠ノ之束博士の妹。

ISの開発者にして世界唯一のコア製造者、各国が血眼になって探している、あの篠ノ之博士の。

ISの保有数が軍事力の大きさに直結する現在、篠ノ之博士を味方に引き入れた国家が覇権を握るのは自明。

だからこそ、その妹である篠ノ之箒はイギリスの人間として放置できない……。

「妹と言うだけだ」

「……ま、まあ、どちらにしてもこのクラスの代表に相應しいのは私、セシリア・オルコットであることをお忘れなく」

とりあえず言いたいことは言いましたし、こんな男の近くからはとっとと離れるが吉ですわ。

……べ、別に篠ノ之箒の目つきに気圧されたわけではありませんでしてよ？

その所、誤解無きように。

……後で、もう1人の妹さんの方に声をかけましょう。

篠ノ之箒よりは、とっつきやすそうでしたもの。

……いえ、別に篠ノ之箒が怖いとかそう言うわけではけしてなくてですね……。

とにかく、誤解無きように！

昼休みになると、一夏は私を昼食に誘ってきた。

私は良いと言うのに、無理矢理・・・他のクラスメイトも誘おうとした所を見るに、今日の休み時間での一件以来クラスで浮いていた私をフォローしてくれようとしたのだと思う。

好意は嬉しいが・・・クラスの女子は私では無くて一夏と食事に行きたかっただけだと思う。

だから良いと言ったのに、一夏は私の手を離してくれなかった。結果、恥ずかしさの余りに、その・・・古武術で一夏を床に投げってしまった。

それを見たクラスの女子は散ってしまって・・・一夏は溜息を吐いていた。

わ、悪いことをしてしまったか、呆れられてしまったらどうか・・・？

「よし筈、飯を食いに行くぞ」

「い、いや、私は良いと・・・」

「黙ってついてこい」

「・・・む」

そして最終的には、一夏と2人きりで食堂で昼食を取ることになった。

いや、別に2人きりになるのを狙ったわけでは無くて・・・そう、これは一夏が無理矢理、故に私は悪く無い。

「良いか？ 頼まれたからって俺はこんなこと、普通はしないぞ？ 箒だからしてるんだぞ？ 幼馴染で同門なんだからな」
「べ、別に・・・頼んで無いだろ」

幼馴染で、同門だから。

一夏はそう言った。

私の家は、剣道の道場をやっている・・・子供の頃、一夏とそこで一緒だった。

男の子にイジめられていた私を、助けてくれたりとか・・・まあ、いろいろあった。

・・・懐かしい、な。

楽しかった、毎日がドキドキして・・・本当に。

・・・姉たはねさんが、ISなんか作るまでは。

そのせいで、一夏とも、父さんや母さん、それに楓・・・・・・・・離れ離れに、一家離散だ。

私の幼少時代は、そこで終わったんだから。

「そっぴやさあ」

「・・・なんだ」

いけない、せつかく一夏が昼食に誘ってくれたのに。

私は慌てて定食の味噌汁に口をつける。

「ISのこと教えてくれないか？ このままじゃ来週の勝負で何もできないまま終わっちゃう」

かつ・・・と、身体が熱くなるのを感じた。

一夏が私に、ISのことを教えてほしいと頼んできた。だけど私は。

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

違う、こんなことが言いたいわけじゃないのに。

・・・自分が嫌いになりそうで、ほうれん草のおひたしを箸でつつく。

「頼むよ、篤、なあ・・・」ねえ、キミ「・・・へ？ 俺ですか？」

「キミって噂の子でしょ？ 代表候補生と試合するって本当？」

「・・・？」

その時、先輩 リボンの色からして、3年生 が1人、話しかけて来た。

名前も知らない、たぶん、一夏も知らない。

良く分からないが、一夏の隣の椅子に図々しく座って・・・な、何なんだ？

「キミってさ、IS稼働時間いくつくらい?」

「え? えーっと、20分くらい?」

「それじゃあ無理よ、稼働時間」上達・強さだもの」

ISの稼働時間は、操縦者の熟練度に比例するのは確かだ。

昔でいえば戦闘機乗りの飛行時間、それはISでも変わらない。

代表候補生クラスになれば、300時間は最低でもISの稼働訓練を受けているだろうな。

「・・・で、さ? 私が教えてあげようか、ISのコト」

「・・・!」

突然、その先輩がまるでか、一夏に身体を擦り寄せるようにそんなことを言った。

さつきとは別の意味で、身体が熱くなる。

一夏自身は特に何も感じていないような顔をしているが、私は気が
気じゃ無い。

「結構です。私が教えることになっていきますので」

「あ、教えてくれるの?」

「あれ? でも貴女1年生でしょう? 私の方が上手く教えられる
と思うよ?」

先輩の言葉に、たじろぎそうになる。

確かに、1年生が教えるよりも3年生が教える方が良いと考えるのが普通だ。

それに私自身、そこまでISに乗った経験があるわけじゃない。少なくとも、代表候補生クラスには及ばない。

だけど、このままだと一夏がとられる。

せつかく、一夏と話ができるのに・・・何か、何か無いか。

私が3年生よりもISについて詳しいと、わからせる何か・・・。

「・・・私は」

・・・どれだけ考えても、1つしか無かった。

でもそれは、とても身勝手で・・・本当に、嫌で。

だけどそれしか思いつけない自分が、とてつもなく・・・。

「私は、篠ノ之束の妹ですから」

さつき、クラスであれ程「関係無い」と啖呵を切っておきながら。都合の良い時だけ、姉たばねさんの名前を出す。

「篠ノ之つて・・・え、ええ!？」

「・・・ですから、結構です」

「そ、そう・・・それなら、仕方無いわね」

先輩が、私の言葉に・・・姉たばねさんの名前にたじろいで、去って行く。その背中を見つめながら、私はどうしようも無く嫌な気分になっていた。

「何だ・・・教えてくれるのか？」

「そう言っている」

一夏の言葉に叩きつけるようにそう返して、私は再び味噌汁を啜った。

・・・一夏の顔を、見れなかったから。

Side 一夏

放課後、箒に剣道場に来いと言われた。

いや、俺はISのことを・・・と言おうとしたら、「一度、腕が鈍っていないか見たい」と返された。

その後は「見てやる」の一点張りだったもんで、俺は了承するしか無かった。

千冬姉と言い箒と言い、俺の周りには強情な女しかない。そう言う運命なのかもしれない、やれやれだ。

「行くぞ」

「ああ」

放課後、剣道の道着やらタオルやらを取りに一旦、寮の部屋に戻った。

・・・まあ、つまりは同じ部屋なのだけれども。

やっぱりこれ、問題あるよなあ・・・。

筭だって嫌だろうし、早く個室を用意してくれない物が・・・。

いや、本当は個室が用意できるまでは自宅通いの予定だったんだよ。でも家にいると日本政府とか各国大使館とか研究所から、「生体を調べさせてほしい」って人が押し掛けてくるんだよ、誰が頷くか馬鹿。

いくら「世界初の男性IS操縦者」だからって、人を実験材料みたいに言うなよ。

・・・で、千冬姉によって無理矢理、筭の部屋に押し込まれたわけ。

普通、女の子いれるだろ・・・妹の楓とか、でもそう言ったら。

「姉妹や血縁者を同じ部屋にしてはならない」

・・・と言う規則を示されて、そうですかーと引き下がらざるを得なかった俺である。

ああ、そつだ楓と言えば・・・。

「・・・なあ、篤」

「なんだ」

「楓とは話したのか？」

「・・・」

「・・・おい」

「・・・」

「・・・無視ですか、そうですか。」

束さんのこともそうだけど、篤は楓のことが会話に上ると黙っちまうんだよな。

篤と2人、寮の廊下を歩きながら腕を組んで考える。

えーっと、確か束さんがISを作った小4の頃に転校してからのことを、俺は良く知らないんだよな。

日本政府の重要人物保護プログラム・・・だっけ？ で、いろんな場所を転々としていたってことしか。

だから中3の時、新聞で篤が剣道で全国優勝した記事を見た時は驚いたぜ。

「・・・いや、今はその話は良いな。」

しかしアレだ、親に捨てられて千冬姉と2人暮らしだった俺に言わせると、姉妹仲が良くないって言うのは気になるんだよな。

どうにか、話だけでもさせられない物か・・・。

「なあ、ほう・・・き？」

「・・・」

その時、箒が立ち止まった。
表情は強張っていて、その視線を追うと・・・そこには。

何人かの生徒に囲まれた、楓の姿があった。
何してんだ、アイツ・・・？

Side 楓

・・・どうしよう、東お姉ちゃん。
今日も、箒姉さんとちゃんとお話できなかったよ・・・！
数年ぶりの再会だから、もう少しこう、何かあると思ってただけ
ど。

「東お姉ちゃんだったら、有無を言わず抱きついて来るのに・・・」

そんなことをブツブツと呟きながら、寮の自分の部屋から箒姉さんの部屋に向かう。

まあ、良く考えてみれば箒姉さんは東お姉ちゃんと違ってスキンシップとか好きじゃ無かったしね。

むしろ東お姉ちゃんが過剰だと思う。

あれ？　じゃあ篝姉さんの反応が常識のある普通の行動なのかな・・・？

それはそれとして今日こそ、篝姉さんとちゃんとお話しないと・・・。
東お姉ちゃんから、篝姉さんにいろいろと言伝ても頼まれてるし。
何より、私が篝姉さんといろいろお話したいし。

「あ、あの子じゃない？」

「ホント？　噂になってる子？」

「・・・お？」

途中、寮の廊下で何人かの生徒に鉢合わせた。

私と色の違うリボンをつけてるから、上級生だね。

2年生か3年生かは、ちよっと自信が持てないけど。

「ねえねえ、ちよっと良い？」

「あ、はい、何でしょう？」

「貴女、篠ノ之博士の妹さんって本当？」

「えーっと・・・まあ、はい、そうです」

噂とは何のことやらさっぱりだけど、東お姉ちゃんの妹って意味ならその通り。

隠す意味も無いし、と言うか調べれば一発だしね。

学校って噂が広まるの早いって聞いてたけど、本当なんだね。

ちょっと感激、生で見れるなんて。

私が頷くと、先輩方は黄色い声を上げる。
おおう、ちょっと耳に来た。

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？」

「やっぱり天才？ 頼んだら会わせてくれたりする？」

「と言うか、貴女も当然ISに詳しいのよね？」

矢継ぎ早の質問、どれもこれも答えにくい物ばかり。

まず、東お姉ちゃんがどんな人かって言われても困る。

私のお姉ちゃんでも・・・そりゃあ天才なんだけど、でも私からしても変な人だし。

会いたいと言われても、私も居場所知らないし。

と言うか、私もだけど東お姉ちゃん、出てきたら捕まるんじゃないかな。

この間なんて、どこかの国の戦闘機に撃墜されそうになってたし。

で、最後のは・・・私が東お姉ちゃんに及ばないのは私が1番良く知ってるし。

私知ってることなんて、基本的には教科書に全部書いてるし。

・・・それ以外で、何を聞きたいのかさっぱりわからない。

うーん、でもちゃんと答えないと・・・。

「・・・何をしているんですか？」

その時、聞き覚えのある声がした。
顔を上げると、そこには。

「・・・箒姉さん」

剣道の道具らしい荷物を持った箒姉さんと、一夏さんがいた。
一夏さんはのほほんとしてたけど、箒姉さんの目が凄く険しい。

「箒って・・・あ、もう1人の方じゃ無い？ あと、男の子だ・・・」

「ホント？ ねえ、貴女も篠ノ之博士の妹さん・・・」

「妹と言っただけですが、何か？」

「あ、いや・・・」

ギロリ、そんな擬音が聞こえて来そうなくらいの目つきで先輩方を
睨みつける箒姉さん。

隣で、一夏さんが溜息を吐いてる。

箒姉さんの剣呑な雰囲気にもまれたのかどうなのか、先輩方はそそ
くさと去って行った。

「あ、えと、箒ね・・・」

「・・・」

スタ、スタ、スタ・・・箒姉さんは私の横をあっさり通り過ぎて行った。

・・・ま、またお話できなかつた。

「あー、うん。元気出せよ楓」

「一夏さん・・・」

軽く落ち込んでみると、一夏さんがポンツと肩を叩いて慰めてくれた。

「俺達これから剣道場の方に行くんだけど、一緒に行くか？」

「あー・・・でも私、先生に呼ばれてまして。その前に箒姉さんとお話したかったのに・・・」

「そ、そっか・・・ま、まあ、たぶん箒も照れてるだけだから、すぐに話せるようになるって、な？」

「はい・・・」

照れてる・・・照れてるのかなあ・・・？

まあ、もう少し頑張ってみようと思う。

それに・・・今の、たぶん・・・。

第3アリーナ、来週の月曜日には一夏とオルコットが対戦することになる場所だ。

とは言え今日は、別の目的でここを使用させてもらう。

その目的とは、篠ノ之楓の実技試験だ。

本来ならあり得ない処置だが、政府の意向で許可が下りた。

おそらく、「篠ノ之束の妹」を掌中に収める好機だと思っているのだろう。

。 篤と楓、あの双子を入学させて何を企んでいるのかは知らんが……だが下手な手出しができないことも、わかっている。

「束が黙っているはずも無いからな……」

「……？ 何か言いましたか？」

「ああ、いや、何でも無い」

……アレの姉、篠ノ之篤がIS学園に入ったのは、他に束が納得できる場所が無かったからだ。

政府や委員会による度重なる詰問と転居、それによってアレが受けた精神的な苦痛は相当な物だったろう。

そしてあるルートからそれを知った束は……。

篠ノ之箒の獲得に関係しようとした企業・組織を、1日で全て壊滅させた。

それも一滴の血も流さず、死者も出さず・・・ただ、物理的に壊滅させた。

その方法は、誰にもわからない。

それで失われたデータと機材は、金額にすると兆を軽く超える。もちろん、ドル換算でな。

・・・私がいるIS学園だけが、確保できてしかも安全な場所だった。

「・・・山田先生、準備は？」

「あ、大丈夫です」

アリーナの中央に、1機のISがいる。

それに乗っているのは山田先生で、彼女は元々入試の教官だった。加えて言えば日本の代表候補生だったわけだが・・・それは良いな。

乗っている機体は『ラファール・リヴァイヴ』・・・フランス製のISだ。

ネイビーカラーをした4枚の多方向加速推進翼が特徴的で、量産型ISの中では世界第3位のシェアを誇る機体、操縦のしやすさと汎用性の高さが売りの第2世代IS。

「専用機が相手だと、ちょっとキツいかもですけどね」

「冗談を、山田先生なら専用機持ちのガキに負けはしませんよ」

実際、山田先生は強い。

私だって油断すれば負ける・・・まあ、ここ数年はISに乗っていない私が言うのも、おこがましいが。

その山田先生がこれから模擬戦・・・試験をするのは、篠ノ之楓とその専用機。

スペックや機体特性などは束の送りつけたデータで見ているし、コアも束所有の登録済の物。

書類申請上は、「試験機」として篠ノ乃楓に「貸与」と言う形になっている。

国籍をどこにするか、一夏の専用機と合わせて国際間で話し合われているが・・・。

・・・下手なことをすると束に制裁されかねないから、話し合いは進んでいないのが実情だが。

「お待たせしましたっ」

「遅い！ 5分前行動が基本だと教えなかったか！」

「す、すみません！！」

指定した時間の少し前に、受験者・・・つまり、篠ノ乃楓がやって来た。

そのまま私達の前に来て、背筋を伸ばして立つ。心無し、緊張しているようにも見える。

・・・当たり前だが、2人の姉のどちらとも違う反応だな。

「これより試験を行う。基本的にはISを動かせば良いが・・・
一応、こちらの山田先生と模擬戦をして貰う」
「よろしくお願いしますね」
「は、はいっ、お願いします!」

物凄い勢いで頭を下げる・・・その後、山田先生とペコペコし合っ
て止まらなくなったが。
まあ・・・とにかく、見せて貰おうか。

「では、ISを起動しろ・・・お前の姉には許可を取ってある、安
心してやると良い」
「・・・はい」

私の言葉に、篠ノ之楓は左手の中指に嵌めていた黒い指輪を撫でた。
それが、待機状態らしい。
専用機として「最適化」したISは、量子化して形態を変える。
基本はアクセサリーの形になる・・・ああ言う、指輪とかにな。

「・・・おいで、『黒叢』」

小さな眩き、同時に操縦者の身体が光の粒子に包まれる。

現れるのは、インフィニット・ストラトス・・・IS。
それは・・・。

Side

篠ノ之

束^{たばね}

んー・・・暇だなあ、楓ちゃんもいなくなっちゃったしなー。
引っ越しもとりあえず終わったし、篝ちゃんや楓ちゃんやいっくん
にちよっかい出しそうな所も全部潰しちゃったしなー。

ちーちゃんが怒るから、死亡者はゼロ。

え、どうやったかって・・・さあ、覚えて無いや。

いーじゃん、どーでも。

「楓ちゃんは今頃、とっくのどっくにあそこについてるよねー、良
いなあ、篝ちゃんといっぱいお話できてるんだろっなー」

篝ちゃんはお姉ちゃんに冷たいって言うか、嫌ってるからね。

何せ、電話もかかってきたことも無いし、かけても無視だしね。

その時、束さんの携帯電話からゴッドファザのテーマが鳴り響
く！

「ここの着信音は・・・ちーちゃん！」

東さんはもう、それはそれは俊敏に携帯電話を取ったね！」

「もすもす終日ひねすー、東さんだよーんっ！」

そして、出た瞬間に切られた、ぷちっと。

あーん、待つて待つて、ちーちゃん待つて！」

そう念じたら、再びゴツ ファーザーのテーマ、ちーちゃん愛してるっ

「やぶー、この世一の天才、東・・・いやいや、切らないで切らないで・・・」

その後、ちーちゃんに5分くらい怒られた。

うふふ、ちーちゃんだけだよ、私を怒れるの。

他の人なら、明日には一文無しになってるんだから。

「それでそれで、何かなちーちゃ・・・え？ 何だアレはって、何の話？」

はあ、はあはあ、なるほど、楓ちゃんのIS見たんだ？

ああ、うん、まあ、アレは確かに半分くらい私がつつただけどね。基本設計は楓ちゃんだよ、私はお姉ちゃんだから、ちょちょと

手伝っただけで。

「アレはねえ、そうだねえ、何と言うか・・・うん、他のISとはコンセプトがね、違うんだよ」

何と言っても、後から生まれる2機とセットのつもりでいろいろしたからさあ。

アレ単体だと、いろいろと変なことになるんだよね、うん。

まあ、天才の束さんが、弟子で助手で可愛い末の妹な楓ちゃんのために作ったからね、他のとは千味くらい違うよね。

「ああ、『ごうしき白式』？ モチロン大丈夫・・・」

クルツ、と座ってた椅子を反対側に回して、「それ」を見上げる。そこには・・・「白」がある。

束さんがいっくんのために丹精込めて作ってあげたISが・・・。

「来週の月曜日には、ちゃ〜んと届けてあげるからね、ちーちゃん

」

束さんをお願い事ができるのは、この世で4人だけなんだから。うーん、サービス精神旺盛だね、流石は天才の束さんだねっ。

第2話：「クラス代表決定戦・前編」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、どうにか学生生活も軌道に乗って来た・・・と思う、楓です。

そもそも学生生活って何をすれば良いのかさっぱりだけど、とりあえずお友達を作る所から初めて見ました。

今日は、この世界でのISの運用に関する国際的な取り決めなどについて説明させて貰いますね。束お姉ちゃんはバラまくばかりで後は放置だから・・・。

ある事件を境に、ISは現行兵器を上回る機動兵器としてデビュー、各国はこの新たな脅威の扱いについて話し合うことになります。

まあ、束お姉ちゃんが日本人だったんで、基本的に世界中から日本が叩かれていたようです。

長いようで短い話し合いの後に締結されたのが「アラスカ条約」。

アラスカ条約：

正式名称は「IS運用協定」、通称「IS条約」。467のISコアを主要国に「平等に」分配することや技術・情報開示、関連製品取引の規制などが取り決められています。軍事転用の「禁止」も盛り込まれてますけど、誰も守ってません。IS学園の設置についてもここで明記されています。各国のIS保有数や動向を監視する機関としては国際IS委員会がありますけど、これも結局は主要国のクラブです。

モンド・グロツソ：

主要21カ国・地域が参加するISの対戦の世界大会。各部門の優

勝者は「ヴァルキリー」、総合優勝者は「ブリュンヒルデ」と呼ばれて称えられます。千冬姉様はどちらも持ってます、凄いですよね！。

篠ノ之 楓：

・・・とまあ、こんな感じですよ。

その他、いろいろ細かい規定とかありますけど・・・ほとんどあって無いような規定ですし、そもそもISはブラックボックスが大きいので。

・・・もしかしたら、東お姉ちゃんが面倒がって適当に組んだシステムかもしれないし。

篠ノ之 東：

むふ？ そんなこと言うお口は、こつだ〜

篠ノ之 楓：

あばばば・・・っ

第3話：「クラス代表決定戦・後編」（前書き）

もしかしたら、楓VS山田先生な展開を期待しておられた方。残念、まだ引っ張ります（申し訳ありません）。では、どうぞ。

第3話：「クラス代表決定戦・後編」

第3話：「クラス代表決定戦・後編」

S i d e 織斑 一夏

入学式があった次の週の、月曜日。
つまりは、俺とセシリアの対戦の日だ。
ただし、大きな問題が2つある。

「なあ、篤……ISのことを教えてくれると言っつのはどうなったんだ？」

「……」

「……目を逸らすなよ」

1つは、篤が俺に剣道の稽古しかしてくれなかったことだ。
いや、もちろんありがたい……試合の感覚を取り戻すのも大事だ
つてのはわかる。

何しろ中学時代は家計を助けようと それでも生活費の9割は
千冬姉が出してたけど 3年間、アルバイト生活で剣道なんて
して無かったからな。

だけど問題はこの1週間、剣道しかなかったことだ。

個人的に教科書を読んだり山田先生のレクチャーを受けたりはした
物の、それ以外はさっぱり。

楓を頼ってみたこともあるが、「篝姉さんに教えて貰う約束をしたでしょ」と突っぱねられた。

おかげで毎日毎日放課後3時間、みっちり篝と剣道の日々だった。

「し、仕方が無いだろう、お前のISだってまだ来てないんだから」「いや、それでも基礎とか知識とか、いろいろあったたる・・・？」

そしてもう1つ、当日だと言うのに俺のISがまだ来ていない。

そう、まだ来ていない。

・・・大事なことだから、2回言った。

一応、千冬姉に呼ばれた通り、第3アリーナのAピットに来たんだけど・・・。

「お、織斑君織斑君織斑君ッ！」

不意に、3回も呼ばれた。

顔を上げれば、転びそうな足取りでこちらに駆けて来る山田先生。

千冬姉は歩いているのに、どうして走ってる山田先生と並んでこっちに来れるんだろう。

「山田先生・・・と、千冬ねって、痛あっ!？」

「学校では織斑先生と呼べと言っている。いい加減に学習しろ、さもなければ死ね」

出席簿で俺を殴るのは、もちろん千冬姉。

実の姉からの温かい言葉に、俺は涙が出そうだった。

俺の周りの女性は、どうしてこんな・・・それとも、女尊男卑の時代の影響か？

いや、時代のせいにするのは良く無いな、うん。

「そ、それですねっ、来ました、織斑君の専用IS！ピットに搬入してあります！」

「織斑、さつさと準備をしろ・・・アリーナの使用時間は限られている。ぶつつけ本番でモノにしろ」

「男子たる者、この程度の障害は軽く乗り越えて見せろ、一夏」

山田先生、千冬姉、篤がそれぞれ俺を激励してくれる・・・激励、だよな？

でも俺、何をしたら良いのかさっぱりわからないんだが。

プシュツ・・・空気の抜けるような音共に、ピットへ出る扉が開く。山田先生に背中を押されて、たたらを踏みながら中へ。

そこにいたのは、『白い騎士』だった。

真っ白な、純白の、飾り気のない無骨な鎧。

それが第一印象、装甲の一部が開いていなければ、乗り物だとは気付かなかったかもしれない。

真っ白なそれは、まるで俺を待っているかのように膝をついていた。これが、俺の。

「……これが？」

「はい、織斑君の専用機……『白式』（びやくしき）です！」

白い式と書いて、『白式』（びやくしき）。

どうしてだろう……このISがまるで、ずっと俺を待ってたみたいに感じるのは。

これが、俺の……と、1歩近付いたその時、誰かが『白式』（びやくしき）の陰から出て来た。

それは……。

「どいつも、篝さん、一夏さん」

「……楓!？」

あ、篝と八モった。

そこにいたのは、篝と同じ顔の女子だった。

髪は篝と違って短く、表情も厳しさよりも緩さが目立つ。

ミニのスカートとオーバーハイの靴下の間の肌色が、眩しい。

……って言うか、気のせいで無ければ、篝が楓の名前を呼ぶのを初めて聞いた気がする。

そのせいなのかどうなのか、楓は篝を見ると嬉しそうににっこりと微笑んだ。

「背中を預けるように、ああそうだ、座る感じで良い。後は勝手にシステムが最適化してくれる」

「あ、ああ・・・」

千冬姉様の言葉に従って、一夏さんが『じやくごう白式』に乗る。
カシュツ・・・渴いた音がして、一夏さんの身体がISと「融合」する。

操縦者とISの「意識」が繋がる瞬間で、人によっては違和感を感じることもあるけれど。

どうやら、一夏さんは大丈夫みたい。

私にはわからないけど、一夏さんは今『じやくごう白式』から膨大な情報を得ているはず。

操縦方法、性能、特製、装備、活動時間、エネルギー残量、出力限界、そして「敵」の情報。

ISは操縦者が必要とするあらゆることを教えてくれる、パートナー相棒として。

「ISのハイパーセンサーは、問題無く動いているようだな。一夏、気分は悪くないか？」

「・・・大丈夫、千冬姉、行ける」

「・・・そうか」

千冬姉様と一夏さんが、おそらくは身内にしかわからないだろう視線の交わり方をする。

そう言うの、素敵だと思う。

私が篝姉さんを見ても・・・あ、また逸らされた。割とシヨック・・・。

「ところで、楓はさつきから何をしてるんだ・・・？」

「見てわからないのか、馬鹿者。お前のために『初期化』と『最適化』^{インク}をしてるんだよ・・・篠ノ之妹、間に合いそうか？」

「時間が足りません」

千冬姉様の声には、きつぱりと答える。

答えないと後で何をされるか・・・まあ、出席簿の一撃だけだと思っけど。

そんな私の前には、空間投影式のディスプレイとキーボード、それぞれ6枚と2枚。

キーボードの上で指先を躍らせながら行っつのは、『^{じやく}白式』の初期化^{フォーマット}作業。

このISを本当の意味で一夏さん専用にするためには、まずコアから前の機体の情報を消して、さらに一夏さんの情報を入力しなければならぬ。

1秒ごとに、ソフトウェアとハードウェアが一夏さん専用のそれに微修正されていく。

普通、何時間もかけて少しずつやる作業なのだけれど・・・。

「え、ええと・・・ありがとう？　でも何で楓が？」

「コイツは整備科志望だからな・・・本当は専用機には整備チームがつくが、お前にはまだ無い。手伝って貰えるだけありがたいと思えよ」

「な、なるほど」

・・・2つのキーボードを同時に扱って、どうにか『初期化』フォーマットを最終段階まで進める。

同時に一夏さんの情報の入力を初めて『最適化』フィッティング。時間が無いから、いろいろな作業を一度に済ませないと・・・。

・・・ハイパーセンサー接続、最適化完了、操縦者視界良好、クリアー。

機体制御システムオンライン、姿勢保持システム及び各部推進装置グラビティ・ヘッドの偏向重力推進角錐度数をアトランダム設定して最適数値でそれぞれ自動固定、加減速補助システム作動・・・P I C 関連システム問題無し。

登録武装・・・あれ？　一個だけか、じゃ良いや。

推進ユニット・コントロール・システム最適化、エネルギー・バイアス・オペレーティング・システム及びシールド・エネルギー制御システム更新・再構築・・・それぞれ30秒以内に再実行、仮想試験結果を反映しつつ数値変更・・・。

「・・・凄い・・・」

山田先生の声、でも私はそんなに凄く無い。

東お姉ちゃんなら、1分もあればこれくらいの作業は終わらせてる。でも私は搬入の時点から3分経つても、『初期化^{フォーマット}』しかできてない。まだ半分も……。

「……篠ノ之妹、もう良い。後は一夏が試合中に何とかするだろう。できなければ負けるだけだ」

「ああ、サンキューな楓」

「……わかりました」

『白式^{ごまへんご}』からコードやケーブルを抜いて、接続を解除する。

後は『白式^{せしき}』が自動で『最適化^{フィッティング}』する、でも試合終了まで間に合うかどうかはわからない。

……悔しい、凄く中途半端な仕事をした気分。

でも一夏さんは、凄く落ち着いた笑顔でお礼を言ってくれる。

それから、心配そうに一夏さんを見ていた篝姉さんの方を向いて……。

「篝」

「な、なんだ？」

「……行ってくる」

「……ああ」

一夏さんの言葉に、篝姉さんが少しだけ微笑む。

「・・・それに私が少しだけ驚いている間に、一夏さんはピットの会場側出口の方へEISを進ませる。重い音を響かせて、『白式』が歩く。」

「・・・良かった、ちゃんと動く。
でもあのシステム構築様式、確か東お姉ちゃんの・・・。」

「・・・勝つてこい」

祈るような篝姉さんの声に、一夏さんは篝姉さんを見ずに手を上げるだけで応える。

おお、良く分からないけど、通じ合ってる感がある。
そして、一夏さんはゲートの外へと・・・。

Side セシリア・オルコット

「・・・私の母は、厳しくて強い人でしたわ。
女尊男卑の風潮が世に広まるよりも前から、いくつもの会社を経営して成功した人。」

家柄でも能力でも母に劣っていた父は、いつも母の顔色を窺っていた・・・。

そう、だから「男なんて」そんなもの。

そんな2人の間の愛情が続くはずもなく、母はいつしか父を避けるようになっていきました。

でもあの日・・・3年前、死者100人を数えた越境鉄道事故で2人が亡くなった時。

その日だけは、どうしてか2人一緒に・・・でもその理由を考える間もありませんでした。

私は両親の財産を狙う下種共から家を、両親の遺したものを守るため、勉強の日々を過ごし。

そして・・・。

「・・・ブルー・ティアーズ」

小さな声で囁くのは、私の身体を覆う青の鎧の名前。

鮮やかな青、背中には特徴的なフィン・アーマーを備えた蒼穹の騎士^{アイ}。

これが私の、一つの結果ですわ。

IS適正テストで世界でも有数のランク・・・「A+」を出して。

政府から国籍保持のための好条件が出されて、家を守るために受け入れました。

そして第3世代試験機のこのISの専属操縦者になり、稼働データと戦闘実績を得るために日本へ。

だから彼と戦うのは、そのためでもありますの。

「個人的に気に入らないと言う気持ちも、まあ、ありますけど・・・」

何しろ、男だと言うだけで専用機まで与えられるのですから。

私が数年かけて　それでも短い方だと言うのに　手に入れたものを、彼は数日で。

男だと言う、ただそれだけの理由で。

・・・叩き潰して差し上げますわ。

私がそんなことを考えた時、ようやく彼がピット・ゲートから姿を現しましたわ。

私の目の前にディスプレイが浮かび、『ブルー・ティアーズ』が彼の・・・織斑一夏のISの情報を教えてくれます。

ありがとう、『ブルー・ティアーズ』・・・でも大丈夫、私と貴女が負けるはずがありませんわ。

「最後のチャンス差し上げますわ」

「・・・チャンスって？」

「私と『ブルー・ティアーズ』が、一方的な勝利を得るのは自明の理。今、ここで謝罪すると言うのなら、許してあげないこともなくつてよ？」

<射撃コマンドを展開、セーフティロック解除>

頭の中に響くのは『ブルー・ティアーズ』の声、同時に左目の部分にターゲット・ロック・システムが展開、右腕部分に展開されている主力レーザーライフル「スターライトmkIEIE」にエネルギーが充填されます。そして同時に、試合開始の鐘が鳴り響きます。

彼も気付いたのでしよう、身構える。

あの白いISの性能自体は、それなりのようですわね。でも……。

「……そう言うのは、チャンスとは言わないな」

「あら、そう？ 残念ですわ、それなら……」

< ターゲット・ロック 標的確認、射撃開始まで3秒、2、1…… >

……でも本人の能力は、どうかしらね！

「……お別れですわね!!」

トリガーを引いて、甲高い独特の射撃音が響く。同時に、私の『ブルー・ティアーズ』から最初の射撃ショットが放たれました。

「うおおおっ!?!」

いきなり撃ってきたやつだ!

いや、もう試合開始の鐘は鳴ってるんだから、卑怯でも何でもない。ただ、俺がボンヤリとしてただけだ。

「一応、ギリギリでかわしたけど……俺の手柄でも何でも無く、『白式』のオートガードが俺を守ってくれただけだ。オートガードだから、俺の意思とは関係無く、『白式』が動いただけ。つまり、俺が『白式』の反応についてこれて無い……!」
と言うか、動かし方だって碌にわからん!

<ダメージ46、シールドエネルギー残量521>

頭の中に『白式』の音が響く、ちなみに今やってるみたいなIS同士の戦いは、「ISバトル」と言うスポーツとして世間に認知されてる。

まあ、学園では普通に模擬戦って言うんだけど。

「ISバトル」と言うこのスポーツは、相手のシールドエネルギー・

「ま、まあ、HPみたいな物をゼロにすれば勝ちだ。」

「エネルギーがゼロになると実体（本体）にダメージを通せる、それで勝ちってわけだ。」

「後、ISには「絶対防御」って言うシステムがあつて、最低限操縦者が死なないようになってる。」

「……死ぬとか、縁起でも無いけどな。」

「さあ、踊りなさい！ 私、セシリア・オルコットと『ブルー・テイアーズ』の奏でる円舞曲で……！」

声と同時に、セシリアの射撃が雨のように降り注いでくる。

いくらオートガードって言っても、全部を凌げるわけじゃない。

しかも相手の射撃が的確なもんだから、ガンガン当たる……直撃だ、しかも連続。

「と言うか、避け方がわからん。」

「おかげで、『白式』も警戒音を鳴らしっぱなしだ。」

「上へ避けても左に飛んでも……200メートルもあるアリーナなのに、どこへ飛んでもセシリアの射撃が俺を襲ってくる。」

「……アイツ、凄いな。」

「……って、感心ばかりしてらんねえ……何か、武器は」

「丸腰じゃ無理だ、『白式』に武器の一覧を出すように頼む。」

「……って、1個だけかよ!？」

ええい・・・ままよ！

右手を掲げて、量子化していた武器を実体化させる。

東さんが基礎理論を構築したって言うこの量子化・物質化のシステム・・・いったいどう言う理屈なのか、さっぱりだ。

だけどそのシステムが、俺に武器を・・・1本の「刀」を与えてくれる。

片刃の長刀・・・刃渡り1.6メートル。

「中距離射撃型の私達に、近距離格闘装備で挑もうだなんて・・・笑止ですわね！」

そして、セシリアの射撃。

機体を無理矢理捻って、かわす・・・でも彼我の距離は絶望的、27メートル。

俺の攻撃射程にセシリアを捉えるにはその距離を、しかも弾幕の中を潜らなきゃいけない。

今にして思えば最初の一撃は挑発でも奇襲でも無く、距離を広げるための物だったのかもしれない。

「・・・やってやるぞ」

千冬姉や篝、それに『初期化』フォーマットしてくれた楓、機体搬入の手続きをしてくれた山田先生に・・・無様な格好は、晒せないよな。

だから、やってやるさ・・・この『白式』ジャックで！

一夏が、戦っている。

初めてのISバトルで代表候補生との戦い、予想通りと言うか、苦戦だった。

オルコットの射程距離の長さに、近接用の装備しか持たない一夏は翻弄されている。

特に、オルコットの機体から放たれている4機のビットのような物が厄介だ。

青いISの背中についていたフィンが分離して、それぞれ独立したビットになっている。

それぞれが独立軌道で動く銃器のような物で、先端から特殊なレーザーを放つ。

「何だ、アレは・・・?」

「イギリスの第3世代装備『ブルー・ティアーズ』。オルコットさんのISと同じ名前なのは、あの兵器を積んだ実戦投入1号機だから、だとか」

私の呟きに答えたのは、楓だ。

私は千冬さん達と一緒に、Aピットからリアルタイムで一夏の戦い

を観戦している。

目の前の大きなモニターには、第3アリーナで行われている試合が映されている。

私の立ち位置は千冬さんと山田先生のの後ろで、そして私の左隣に楓がいる。

楓・・・数年ぶりに会った私の双子の妹。

楓は空間投影式のディスプレイとキーボードを1枚ずつ展開させたまま、一夏の試合をデータ面で分析しているようだった。

その姿は・・・嫌でも、あの人を思わせる。

「見た限りにおいて『ブルー・ティアーズ』 ややこしいので

以下ビット は相手の死角からの全方位オールレンジ攻撃が可能、まだ稼働実験段階の「BT兵器」と呼ばれる兵装だと思う。展開前にはスラスターとして使用していたようなので、ある程度の汎用性も備えているみたいだね」

楓の声が続く間にも、画面の中の一夏は追い詰められている。

上下左右に展開したビットがビームを放ち、一夏をオルコットのライフルの照準地点に追い込む。

その繰り返しだ、気の休まる暇も無い。

一夏はIS稼働時間20分とは思えない身のこなしで、ビットの攻撃を回避、防御し続けている。

だが、このままでは・・・。

「……一方で『白式』^{しろしき}は現在、近接用のブレードのみを装備。あれはまさに敵を殴りつけないと効果の無いタイプで……懐に飛び込めない限り一夏さんに勝機は」
「っ……一夏が負けるわけが無いだろう!!」

思わず、怒鳴った。

直後に後悔する、何をやっているんだ、私は……。

「……ごめんなさい、姉さん」

「……いや」

頭を振って、苛立たしい気持ちを落ちつけようと親指の爪を噛む。
この1週間、楓のことを避けていたから……これが、数年ぶりの会話と言つことになる。

数年ぶりの会話が、これが。

だが、他に何を喋れば良いのかわからない。
私と違って、あの人と一緒にいた楓。
……憎んでいるわけでも、嫉んでいるわけでも無い。
だけど……何を言えば良いのか、わからない。

「一夏……!」

画面の中では、一夏がオルコットの弾幕を潜り抜けて、ようやく接敵した所だった。
ぎゅっ……口元に持って行っていた手を、無意識に握り込む。
一夏……。

S i d e 織斑 千冬

後ろで小娘共が騒いでいるようだが、そんなことは知らん。
姉妹の問題に口を出す程、私はお節焼きじゃない。

「はああ……凄いですね、織斑君。とてもISを動かすのが2回目とは思えません」

モニター前の椅子に座っている山田先生が、感嘆したように呟く。
確かに、画面の中の一夏は素人とは思えない程の健闘ぶりを示している。

初陣、しかも相手は代表候補生だと言うのに。

画面の中の一夏が、オルコットのビットの1機を叩き斬った。

それは、オルコットのビットの弱点を看破したが故の結果だ。
あのビットは、オルコットの射撃と同時に動かせない。

つまり自動じゃない……それを逆手にとって、一夏はわざと隙を作ってビットを誘導、迎撃する。

そう言っている間に、2機目、3機目と墮としていく……。

「……馬鹿者め、浮かれているな」

「え……どうしてわかるんですか？」

「さつきから左手を閉じたり開いたりしているだろう……昔からのクセだ」

「へええ……流石はお姉さんですね、そんなあいたたたた？」

私をからかおうとした山田先生にヘッドロックをかけつつ、私は画面を注視する。

そこには、4機目……最後の「ビットを墮とそうとしている一夏が映っている。

とは言え、ダメージは深刻……にも関わらず、その機動性は上昇しているように見える。

普通、ダメージを受ければ機動性は落ちるはずだが……。

「……直前の『最適化』フィッティング作業が、ここに来て生きてきたか」

あの機体は元々、倉持技研と言う日本のIS企業が開発していたが、

……色々な理由で、放棄された。

そしてそれを束が引き取って、完成させた。

……前代未聞の第4世代ISとして。

各国が第3世代の開発に躍起になっている所に第4世代のIS、公表などできない。

アレの整備担当として篠ノ之妹を呼んだのは、他にできる人間がいなかったからだ。

加えて言えば、『びやくしき白式』のコアに接続できるのが私と一夏、篠ノ之き姉かえて・そして篠ノ之妹だけだった。

もちろん、開発者である束は例外とした場合だが。

「・・・束の、弟子か」

先の束との電話で、篠ノ之妹かえてのことを少しだが聞いた。

最も、束の言っていることは8割は意味不明だが・・・。

「・・・何だ!？」

篠ノ之姉の声に、思考を現実に戻す。

画面の中で、一夏が4機目のビットを墮とした時、「それ」は起こった。

・・・機体に救われるか、馬鹿者が。

< 『フィッティング最適化』 終了、確認ボタンを押してください >

な、何だ……？

セシリアの最後のビットを刀で斬り落とした後、いきなり『白式』
が話しかけて来た。

目の前のディスプレイに浮かんだ「確認」を押すと、膨大なデータ
が意識に直接流れ込んでくる。

刹那、俺のISが量子化して……直後、再び実体化する。

中世の無骨な鎧のようだったそれは、形がかなり変わっていた。

より曲線的に、よりシャープに……そして、直感的に理解する。

これでこのISは、「俺専用」になったと。

ファースト・シフト

「一次移行……じゃあ、今までは初期設定だったって言うの!？」

「ふぁー……何だった?」

セシリアが驚いているみたいだけど、俺には細かいことはわからな
い。

右手の刀を見ると、それもまた形状が変わっていた。

「……『ゆきひら雪片式型』?」

そこには昔、千冬姉さんが現役だった頃の動画で見た、あの刀があ

った。

姉さんの、刀。

刀かたなに形成かたなした……形名かたな。

刀と言うより反りの深い「太刀」、鎬に刻まれた溝からは工業的な粒子が溢れている。

……ああ、そうだよな。

俺は本当に、最高の姉さんを持ったよ。

元「世界最強」……誰よりも綺麗で強い、世界一の姉さんだ。

だから千冬かそく姉が誇れるとまでは言わなくても……恥じることの無い、そんな弟でいたいと願う。

「だから」

チャキツ……新しくなった刀……いや、太刀を両手で持って、下段に構える。

「……『白式しろしき』、距離は？」

<16メートルです>

……遠いな、だけどビットは全部落とした。
後はライフルをかわしながら……飛び込む！

「……ぜああああああっ！」

「くっ……面倒ですわ！」

距離を開こうとするセシリア、縮めようとする俺。

これまでの動きが嘘のように、『びやくしき白式』を思い通りに動かせる。

追いかけてこは唐突に終わり、ライフルの銃口を蹴りつけて外し、太刀を大上段から振り……。

「お生憎様」

次の瞬間、セシリアの機体のスカート部分が開く。

開いたそこから現れたのは、2つの突起物……つまり。

「『ブルー・ティアーズ』は……6機ありましてよ！」

放たれるのはビームじゃない、2発のミサイル
！

「……！」

だけど、見える。

ミサイルの軌道、どこを狙うのか……頭が判断するのと同時に、機体が動く。

思った通りに、斜めにロール移動。

1 発目、右肩の装甲を掠めつつも回避。

2 発目……斬る！

ガンッ……両手に鈍い重みを感じると同時に、爆発の衝撃が俺を襲う。

<ダメージ66、シールドエネルギー残量

>

『白式』^{びやくしき}の声も無視して、爆煙の中を直進する。

黒煙を抜けた際には、焦りの色を浮かべたセシリアの顔があった。

……獲る！！

「うっおおおおおおおおおおおっ！ー！」

下段から上段へ、逆袈裟払い。

『白式』^{びやくしき}から太刀にエネルギーが供給されていくのを感じる、太刀が熱い。

『雪片』^{ゆきかた}の刀身が輝き、俺はその輝きに導かれるように。

……太刀を、振り切った。

そして。

「大馬鹿者め、武器の特性もわからないくせに無理に使うからそうなるんだ」

「大馬鹿者って・・・馬鹿者から嫌な方向にランクアップしないでくれよ・・・」

「何か文句があるのか？」

「・・・無いです」

試合の後、一夏さんは千冬姉様にごつてりと絞られていた。

自分の武器を中途半端に使いやがって・・・と言う内容にも聞こえるけれど、たぶん照れ隠し。

自分の武器を弟が継いでくれたことが、実は物凄く嬉し・・・。

「・・・篠ノ之妹？」

「な、何でも無いデス！」

一夏さんを絞っている千冬姉様の標的が私に移りかけたので、慌てて思考を止める。

と言うか何、相手の思考が読めるの・・・？

いや、それ以前に篠ノ之妹って。

東お姉ちゃんから見れば、篠ノ之妹って2人いるよ？

まあ、良いや……今はとりあえず、『びやく白式』の方に興味あるし。ブウンツ……と私の目の前に上下4枚、合計8枚の空中投影型ディスプレイが浮かぶ。そこには、一夏さんの専用IS『びやく白式』の『ふいていんぐ最適化』後のデータが映しだされる。

「うん、やっぱりちゃんとパーソナライズした方が……」

千冬姉様に聞いた話だと、これを作ったのは東お姉ちゃん。どうりで『フォーメット初期化』しやすいと思った、お姉ちゃんは私がやりやすいようにシステムを組んでくれてたんだね……えへ、何か嬉しいな。

東お姉ちゃんの作ったISを、私が整備。
うん、美しい。

これが箒姉さんの専用機だったりした日には、きつともっと楽しいよね。
東お姉ちゃんが作って、私が調整して、箒姉さんが動かす。
……理想だね。

「篠ノ之妹、そろそろ良いか」
「あ、はい」

千冬姉様に言われて、『びやく白式』との接続を切る。
それから一夏さんが『びやく白式』を待機状態にして、白いガントレット

の形になって一夏さんの手首に納まる。

待機状態になったISは、操縦者が望めばその場ですぐに展開できる。

でもここはIS学園、当然のように電話帳並の規則の本がある。

一夏さんは、山田先生からそれを青い顔で受け取っていた。

「・・・何にしても、今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

締め言葉は、やっぱり織斑先生。

と言うわけで、今日は一件落着・・・。

「・・・あ」

ふと視線に気が付く、それは篝姉さんの物だった。いつもと同じ、鋭い視線。

何と言うかこの1週間、上手く話せなかったから・・・ちょっと緊張。

「・・・ISの」

「う、うん・・・」

「ISの整備、姉さんに習ったのか・・・？」

「あ、うん」

「・・・そうか」

それだけ。

それだけ言って、箒さんは一夏さんを連れてピットから出て行った。

・・・ほんの、一言だけ。

たった数秒間だけだけど・・・箒さんと、お話ができた。

それが嬉しくて、私はその場で歓声を上げた。

・・・直後、千冬姉様にはたかれた。

S i d e

篠ノ之 箒

・・・この感情は、何だろうな。

楓は束姉さんにISSのことを教えてもらって、それで一夏のISSの『フォーマット初期化』をした。

羨ましい・・・の、だろうか、私は。

まさか、そんなはずは無い。

ただ、私は・・・。

「・・・なあ、箒」

「・・・」

「おい・・・無視すんなよ、尊さん」

一夏の声に、ふと立ち止まる。

振り向くと、何だかバツの悪そうな顔をした一夏がいた。

「・・・勝てなかったな」

「ぐあ」

私の言葉に軽く呻いて、そしてかなり落ち込んだような表情を見せる一夏。

その姿を見てみると、ささくれ立った心が少しだけ安らかになるのを感じた。

我ながらどうかとも思うが、一夏と一緒にいると安らぐ。

・・・ど、同門の人間が傍にいと落ち着くと言う、それだけの意味だ。

それ以上の意味は無い、無いたら無いからな！

心の中で自己完結した後、再び歩き始める。

当然、一夏もついてくる・・・。

・・・と、当然と言うのは、行く場所が同じだからと言う意味で、共にいるのが当然と言う意味では無いぞ。

「い、一夏」

「ん、何だ？」

「く、悔しかったか・・・？ 勝てなくて」

「そりゃ・・・まあ」

どこか沈んだような一夏の声に、私は少しだけ目を閉じる。
思い出すのは、幼い頃の剣道場。

中学時代は剣を握っていなかったと言う一夏は、あの頃とは違って物凄く弱くなった。

この1週間、剣を合わせて・・・私から1本も取れなかった程に。

だけど、根本の部分は変わっていない。

今の言葉でそれがわかって、とても嬉しかった。

・・・楓と話せ話せ言うのは、正直アレだが。

「・・・なら、明日からはISの訓練もいれないとな」

「あ、教えてくれるのか？」

「そう言っただろう」

いつかの会話を繰り返す。

「い、一夏が私にどうしても教えてほしいと言つのならな、仕方無い
い」

「ああ、そつだな、是非頼むよ」

「・・・う、うむ。では明日からは必ず放課後を空けておくのだぞ、
良いな？」

「おつ」

・・・明日から、放課後はずっと一夏と2人きり。
い、いや、単にISの訓練をするだけだ、うん、それ以上の他意は
無いぞ！

私は単純に、出来ない同門にいろいろと教えてやるうと言っただけだ。
・・・それだけだからな！

「か、勘違いするなよ、一夏！」
「え、お、おうっ！」

・・・まあ。

とにかく今日は、頑張ったな。

・・・一夏・・・。

Side セシリア・オルコット

シャワールームの中で熱いお湯に打たれながら、私は今日の試合に
ついて反芻しておりました。

今日の試合・・・織斑一夏とそのISとの試合を。
私が・・・私と『ブルー・ティアーズ』が・・・。

「・・・一撃を、喰らうだなんて・・・」

今日専用機を持ったばかりの男に、代表候補生であるこの私が、最後の一撃は、いったい何ですの……？
私の機体のバリアを無効化して、直接ダメージを与えるなんて。そこで相手のエネルギーが切れましたから、それ以上の追撃はありませんでしたけど。

とは言え、どうして彼の機体が直後にエネルギー切れを起こしたのかもわかりませんわ。

私に一撃を与えた時には、まだ残っていたはずだけれど……。
……そのおかげで機体のダメージが最小限に留められたのですから、不幸中の幸いなんでしょうけど。
でも、もしエネルギー切れを起こしていなかったら……。

「……結果的には、私の勝利……とは言え……」

でも昨日今日にISを動かした素人、まともな訓練も受けていない相手。

それに、一撃を許した。

直後に彼のISがエネルギー切れを起こさなければ、ゼロ距離で撃ち落としていたとは言え。

ビットも破壊されて、無様にも程がありますわ。

……何なんですの、あの男！

「……織斑、一夏」

彼の・・・織斑一夏のことを、思い出す。
最初から女である私に媚びようとせず、むしろ反発して見せた彼。
母の顔色を窺ってばかりいた父とは、まったく違いましたわね・・・。

強く、迷いの無い、真っ直ぐな瞳。

最後の一撃の瞬間、視線を交わしたあの時。
あの瞬間だけは、本物でしたわ。
身体にはまだ、あの時に撃ち込まれた一撃の感触が残っています。
そして、私が撃ち込んだ攻撃の感触も・・・。

「・・・織斑、一夏」

初めて会った男・・・男だと言うのに、それでも。
私に、このセシリア・オルコットに一撃を喰らわせた男・・・。
他の男とは違う、何かを感じるのはどうしてでしょう・・・？
たかが、男の分際で。

きゅっ・・・蛇口を捻り、お湯を止める。

湯気で包まれるシャワールームの中、曇った鏡を掌で大きく擦る。
そこに映るのは、見慣れたはずの自分の顔。

・・・もつと良く、知らないといけませんわね。

織斑一夏、私と『ブルー・ティアーズ』に一撃を与えた男の、こと

を。

S i d e 織斑 一夏

セシリアとの試合の翌日、クラスに来たらとんでも無いことになっていた。

具体的に言うと、何故か俺がクラス代表になっていた。

・・・何でだよ、負けだったじゃん俺！

「では、1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりで良い感じですよね」

嬉しそうにしないでください、山田先生。

クラスの女子達は「唯一の男子なんだから、持ち上げないと」とか「経験が積めて情報も売れる、一粒で二度美味しい」とか言ってるけど・・・いやいやいや！

第一、あのセシリアが納得するわけが。

「私、代表は辞退致しましたの」

・・・って、本人が納得してるし！

それなら、まあ・・・って、そうじゃないだろ！

「おおっ、見事なノリツッコミですね、一夏さん」
「だね、実に見事だと思うよ」

「いやいや楓、のほほん（布仏本音）さんと一緒になって拍手するなよ。」

波長が似てるのか何なのか知らないが、すっかり友達になっているらしい。

箒もあれくらい社交的なら、もう少し人付き合いも上手くなるだろうに。

「一夏？」

「と、とにかく、何で俺が代表なんだよ!？」

隣にいた箒が物凄く剣呑な雰囲気放ったので、話題を戻す。

「・・・と言うか、何で俺の考えてることってバレるんだ？」

俺、わかりやすいのか・・・？

「勝負自体はああ言う結果でしたが・・・初めてのバトルで代表候補生の私とあれだけ戦ったのですもの。むしろ私が退かないと面目が立ちませんわ。快く代表の座を受け取ってくださいまし」

その心遣い、今はいらないから。

「・・・と言うか、セシリアの俺を見る目が観察しているような物に

見えるのは何でだ？

「ISの技術向上には場数を踏むのが一番・・・クラス代表ともなれば、バトルには事欠きませんもの」

「いや、そうかもしれないけども・・・」

「何でしたら、私が教えて差し上げても良くてよ？」

「必要無い、私が頼まれたからな、私が教える」

おおう、箒さん。

いきなり話に混ぜられて来たかと思えば、何故か言葉に物凄い棘が。

「あら、そう。なら仕方ありませんわね・・・私は見ればそれで十分ですし」

そしてあっさりと引き下がるセシリア、最初の刺々しさはどこに行っただよ。

と言うか、後半に何かブツブツ言って無かったか？

いや、まあ、良いけど。

「あ、ね、姉さん・・・」

その後、楓がおずおずと箒に近付いて来た。

期待と不安が混ざった表情で、ツツと傍に寄って行くその姿は、ちよっと可愛かった。

「そ、その・・・お、おは・・・おはよう・・・」

「・・・」

「・・・えと。あ・・・」

対する箒はと言うと、ふいっと猫のように顔を背けて、自分の座席へと向かって行った。

おい、妹に対して何て態度だよ。

そして楓は楓で、落ち込んだ猫のようにしゅんとしている。

話相手を失ったセシリアも、「やれやれ」と言いたげに肩を竦めて自分の座席へ。

「うーん・・・」

「だ、大丈夫だって楓、箒もさ・・・」

「・・・グッドモーニングの方が良かったかな・・・？」

いや、そこじゃないと思うぞ。

楓は腕を組んで何やら考えながら、自分の座席に戻った。

箒の反対側、廊下側の座席に。

・・・まあ、俺は実の所、あんまり箒と楓のことは心配してない。

先週からの箒の行動を見てれば、何となくだけどわかる。

入学式の日、教室と寮で・・・箒、ちゃんと楓のことを守ってたもんな。

東さんのことを聞いて来る生徒から、さ。

「・・・やれやれ」

さっきのセシリアじゃないけど、肩を竦める。

素直じゃ無いんだからな、篤は。

あ、昔からか。

「さつさと席につけ、大馬鹿者が」

「・・・つてえっ!？」

チャイムが鳴ったのに気が付かなかったから、教室に来た千冬姉に頭をはたかれた。

・・・と、言うわけで。

俺は、1年1組のクラス代表になった。

第3話：「クラス代表決定戦・後編」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、「白式」に触れてひゃっほうな楓です。

アレは今やどこの企業にも国にも所属していないので、私も触れて嬉しいです。

ま、詳しい所属はまたどっかに決まるでしょ。

それでは今回はIS整備に関する物で、「初期化」と「最適化」、それでもって「一次移行」について説明しちゃいますね。

「初期化」・・・

読んで字の如く、ISのコアを初期化する作業。全世界に配備されているISの内100〜150くらいは研究開発用で、新しいIS（コア外装）の開発に日夜研究されてるわけですが・・・そこで新しい外装にしたり、あるいは操縦者を変更したりする場合は前の外装・操縦者の記憶をコアから「初期化」しないといけないんです。今回の場合、「白式」に一夏さんを操縦者と認めさせるための第一段階としてその作業が必要だったわけです。

「最適化」・・・

これも読んで字の如く、そのIS（特にコア）を新たな操縦者に適合させる作業。これが終わると「一次移行」と言う現象が起こってその操縦者の「専用機」になることができます。量産機・訓練機なんかは「最適化」せずに使うんで、これは特に専用機持ちの人に施される作業ですね。自動でもできますが、時間が・・・今回の場合、一夏さんが試合中に適合させた感じですね。

篠ノ之 楓：

ふう・・・では次回、セカンドが来るそうです・・・セカンド？
・・・束お姉ちゃん、勝手にドロップ缶持って行かないでね？

篠ノ之 束：

ぎくうっ！？

第4話：「その幼馴染、2番目」（前書き）

妹語録。

妹「ねえ、お兄ちゃん・・・食べて」

何を？

妹「私を」

その時、竜華零に電流走る

！！

*単純にグラム単位で体重が増えたから肉を減らすのを手伝えと言われただけと言うのが、今回のオチです。

第4話：「その幼馴染、2番目」

第4話：「その幼馴染、2番目」

S i d e
鳳 ファン 鈴音 リンイン

あー・・・疲れた、言い出したのは自分だから仕方無いけどね。
本当ならもう1週間早く、来たかったんだけど。
いやまさか、アイツがあんなことになるとは思わなかったからさ。

「えー・・・本校舎1階総合事務受付ってどこよ」

と言うか、広すぎんのよココ。

初めて来る人に不親切にも程があるじゃない、要塞じゃあるまいし。
・・・まあ、いざって時は要塞になるのかもしれないけどさ。

何たってここはIS技術の最先端、「IS学園」なんだから。
とは言えそこは規則、IS使えれば楽なんだけどな。
でも無断で使うと私の中国クニとの外交問題になるかもだし、そこは自
重よね。

何と言っても、私は代表候補生なんだから。

「・・・ふふん」

IS適正「A」、専用機持ちの代表候補生。

年上の大人や男がへこへこする、そんな環境がとても心地良い。まあ、男なんて興味無いけどね。

・・・1人を除いて、ね。

「元気かなあ・・・一夏」

中学2年生の時まで、私はここ・・・日本にいた。

その後は、親の都合で中国クニに帰らないといけなかったけど。

でもニュースでアイツ、一夏を見て、ここに来ようって決めた。

私は決めた後は行動あるのみ、なタイプだからその通りにした。

政府高官に頼み込んで 向こうも、「唯一の男性操縦者」に近

い私は好都合だと思っただろうし 何とか、編入手続きをねじ込んだ。

その代わりここに来るまで強行軍で、こんな夜中に着くことになっちゃったけど。

ま、それくらいは必要税よね。

それより一夏の奴、ちゃんと私との約束を覚えて・・・。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

・・・不意に。

1年と少し前まで毎日のように聞いていた声が、聞こえた。

若い男の子の声。

と言うか、ここIS学園に男の子は1人しかいないって聞いているから、この声は……

角を曲がると、「IS訓練用第3アリーナ」って書かれた施設から、誰かが出て来る所だった。

そこに、男の子がいた。

見間違えるはずも無い、中学生の半ばまで毎日のように一緒にいた、幼馴染の男の子。

……織斑、一夏。

嘘、こんなに早く会えるなんて思って……。

「だから、こう……飛ぶ時は、くいつて感じだ!」

「何だよその独特な感性! そんな擬音で俺にISの何を掴めってんだよ!」

「な、情けないぞ一夏! それでもクラス代表か? クラス対抗戦まで日が無いんだぞ?」

「お前が言っな!」

思っ……え?

「まったく……じ、じゃあ、明日も放課後に教えてやるからな」

「明日はもう少し理論的に頼むぞ……?」

「それはお前のやる気次第だな」

反射的に隠れて、やり過ぎず。

・・・え、何よあの女の子、何であんなに親しそうなの？
そもそも、何で一夏を呼び捨て・・・？

「・・・クラス代表、対抗戦・・・」

・・・その後、事務所はすぐに見つかった。

そこで私は、一夏のこととか対抗戦のこととか、いろいろ聞いた。
いろいろ、ね・・・。

Side 織斑 一夏

正直に言おう、俺は今グロッキー状態だ。

何しろ、ISの訓練の後に俺の「代表就任記念パーティー」と言う
催し物があったからな。

でも途中から俺そっちのけで、夜の10時過ぎまでどんちゃん騒い
でただけだけどな。

ところが今、クラスの女子達はいつもと同じ様子でワイワイ騒いで
る。

どうして体力が持つんだ・・・はっ、女子力ってそう言う意味なの
か？

「またどうせ、くだらないことを考えているのだろうか?」
「な、何を馬鹿な、し、失礼だぞ箒」
「どうだかな」

ふんっ、と鼻を鳴らして、教室まで一緒に来た箒がさっさと自分の席に行った。

箒との同居生活が始まって1週間経つが、箒はどう思ってたんだろうな……。

俺? 着替えとかシャワーとか気が気じゃ無い。

15歳の健全な男の子ですから……まあ、相手が箒で助かった。

これが知らない女子だったら、本気でどうすれば良いのかわからなかったからなあ。

知らない女子と同居してる俺……想像するだに恐ろしいな。

まあ、流石にそんなことは無いだろうけどな。

「……お、おはようございまーす!」

「えへへー、間に合ったねえー」

「うお?」

その時、俺のすぐ後に教室の扉を開けた奴がいた。

扉の枠に寄りかかるようにして立っていたのは、楓とのほんさんだ。

よほど急いで走って来たのか、楓なんかぜえはあ言ってる……身体弱いのに、大丈夫か?

「む、昔の話で、今は・・・」
「あ、そうなのか」

そう言えば、今は平気って言ったもんな。
うん、健康なのは良いことだもんな。
と言うか、そんなに急いでどうしたんだ？

「千冬姉様のホームルームに遅刻できる人間がいたら、見てみたいですよ・・・」

「あ、あはは・・・そりゃ確かにな」

遅刻したら、確実にお仕置きが待ってるからな。
俺が苦笑していると、その脇を通り抜けて楓が箒の所まで駆けて行った。

箒は窓の外を見ているから表情は見えないけど、楓はどこか嬉しそうだ。

「ほ、箒さん、おはよ・・・」
「・・・ああ」

「う、うん、えへへ・・・」

いや、挨拶はちゃんと返そうぜ箒。

まあ、それでもここ最近で大分改善してきたよな、無視はしなくな

「ただし、一応。
仲良きことは、良いことだからな。
箒も、もっと素直になれば良いのになあ。」

「あ、そうそうおりむー」

「おりむー・・・って、ああ、俺のことが」

「うん、そうだよー」

楓に置いて行かれた形ののほほんさんは、俺の横でにへらーとつとした笑みを浮かべていた。

うーむ、全身からゆるゆるオーラを出している人だな、袖丈が明らかにダボダボだし。

とは言え、俺も随分とクラスの女子に馴染んだのではなからうか。
・・・慣れって、怖いな。

「隣の2組にねー、中国の代表候補生が転校してきたんだってー」

「あ、それ知ってる知ってる!」

「うん、私も聞いたー!」

のほほんさんの話題に食い付いたのは、俺じゃ無くてクラスの女子だった。

おお、これが女子の噂力か。

そして、代表候補生と言えば・・・。

「ふふん、今さらながらに私の存在を危ぶんでの転入かしら?」

出ました、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんです！
・・・でも、「危ぶむ」って何をだ？
それにしても、4月のこの時期に転入って珍しいな。

「何だ、転入生が気になるのか、一夏」
「え？ あ、ああ・・・まあ、少しは」

うお、さっきまで自分の席にいたはずの箒まで来た。
その傍には、ちょこんと楓がついてきている。

やはり箒も楓も女の子、噂話が好きと言っことだろうか。
でも何故だ、何故か少し不機嫌そうだぞ。

昨日の夜、箒が寝間着に使ってる浴衣の帯が変わってることを指摘したら凄く機嫌が悪くなったのに。
・・・いや、あれも何で機嫌が悪くなったかわからないけど。

「ふん、今のお前に女子を気にしている暇があるのか、クラス対抗戦はすぐだぞ」

「そうですね一夏さん、この私と『ブルー・ティアーズ』をキズモノにしたのですから、勝って頂かないと困りますわよ？」
「・・・キズモノって、お前な」

俺の言葉に、セシリアはふんっ、と腕を組んで鼻を鳴らす。

最初みたいに毛嫌いされてはいないみたいだけど、正直これもどうなんだろう。

最終的に「お前を倒すのはこの私だからな」とか言ってる俺のピンチに駆けつけてきたりするのだろうか、それはとても嫌だぞ。

ちなみにクラス代表戦は、読んで字の如く、各クラスの代表が戦うリーグマッチだ。

優勝すると、学食デザートの学年フリーパス（半年）が景品として与えられる。

だからクラスの女子達の俺への期待値は年初来最高値を連日更新中だ、何てこった。

「・・・まあ、やれるだけやってみるけど」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝って頂きませんと！」

「男たる者、そんな弱気でどうする一夏」

「織斑君が勝つと、皆が幸せになれるよ！」

皆して勝手なことを言っているけど、でも俺まだIS動かして間も無いんだぜ？

等との訓練でも基本動作で躓いている段階で、とてもじゃないが「任せろ」とは言えない。

・・・我ながら情けないとも思うけど、事実だしなあ。

「でも専用機持ちはウチと4組だけだから、楽勝だよ。しかも4組の専用機持ちは・・・」

「その情報、古いよ」

その時、また別の誰かが話に混ざって来た。

クラスの女子の言葉に被せるように響いたその声は、どこかで聞いたような……。

Side 篠ノ之 楓

今日も篝姉さんと挨拶できた……とか考えていると、クラス対抗戦の話の最中に、隣のクラスの人がやってきた。

小柄な体躯、ツインテールにした長い髪、日本人とは少し違う鋭角的で艶やかな瞳。

「鈴……お前、鈴か!？」

「そうよ、中国代表候補生、鳳 鈴音! 2組も専用機持ちがクラス代表になったの……だから今日は、宣戦布告よ!」

腰に手を当てて、ビシッとこちらを指差して来るファ……えーと、鳳、さん?

どうやら一夏さんのお知り合いのようで、一夏さんはどこか戸惑った様子で頭を掻いている。

「・・・何、格好つけてんだ鈴？」

「んなっ・・・な、何てこと言うのよ、アンタ！ 普通そこは空気が読むでしょ、日本人なら！」

「いや、知らんけど・・・」

あーでも、中国代表候補生のISには少し興味が。

この学園の訓練用IS、『打鉄』うちがね（日本製・純国産・初心者用）はもうデータ取っちゃったし・・・一夏さんの『白式』びやくしきは整備の時に見えるし。

オルコットさんの『ブルー・ティアーズ』は、国籍の問題で私は手を触れられない。

・・・まあ、直接手を触れなくてもデータは取れるけど。

ちなみに私の『黒叢』こくそうはまだ、誰にも見せていない。

左手に待機状態の指輪をしているし、試験の時に千冬姉様と山田先生には見せたけど。

いやあ、山田先生強かったなあ・・・まあ、良いや。

私、たぶんIS学園最弱だと思うし、なら最弱として振る舞うだけだし。

中国のIS、どんなのかな。

あそこは貧困層放置でISにお金かけてるから、結構良い機体が・・・。

「もうSHRの時間だ、さっさと自分のクラスに戻れ、邪魔だ」

「げ・・・ち、千冬さん・・・」

「織斑先生だ」

一夏さんと鈴さんの言い争いがさらにヒートアップする直前、千冬姉様が登場。

鈴さんの頭を出席簿で二度もぶって黙らせる千冬姉様、クール過ぎ・

と言つか、「千冬さん」と呼ぶと言つことは鈴さんも千冬姉様の知り合いらしい。

千冬姉様は、いろいろと顔が広い。

東お姉ちゃんとは正反対、だからお姉ちゃんのお気に入りなのかな？
他にもいろいろ、あるのだろうけど。

「いや、驚いた・・・鈴の奴がIS操縦者になってるんてな」
「一夏、今のは誰だ？ 随分と親しそうだったが・・・どう言う関係だ？」

「そうですね、ライバルと慣れ合うのはどうかと思いますわよ？」
「え、ええっ・・・？」

篝姉さんとオルコットさん、そしてクラスの皆から集中砲火で質問の嵐。

一夏さんが困ってる・・・けど、今それをする。

「静かにしろ、バカ共！！」

ほら、千冬姉様の出席簿が火を噴いた。

・・・あれ？ 何で私まで叩かれてるんだろう・・・？

S i d e セシリア・オルコット

まったく、一夏さんには1組のクラス代表としての自覚が足りませんわ。

篠ノ之さん ああ、ややこしいので箒さんで良いですわね

とは、放課後に毎日訓練をしているようですけど。

でもISを使った訓練はしていないとか、確かに操縦者はそれなりの訓練が必要ですけど。

今の一夏さんに必要なのは、可能な限りISに触れること。

私に一撃を与えた 男とは言え 方が、簡単に負けてしま
うのも気に入りませんわね。

「待ってたわよ、一夏！」

「おお、鈴・・・でもそこ、通行の邪魔だぞ。食券が出せない」

「わ、わかってるわよ・・・」

そして昼休み、私達（一夏さん+私+箒さん）がお昼休みに食堂に行くと、噂の転校生が何故か立っていました。

どどーんと現れておきながら、一夏さんの言うことは素直に聞くと
言う態度。

アレは、狙っているのかしら・・・あ、ちなみに私が一夏さんと行動を共にしているのは、単純に一夏さんに興味があるからですの。

・・・他意は無くてよ？

まあ、私の隣に立っている篤さんはどうなのかは別でしょうけど。それにこのメンバー、イギリスの人間として見逃せませんし。

「そう言えば丸一年ぶりくらいだよな、鈴、元気だったか？」

「元気に決まってるじゃん、アンタこそたまには怪我病氣しなさいよ」

「何だよそれ・・・親父さんはどうだ、元気にしてるか？」

「え・・・あ、ああ、うん・・・元気、だと思っ」

そうこうしてる内に、えー・・・鈴さんだったかしら、その子と一夏さんが楽しそうにお喋りをしていました。

・・・おそらく、知り合いなのだと思いますけど。

でもIS初心者の一夏さんが、どうして中国の代表候補生と知り合いなのでしょうか？

「一夏、そろそろどう言う知り合いなのか説明してほしいのだが」

「いや、幼馴染だよ、ただの」

「幼馴染？」

・・・幼馴染と言うなら、篤さんが知らないのはおかしいのではな
くて？

それについて一夏さんが言うには、篤さんが引越した後に鈴さんが引越してきたので、擦れ違いのような形だったそうですわ。

何でも、織斑先生がIS操縦者として活躍して・・・家を空けることが多かった時期。

その時に毎日のように食事に行っていた中華料理屋の、娘さんなのだとか。

だからかは知りませんが、鈴さんのトレイには中国の麺料理が乗っておりますわ。

「・・・ところでアンタ達、誰？」

「なっ・・・わ、私を知らない！？ イギリス代表候補生であるこのセシリア・オルコットを！？」

「俺も知らなかったけど・・・」

一夏さんは黙っておいてくださいますし！

一夏さんはこの学園に来て初めてISのことを知ったのですからまだしも、中国の代表候補生ともあるう者が私を知らない！？

そ、それは・・・それは、私への侮辱ですわ！

「うん、私、他の国とか興味無いし」

「な、な・・・言うておきますけど、私、貴女のような方には負けませんわ！」

「そうなんだ、でも戦ったら私が勝つよ。私、強いもん」

ま、まああ・・・な、何て自信過剰な！
・・・な、何ですの一夏さん、その「お前が言っただ・・・」みたいな目は。

「あ、あああ、鈴。こっちは篤・・・ほら、昔話したろ、剣道場の娘」

「ああ・・・あの。まあ、よろしく」
「・・・こちらこそ」

篤さんと視線を交わしたのも一瞬、彼女はすぐに一夏さんの方へ視線を戻しましたわ。

そして、どこか少しだけ恥ずかしそうにしながら。

「そ、そう言えばさ、アンタIS初心者なんでしょ？ 代表候補生の私が、教えてあげても良いわよ？」

な！？

「ああ、そりゃ助か「結構ですわ！」・・・ええ、またこの流れか？」

「ああ、一夏は私と放課後にISの特訓をするのだ」

「ええ、専用機持ちの私が教えて差し上げますわ！」

「「え？」」

そもそも、一夏さんもそんなに顔こつとしないでくださいまし。今回はかりは、私も黙っていられますん・・・中国の代表候補生、
凰 鈴音。

お、覚えましたわよ・・・？

「大体、貴女は2組でしょう・・・敵の施しは受けませんわ！」

実際、1組のクラス代表のIS訓練を他のクラスの人間に任せるなんて、あり得ませんわ。

ええ、そう、あり得ませんとも！

こつなつたら、是が非でも何が何でも、一夏さんに勝って頂きます！

「ふーん・・・あつそ」

理屈が通っている分、彼女も反論が難しい様子ですわね。

一夏さんには見えていないでしょうけれど、私達の間には確実に火花が散っておりますわ。

しかし「クラス対抗」と銘打っているだけに、この理屈は崩せないでしょう？

「じゃ、それが終わったら部屋に行くから。空けといてよね、一夏

」！

「は？・・・あ、ああ」

さっさと自分の分の昼食を食べ終わると、鈴さんは食堂から素早く出て行きました……って。
だから一夏さん、そう簡単に頷かないでくださいまし！

Side 篠ノ之 篇

一夏の奴め、この上まだ女子が増えるとは……軟弱だ！
とは言った物の、心は焦る。

何故なら私には専用機が無い、対して向こうは専用機持ち。
しかも何故かセシリアまで混ざって……2機になってしまった。

ISの訓練と言う名目めくろくで一夏の放課後の相手を務める以上、どうし
てもISがいる。

でも、私には専用機が無い。

結局は、そこに行きついてしまうわけで。

これは……とても大きい、思ったよりもずっと。

「どづしたものが……」

と言いつつ私の足は、IS学園の訓練機の貸出申請を行うための総
合受付に向かっている。

いろいろ考えたが、やはりこれしか手が無い。

正直、今まではここに来るのが嫌だった。

別に私で無くても、きちんと申請さえすればIS訓練機の貸出は誰でもできる。

もちろん、順番とかはあるが・・・運が良ければ、その場で借りることも可能だ。

一夏の訓練のためと思ってはいても、やはり、その・・・。

・・・私は、「篠ノ乃 束」の妹だから。

でも、せめて訓練機が無いと一夏が・・・。

「あれ？ 篝姉さん」

「・・・あ」

総合受付の前でどうしようかと思っていると、反対側の通路から自分と同じ顔が歩いて来るのが見えた。

同じ顔・・・双子の妹、楓。

再会してからもう1週間以上経つが、どうしても1歩退いてしまう。

何を話せば良いのか、どう接すれば良いのか、わからない。

いや、普通に姉妹として接すれば良いと言っつのは、頭ではわかっているのだが。

・・・楓は、たはね姉さんよりはまだ、理解できるから。

「わ、わー・・・篝姉さんだ、こんな所でどうしたの？」

「う、う・・・その、訓練機を・・・」

「あ、訓練機の貸出申請？ 私もだよー」

ほら、と見せて来るのは申請用の紙の束・・・実はあの束を手に入れるだけでも時間がかかる。

それだけ、ISの機体は嚴重に管理されているのだ。

官僚主義とまでは言わないが、面倒な手続きが必要なのは確かだ。

「私はお友達のお手伝いなんだけど、篝姉さんは？」

「いや・・・わ、私は、その」

「あ、わかった、一夏さんでしょ？ 篝姉さん、昔から一夏さんのことがす」

反射的に、殴った。

「・・・い、痛いよ、姉さん・・・」

「お、お前が変なことを言うからだろうが!!」

「え、ええー・・・」

両手が書類で埋まっているため、私に叩かれた頭を撫でることもできない楓。

正直、悪かったと思う。

一夏に対してもそうだが、すぐに手が出るのは私の悪い癖で、それでいて素直に謝罪もできない物だから・・・。

・・・いや、でも今のは楓も悪いだろう。

それにアレだ、一夏のことが・・・その、どうとか言う話は子供の頃に「内緒だぞ」と言って話したことであって、こ、こんな往来でだな。

私がそんなことを考えていると、楓が嬉しそうににへら、と笑った。

「・・・な、何だ」

「うっん、篝姉さんとお話できて嬉しいなって」

言われて、はたと気付く。

そう言えば・・・そう、だな。

「えっと、東お姉ちゃんもね、その・・・篝姉さんの機た」

「その話はするな」

先程までの柔らかな気持ちだが、その「名前」を耳にした途端に冷める。

楓も空気が変わったことを感じたのか、少し表情が曇る。

ここ数日でわかったが、楓は姉たはねさんのことが好きらしい。

失踪している間、楓だけは姉たはねさんの傍にいたのだから・・・そう言うこともあるだろう。

だが、私は違う。

重苦しい沈黙が続く中で楓はおずおずと、しかし意外と力強く、手に持っていた書類の束を私に押し付けて来た。

訓練機の貸出申請用紙、しかも優先度1位・・・って、これは？

「・・・おい！」

私の声に返事をせず、楓はそのまま背を向けて駆け出して行った。私は手の中に残った申請紙の束に視線を落として・・・溜息を吐いた。

・・・友達の手伝いだったんじゃないのか、楓。

Side 織斑 一夏

き、今日はキツかったな・・・。

夜8時、ようやく寮の部屋に帰れた俺は溜息を吐いた。

まあ、つまりは箒と一緒に部屋なわけだが・・・個室、まだかな。

「ふん、鍛えていないからそうなるのだ」

ベッドの上でぐったりとしている俺を見下しながら、箒が鼻を鳴らしていた。

何とも優しい幼馴染である、まる。

今日の訓練は、剣道じゃ無くて本格的なIS戦闘だった。

どう言うわけか、箒が訓練機を借りて来てくれて・・・初めてかもしれない本格的な訓練だった。

そして、セシリア・・・何だか知らないけど、鈴に挑発されたのが頭に來たらしい。

それはそれは、もうビシバシと俺を苛め・・・鍛えてくれた。

と言うか、途中から箒と2人がかりで俺をボコボコにしていた。

身体で覚えるって、限度があるだろ・・・3時間休憩無し、アイツらは俺をどうしたいんだ。

まあ、とにかくシャワーでも浴びて・・・と思った矢先。

「と言うわけで、部屋かわって！」

台風・・・じゃない、鈴が部屋に來た。

しかも来ていきなり、箒に部屋を変わるよう要求。

要求であってお願いじゃない所が、鈴の鈴たる所以だ。

俺と出会ったばかりの頃は、俺ともよく喧嘩してたよなあ・・・って、懐かしんでる場合じゃ無く。

「い、いきなり何だ！？ 大体、なぜ私がそんなことをしなければならぬ！？」

「いや、男と一緒になんて嫌でしょ？ その点私は平気だから、かわってあげようかなって」

「い、いらん！」

前半は頷いても良いが、後半の意味がわからない。

ちなみに何故に鈴に俺と箒の同居状態がバレたかと言うと、訓練の

終わりに鈴が第3アリーナのピットに来たんだよ。

スポーツドリンクとか差し入れてくれて、嬉しかったわけだが……
箒とシャワーの順番について話してたのを聞かれて、それでバレた。

……あれ？ この流れでどうして鈴と箒が部屋をかわる話になるんだ？

それ以前に鈴の荷物、異常に少ないな。

ポストンバッグ一つで移動できるって、フットワーク軽過ぎだろ。

「ええい、くどい！ さっさと出てい……」

「ねー、一夏。一夏も私と一緒にの方が良いよね？」

「……無視、するな！」

「げ、馬鹿ほ……」

鈴の行動に堪忍袋の緒が切れた箒が、ベッド脇から竹刀を取り出した。

あ、馬鹿、防具も何も身に着けて無い相手にお前。

冗談抜きで危ない、そう思った次の瞬間、鈴の右手が光った。

Side 凰 鈴音

操縦者を守るISの「絶対防御」……これ、実は待機状態でも働いているのよね。

。 IS 開発者の篠ノ乃博士は言ったわ、「ISはISでしか倒せない」
そしてその操縦者も・・・「絶対防御」を抜けるIS（及び対IS兵器）でなければ、殺せない。

もちろん、それも絶対じゃ無い。

操縦者は自分で、自分の危機を乗り越えられるようになっていなければならぬ。

最低限、ISコアだけは死んでも守らないといけないから。

「鈴、大丈夫か!？」

「大丈夫に決まってるじゃん・・・私、代表候補生だもん」

「な・・・」

私の右手には、実体化したISの装甲が展開されてる。

その右手の装甲に、箒とか言う子が振り下ろした竹刀がぶつかってる。

と言つか、今の・・・私じゃなかったら、本気で危ないよ？

ISは操縦者の意思で部分的に展開できるの・・・候補生なら、0.5秒以下だね。

ISを展開するのは生身の人間だもの、反射よりも速く展開はできない。

だから代表候補生は全員、無意識に反応して展開できるのが、当然。できなければ、死ぬもの。

「絶対防御」は生命が危ないって時にしか発動しないし・・・片腕

くらいとかだと、守ってくれない。

「……ま、それはそれとして、一夏。昼間に聞きそびれたんだけどさ」

「あ、ああ？」

「その、さ……約束、ちゃんと覚えてるよね？」

候補生から女の子な気持ちにチェンジ、このへんの切り替えて重要よね。

そもそも、私が日本に来た理由の1つは一夏との「約束」だもの。本人が女の子に囲まれてるのを見て、ちょっとイラッとして後回しにしちゃったけどさ。

「約束、約束……ああ、もしかしてアレか！」

少し考え込んでいた一夏が、ぼんっ、と思い出したように手を打った。

お、覚えててくれた！

だよねだよね、女の子の一世一代の約束だもんね、覚えてるのが当たり前前よ！

1年とちよつとしか経って無いし……ね。

私が、大きくなったら毎日酢豚を……。

「奢ってくれるって話だったよな？」

作ってあ・・・へ？

私がぼかん、としていると（箒とか言う子も似たような顔してた、
どうでも良いけど）、一夏はうんうんと頷きながら。

「うん、確か鈴が料理が上手になったら、酢豚を毎日ご馳走してく
れるっつー・・・」

「・・・っ!」

それ以上は、聞きたくなかった。

違う、と叫ぶ代わりに、私は思いつきり一夏の頬を張った。
乾いた音が、部屋に響く。

「へ・・・？」

「さ・・・最っ低！ 女の子との約束をちゃんと覚えて無いなんて、
男の風上にも置けない奴！ 犬に噛まれて・・・死ぬ!!」

顔を見てらんなくて、箒って子の脇を擦り抜けて部屋から飛び出す。
箒って子が何か私に声をかけようとしたみたいだけど・・・知らない。
い。

一夏のバカ、馬に蹴られて死ぬば良いのよ・・・!!

「ほらほら楓ちゃん、急いで〜」

「は、はいっ」

「もう、先生に無理言っつて10時まで整備室使っつて良いっつてことになっつたのに〜」

「ご、ごめんなさい!」

本音さんに手を引かれるようにしてやって来たのは、IS学園の第2整備室。

整備室と言っつか、もうドックとか格納庫とか、そんな風と呼んだ方が良いような場所。

量産型から専用機まで、2年生以上の整備科の人達がISの研究・開発を行っている場所。

東お姉ちゃんのお秘密ラボほどじゃないけど、たぶん、世界最先端の技術の宝庫。

この中では、国籍も何も関係無い。

ただ、ISの整備の技術だけが物を言っつ世界。

「こ……こんな時間でも、人がたくさんいるね」

「対抗戦近いから〜」

「ああ、それで……」

もう夜8時を過ぎていていると言うのに、第2整備室にはたくさんの方がいる。

楽しそうにやっている所もあれば、怒鳴り合いながらISを弄っている場所もある。

あ、アレって専用機・・・？ と言うかあの発電機、最新型・・・？

「楓ちゃん、こっちだよ」

「は、はいっ」

私と本音さんの手にあるのは、訓練機『打鉄』うちがねの貸出申請許可証明書。

さっきまでかかってて・・・本音さんに「遅いよー」って凄く怒られた。

か、格好つけて篝姉さんに渡しちゃったから、書類集めからやらなといけなくて・・・。

うん、素直にごめんなさい。

「良いよ良いよ・・・でも、今回きりでお願いだよ？」

「う、うん」

にへらへらって笑う本音さん、可愛い。

でも、うん・・・二度としない、まさか書類の再発行があんなに面倒だなんて。

迷惑もかけちゃうし、うん、学んだ。

学校って、いろいろ大変なんだね・・・。

「え、えつと、それで・・・どこまで？」

「ちよちよ〜つと向こう〜、かんちゃんに紹介するから〜」

「か、かんちゃんさん・・・」

「うんっ、もっ、ちようちようちよ〜可愛い子なんだよ〜」

以前から名前は聞いてる、えーと・・・かんちゃんさん。

本音さんに手を引かれてやってきたのは、第2整備室の奥。

そこには『打鉄』^{うちかね}にどこか雰囲気似た、見るからに未完成のISがあつた。

「かんちゃん、来たよ〜」

「・・・本当に・・・来た・・・の？」

「うん、私はかんちゃんのメイドさんだから〜」

その機体を包んでいるのは、無数のディスプレイ。

そしてその中から、1人の女の子が降りて来る。

どうやらその子が、この機体の操縦者^{マスター}にして本音さんの「かんちゃん」らしかった。

肩を過ぎたあたりまで伸びた青みがかった綺麗な髪、赤い瞳をかすかに隠す小さな眼鏡。

小柄な身体を包むのはIS学園の制服、普通のそれよりも肌の露出は控え目。

それでいて・・・私は、剥き出しの細い指に目を奪われた。

青白いディスプレイの光の海の中に浮かぶその子は、まるで魔法使

いみたいで……。
とても、「綺麗」だった。

「楓ちゃん、紹介するね、この子があ、かんちゃんっ！」

「その呼び方……。と言うか、誰……。？」

「かんちゃん……。更識オラジキ 簪かんざしちゃんだよー！」

……。更識、簪。

この日、私は初めて……。

彼女と、目を合わせた。

第4話：「その幼馴染、2番目」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもー、楓です。

そろそろこの出だしも変わるかもしれないもっぱらの噂、まあ良いですけど。

今日は、私の通う学校についてご説明！。

まあ、ある程度は本編でもすでに説明されていますけど・・・。

IS学園

国際条約に基づいて日本に設置、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。操縦者以外にもメカニックとかを育成しています。学園はどの国家・組織にも属しません。国際規約上は外部の国家・組織が学園関係者に干渉してはならないことになっています。まあ、建前って大事ですよな。

各種アリーナ・訓練施設に学生寮、食堂、お風呂・・・どれもこれも超一流、運営資金は日本国が全部持つてます、今も昔も国際社会から力もらってます。10人ちょっとぐらい専用機持ちがいて、その倍ぐらいの代表候補生が所属しています。まあ、ちよつとした国際社会の縮図みたいな物。一般教養もあるので、れっきとした学校です。

篠ノ之 楓：

では、今回はここまでですねー。

うーん、そろそろ説明することがなくなるなあ・・・。

篠ノ之 束：

じゃあじゃあ、私達姉妹の幼少時のことでも……あの頃はスタイルに差も無かったんだけどねえ。

篠ノ之 楓：

お姉ちゃん！！

第5話：「クラス対抗戦」（前書き）

ISの二次創作を描く上で気になること。

・時系列（途中、明らかに矛盾が）

・IS機体分配数（ドイツ10機、少なくとも・・・？）

ここはオリジナルで考えた方が良さそうですね。

例えば「ドイツ10機」は実戦配備数で、研究・訓練用の分が後10〜20機くらいあるとか、そんな感じでは、どうぞー。

第5話：「クラス対抗戦」

第5話：「クラス対抗戦」

S i d e 織斑 一夏

あれから結局、鈴とは話せないまま、クラス対抗戦の当日を迎えることになった。

俺のISの操縦技術自体は、筈とセシリアのおかげで「まあ、形になつてきたかな」程度にはなった。

授業と放課後の訓練、夜を徹しての参考書読み・・・まあ、やれることはやった、が。

「来たわね一夏、ぶっ潰してやるわ・・・!」

超満員の第2アリーナ、第1試合は1組代表と2組代表。

つまりは俺と鈴だ、アリーナの中央まで飛んだ俺の目の前には鈴がいる。

鈴は赤みがかつた黒の機体、中国第3世代型IS『シエンロン甲龍』を装着している。

全体的に無骨なデザインだけど、両肩の横に浮いている非固定の棘付き装甲が特徴的だ。

・・・やたらに凶悪と言う意味で。

ちなみに、鈴はかなり激怒している雰囲気だった。

と言うのも、実は一度だけ鈴と話せたんだが・・・俺が約束をちやんと覚えていなかった（俺的には、完璧に覚えていたつもりなのに）ことについて、謝る謝らないの口喧嘩っぽくなってだな。
その・・・非常に、言うてはならないことを口走ってしまったわけ
で。

「私のスタイルを馬鹿にしたこと、後悔させてやるわ・・・!!」

「いや、その件に関しては本当に悪かったと思ってる」

「その件『は』？ その件『も』でしょ!？」

スタイル・・・まあ、その、鈴は同年代の女子に比べて小柄だからその、胸部と言うか何と言うか、とにかくそれだ。

それについては、本当に俺が悪かったって思ってる。

「今すぐ謝るなら、痛めつけるレベルを下げてあげるけど・・・？」

「雀の涙程度だろ・・・それに真剣勝負なんだ、全力で来いよ」

「わかった、殺す」

何か似たような会話をセシリアともしたけど、こつ言う物なのだろうか。

いや、剣道のようにもう少し紳士的（淑女的？）でも良いはずだ。
何もIS操縦者全員が「殺してやる」みたいな目で対戦相手を見たりはしないはずだ、そう信じたい。

「言うておくけど、ISの「絶対防御」も完璧じゃないのよ。シー

ルドエネルギーを突破する攻撃力があれば、相手に直接ダメージを
与えられるんだから」

「……」

「ああ、そうそう……その刀、『雪片』ゆきひらだっけ？ 記録映像レテオでア
ンタの試合見たわよ……あの金髪の子、強かったわよね」

金髪……セシリアか。

「言っておくけど、あの金髪の子がアンタに一太刀喰らったのはあ
の子が油断してたから。それとその刀の特性を知らなかったからよ。
……そのへん、勘違いしてんじゃ無いでしょーね」

「……わかってるよ、それくらい」

「あ、そう……なら」

実際、ここ最近の訓練で嫌という程わかった。

何しろ、あの後3回模擬戦やって、3回とも負けたしな、しかもボ
コ負け。

俺が代表候補生並だなんて……思っちゃいない。

俺がそう考えた時、試合開始の鐘が鳴った。

「うづらあつ……」

女の子らしからぬ気合いの声、同時に鈴の手には刃に持ち手のつい
た巨大な青竜刀。

しかも両手、鈴は縦から横から斜めから、俺にそれを叩きつけて来

る。
右から左から、上から下から・・・刃と言うには生温い豪の一撃が、俺を襲う。

エネルギーと金属が打ち合う音が響き、俺のISは鈴の猛攻に耐えかねてジリジリと下がる。

圧倒的な攻撃力を誇る『雪片ゆきひら式にがた型』を、攻撃に使えない。セシリアのような正確な攻撃じゃない、けど筈のように洗練された剣でも無い。

ただ敵を叩き潰し、ねじ伏せる・・・そんな、攻撃だった。

「・・・っ!」

ヂッ・・・裁き切れなかった一撃が、ISの胸の装甲を削る。俺はたまらず、その勢いを逆用して下がろうと・・・。

「甘いつ!?!」

鈴が叫ぶと同時に、肩のアーマーがスライドして開いた。肩の横に浮遊しているそれは、中心が光ったと思うと・・・。

見えない「何か」が、俺を殴り飛ばした。

衝撃、『白式』が警報を鳴らす。
その衝撃の強さに、俺は成す術も無く空中から地表に叩き付けられた。

Side 篠ノ之 楓

第2アリーナの、一夏さんサイドのピット・ルーム。
そこには、私と篝姉さん、オルコットさん・・・そして、千冬姉様と山田先生がいる。
私達の前には、アリーナで繰り広げられている一夏さんの試合を映しだしているディスプレイ。

一夏さんが凰さんの猛攻に耐えかねて距離を取ろうとした瞬間、「何か」に吹き飛ばされた。
一夏さんがアリーナの地表部分に小さなクレーターを作った瞬間、篝姉さんが息を飲むのが聞こえた。

「一夏・・・！」

その眩きが無意識の物であることは、わかる。
何しろ、篝姉さんの目はディスプレイから動かない。
ディスプレイの中の一夏さんが立ち上がり、再び空に上がって・・・
ようやく、息を吐いた。

もしかしたら、息を止めていたのかもしれない。

「何だ、今は・・・映像でも見えなかったぞ」

「・・・『衝撃砲』、ですわね」

「『衝撃砲』・・・」

オルコットさんの返答を口の中で繰り返した篝姉さんは、千冬姉様の背中を見つめた後、私を見た。

その視線は何かを求めるような、そんな感情を窺わせる。

・・・あ、私、説明役？

正直、虚をつかれた感があるけど・・・篝姉さんの役に立てるなら。私は目の前の自前の空間投影型ディスプレイを止めて、新しいディスプレイを篝姉さんに見えるように展開、その下に浮かぶキーボードを叩く。

「そんな高価なディスプレイ、どこで・・・」

オルコットさんが、半ば感心、半ば呆れたように私のディスプレイを見る。

東お姉ちゃんが作ってくれました、まる。

お値段は、ちよつとわかんない。

いくらくらいするんだろ・・・興味無いから良いや。

「えー、『衝撃砲』とは、空間自体に圧力をかけ砲身を作り衝撃を砲弾として打ち出す装備。画像から、肩と腕に装備されている模様。砲弾だけではなく砲身すら目に見えないのが特徴で、砲弾の種類にはいくつかバリエーションあり。今は・・・貫通型の方」

ディスプレイに浮かぶのは、事前に凰さんが学園側に提出したスペックデータ。

もちろん表向きの物なので数値などは控え目に書いてあるだろうし、隠し玉があるかもしれない。

オルコットさんの『ブルー・ティアーズ』にした所で、普段の試合では3割も力を出していないと思う。

何しろISは国家機密・軍事機密が満載なので・・・基本的に外部に公開がされない。

とは言え「情報公開」がどうか「知る権利」がどうか言う人が多いから、建前としてそれなりのデータが公開されてるわけ。

今、篝姉さんが見ているのは、そう言うデータ。

「な、なるほど・・・ところで、楓はさっきから何をしているんだ・・・？」

「今日は質問がたくさんで嬉しい、篝姉さん」
「・・・」

あ・・・黙っちゃった。

少ししょんぼりとしながら、私は作業を再開する。

空間投影型キーボードを4枚使って、中国のISのデータを集める。

・・・束お姉ちゃんのために。

一瞬、千冬姉様がこちらを見た気がするけど・・・すぐに一夏さんの試合に意識を戻す。

画面の中では、一夏さんが刀を振り上げて敵に迫っている所だった・・・。

Side 鳳 鈴音

思ったよりも、よく動くじゃない。

両肩と両腕の『衝撃砲』 中国第3世代装備『龍砲』 の
見えない砲弾を、アリーナの空間を限界まで動かすことで紙一重で
かわし続ける一夏を見ながら、私はそう思う。

この『龍砲』は砲身も砲弾も見えない、だから普通は回避なんてできない。

まあ、私が奇襲に使わずに直線的な撃ち方をしてるってのもあるんだけど。

ついでに言えば砲身斜角は、上下左右自由自在。

たぶん、ISのハイパーセンサーで空間の歪み値と大気の流れを探らせて避けてるんでしょうね。

「やるじゃん、誰に習ったの？ その大規模高速回避行動」

「・・・できないと、翌日の授業に出られなかったからな！」
「ふーん」

ドンツ・・・会話の最中にも、衝撃砲を撃つ。

一夏は私から大きく距離を開けることで、それを回避する。
もちろん私は連射するから、一夏は常に私から離れて高速での回避行動を続ける。

本当に、良くやると思う。

IS稼働時間の記録を見たけど、私の3分の1以下。

と言っか、まだ1カ月くらいよね、ISを動かせるようになったの
って。

それでこれだけ動けるんだから、もしかしたら才能があるのかもね。
・・・でも。

「はあぁっ!」

「ぐっ・・・!」

衝撃砲で回避先を誘導、そこへ一気に加速して踏み込む。

この『甲龍』^{シエンロン}はパワータイプ、それでも鈍重ってわけじゃない。

接近した後、両腕の青竜刀を一夏に叩きつける。

一夏はそれを刀で受け止める、一瞬だけの拮抗。

「・・・あはっ」

「・・・!」

『龍砲』、発射

私動きを止めていたから、一夏は回避行動が取れない。だから、私の衝撃砲をモロに受けて吹き飛ばす……今ので100くらいは削れたかしら？

一夏、アンタ、きっとISの才能あるよ。
でも……まだ、私には勝てない。

砲撃、加速、接近、斬撃、砲撃。

これを3度繰り返す、すると段々と勝負とは呼べないような状況になっていく。

「……強いな、鈴」

「当然……だって私は」

「代表候補生？」

「そゆこと」

4度目の砲撃　でも、その後の一夏の反応が違った。

吹き飛ばされると体勢を整えずに、そのまま私から離れて……連続で加速を始めた。

スペック上の機動力は、向こうの機体の方が上。

一夏は、アリーナ外周スレスレの所から旋回を始める。

私はそれを緩やかに追いながら、アリーナの内側でクルクル回る格好になる。

言っておくけど、IS操縦者は目を回して「ぐるぐる」「なんて」とにはならないから。

一夏の描く円が徐々に小さく　　つまり、段々と近付いて来る
なっていく。

「・・・は」

何か仕掛ける？　良いわよ、一夏。

・・・迎え撃って、あげるから！

両手の青竜刀の柄を連結、一つにして頭の上で回転させる。

一夏の姿が、一瞬だけ消える。

それは、私が青竜刀を連結させた瞬間を狙った急加速。

つまり、『イグニッション・ブースト瞬時加速』！

一瞬でトップスピードに至り、奇襲する戦法・・・だけど『シエンロン甲龍』
が教えてくれる。

・・・後ろお！

「うおおおおっ！！」

「・・・はあああっ！」

連結青竜刀『双天牙月』を振り下ろそうと背後を見ると、そこに一夏がいた。

一瞬、視線が交差した。
両手で大太刀『雪片』ゆきひらを持って、下段から……。

その時、アリーナ全体に衝撃が走った。

私と一夏が衝突したわけじゃない、私達の横を何かが通り過ぎて、地面にぶつかったのよ。
つまり、何かが空から落ちて来た。
な、何……アリーナの遮断シールドはどうなってんのよ……!?

Side 一夏

『織斑、鳳！ 試合は中止だ……退避しろ!!』

通信機越しに響く千冬姉の声、だけど俺は何が起こったのか把握できていなかった。

アリーナの中央には、鈴の衝撃砲どころじゃない威力の何か突き刺さったんだ。

俺が作ったやつは何倍ものでかさがあるクレーター、その中央には。

<警告、アリーナ中央に熱源。所属不明のIS、標的認証されています>

『白式』^白の声、同時にアリーナから爆煙が消える。

観客席から生徒が悲鳴を上げて避難するのが見える、だけどそれよりも……。

異形が、いた。

深い灰色の機体、手が地面につくほどに異常に長い。

その両手には大砲のようなスリットが入っていて、しかも首と肩が一体化している。

そして2メートルを越える巨体は『全身装甲』^{フルアーマー}、普通はシールドエネルギーがあるから全身を覆う必要は無い。

それをあえてやっている所が、余計に異形さを際立たせていた。

「一夏！」

「おわっ!?!」

鈴の声を認識した瞬間、『白式』^白のすぐ側を赤い閃光が走った。

目の前の侵入者が放った、極太のビームだった。

それはセシリアよりも威力がある……何しろISバトルでビクともしないアリーナの遮断シールドをぶち抜く程の威力があるからだ。

「一夏、試合は中止よ……すぐにピットに戻って！」

「り、鈴……お前は!?!」

「先生達が来るまで、時間を稼ぐわよ……その間に！」

じゃきんっ、とカッコ良く俺を背に青竜刀を構えながら言う鈴。それは本当にカッコ良いと思うが……俺は男だ。女を置いて逃げるとか、無理だろ！

「馬鹿！ アンタの方が弱いんだから、仕方無いでしょ！？」

したら、思いつきり遠慮無く言われた。

いや、確かにさっきの試合では俺が押されまくってたわけだけども。

「私だって、最後まで戦り合う気は無いわよ……大体こんな事態、先生達がすぐに」

『織斑君？ 鳳さん？ ちょ、逃げてくださいよ！？ 今すぐ先生達が制圧に行きます！！』

山田先生の声、制圧とは穏やかじゃないな。だけど、先生。

「……ぎっ！？」

「コイツ……！」

敵の巨体ISが、見た目よりも俊敏な動きで飛翔、こっちに突っ込

んできた。

一瞬だけ組み合った鈴が、衝撃の強さに弾き飛ばされる。
おいおい……. どんだけパワーあるんだよコイツ!?

かく言う俺も『雪片』^{ゆきかた}で敵ISの拳を受け止め……. きれない!?
ガクンツ、と視界が揺れて吹っ飛ばされる。

敵ISが両手を振り上げると、全身の銃口からビームの雨を振らせ
てきた。

ごめん、千冬姉、山田先生……. 逃がして、貰えそうにない!

Side 織斑 千冬

「もしもし? 織斑君、鳳さん? 聞こえてますか!?’」

ISのプライベート・チャネルを開いての緊急通信……. 実は声を
出す必要は無いのだが、山田先生はそれを失念する程に焦っている
ようだ。

無理も無い、所属不明のISが乱入して来たのだから。

一旦、冷静になる必要があるだろう。

そこでコーヒーでも淹れようとしたわけだが、何故か「塩」と書か
れた容器が。

……. 何故、こんな所に塩が?

「お、織斑先生、どうでしょう・・・」
「・・・やることは決まってる。中に突入してガキ共を助ける、それだけだ」

だが、それだけのことが非常に難しい。
アリーナの遮断シールドが戦争仕様レベル・フォーに設定されている上、会場に通じる全ての扉がロックされている。
シールド強度が上がったために、観客席の生徒の安全は保障されが・・・中の2人は別だ。

「あのISの仕業・・・ですか？」
「おそらく・・・政府に支援要請はしたが、間に合うまい。シールドの解除は他の先生と3年の精鋭に任せているが、何分かかるかわからん」
「そんな・・・」

このIS学園には、訓練機を含めて30機弱のISが配備されている。
教員用の専用機も存在するし、中にさえ入れれば事態を収拾できるだろう。

問題は、いつ入れるかだが・・・。

・・・私が、出るべきか・・・？
いや、だが・・・IS学園のセキュリティを突破できる程の相手が、

何故アリーナに？

狙いは『白式』^{びやくしき}か『甲龍』^{シエンロン}か・・・それとも、操縦者か、コアか。

「・・・織斑先生、私も出るべきでしょうか？」

「いや、必要ない」

「そうですね、承知しましたわ」

オルコットは形式だけ助力を申し出て来たが、私はそれを断る。

イギリス代表候補生であるオルコットに万が一のことがあつては困るし、連携訓練時間の不足やビットの運用方法が確立していないと言う理由もあるが・・・。

オルコット自身もそこまで強い意思表示をしたわけでは無いから、特に問題は無い。

「織斑先生、教員の皆さんのアリーナ内外への配置、完了です。でも中に入れないので・・・」

「シールドクラックの時間次第か・・・」

親指の爪を軽く噛みながら、他の対処法が無いか考える。

シールドが破れた次の瞬間には、制圧できる。

だがそれまで、一夏と風が持ちこたえられる確証は無い。

「あ、あら？ 篠ノ之さん達はどこに行ったのかしら・・・？」

「・・・？」

オルコットの声に振り向けば、確かに篠ノ之姉妹の姿が見えない。
・・・まさか、あの馬鹿共・・・!

「お、織斑先生！ 見てください！」

「・・・どうしました？」

「さ、さっきまでロックされてた会場へ続く扉の一部が、開いて・・・
あ、でもまたすぐにロックされてるんですけど」

「何・・・？」

山田先生の手元のディスプレイを覗けば、そこには第2アリーナの地図が。

このピットから・・・これは、中継室までの道か？

通路の一部のロックが一時的に開き、ほぼ同時に再ロックされている。

それも3分ほどの間隔を開けて、2回ずつ。

・・・これは。

ギリッ・・・誰にも気付かれないように、奥歯を噛みしめた。

Side 鳳 鈴音

「ぜああああっ！...！」

裂帛の気合い、だけど一夏の斬撃は当たらない。
舌打ちしながら、一夏が敵ISから離脱する……私がそれを衝撃
砲で援護。

敵ISが一夏を追撃する構えを見せたら、今度は私が突っ込む。

ギーンッ！

私の2本の青竜刀と敵ISの両腕が交錯する、火花を飛び散らせな
がら何度も斬り合う。

普通ならあり得ないくらいの運動性能……全身に推進機^{スラスタ}つけてる
って、どんな変態よ。

しかもこっちの攻撃捌いた後が無茶苦茶、だって腕をブンブン振り
まわして迫ってくるのよ？

「ああ、もう！ 面倒くさいわねコイツッ！！」

叫んで、衝撃砲で砲撃……けど、敵ISの腕は見えないはずの砲
弾を普通に叩き落とす。

もう7回目、コイツ、いったい何なの？

どこの国がこんな意味不明なISを、と言っか乗ってる奴って正気
なわけ？

「……なあ、鈴」

「何よ」

「アイツ、変じゃ無いか？」

「そうね、変ね」

「そうじゃなくて・・・何と言うか、機械じみてるって言うかさ」

ISは機械よ、言っておくけど。

まあ、7回も同じ防御、反撃を繰り返してるアイツは、確かに機械じみてるけ・・・。

「・・・アイツ、本当に人が乗ってるのか？」

「・・・無人機、つてこと？ あり得ないわ、ISは人が乗らなきゃ動かない」

「剣道やってる俺だからわかるんだけど・・・あんな緩急や乱れの無い動き、人間にできるのか？」

・・・無人機、あり得ない。

でも確かに、人間が乗ってるには不自然よね。

今も、私達の会話を聞いてるみたいな・・・。

「鈴、残りエネルギーは？」

「180」

「俺は60、まともな攻撃は・・・たぶん、あと一回しかできない」

一夏の太刀『雪片』^{ゆきひら}は、シールドエネルギーを攻撃力に変換して使う武器。

昔、千冬さんが使っていた武器。

でも今は・・・確かに、使えるかもしれない。

私の攻撃はアイツのシールドを抜けない、『雪片』ならそれができるかもしれない。

仮に無人機だとすれば、全力で攻撃をしてもためらいは無いってわけね。

・・・まあ、この状況ならアレが有人で操縦者を殺しても、罪にはならないと思うけど。

「・・・でも、攻撃が当たらないじゃん、アンタ」

「次は当てる」

「言いきったわね・・・良いわ、援護してあげるから突っ込みなさいな」

「おう」

とは言え・・・素人の一夏が当てられる確率は、一桁あれば良い方よね。

さて、どうやって当てさせるか。

代表候補生の、腕の見せ所よね・・・面白いじゃない。

そして、私と一夏が次の行動に移ろうとした時。

『一夏あつー!』

心臓が、止まるかと思った。

アリーナには、学園全体に試合の映像を流すための中継室って場所があるの。

アリーナ外周南側の、少しせり上がった場所にあって・・・アリーナのスピーカーを通して、声が。

『男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくて何とする!!』

「な・・・箒!?」

「ばっ・・・!!」

馬鹿じゃないの!?

そう言いたかった、けどそんな暇は無い。

目の前の無人機（仮）が、箒って子に興味を持ったのか・・・腕、つまり砲塔を向ける。

そこに光が集まって放たれるまで、数秒も無い。

「箒　　っ!!」

一夏の声、突撃する。

けど、間に合わない。

無人機の砲撃が、無防備な中継室を

直撃した。

いてもたってもいられない、と言うのはこういう心境のことを言うのだらう。

気が付いた時、私はピットを飛び出していた。

アリーナへ続く通路は閉鎖されていると聞いたが、それでも……。

「ちよちよっ…… 篝姉さん、もしかしてもしかするけど！ 冷静じゃ無い感じ!？」

「……何でついて来る!」

「いやいや、むしろ1人で行かないで……!」

どう言うわけか、楓までついて来ていた。

ピットから観客席へ通じる道は、避難する生徒で溢れていた。

く……これでは、一夏の所に行けないでは無いか!

「ね、姉さんってば……どっちにしる遮断シールドが」

「わ、わかっている! だがじつとしていられないんだ!」

息を切らせて膝に手をつけている楓にそう言うと、ふと気付く。

コイツは身体が弱かったはずだが、こんなに走って大丈夫なのだろうか。

まあ、授業のランニングなどは普通について来ていたが(その代わり、速くも無い)。

……何だかバツが悪くなって、楓から顔を背ける。

「とにかく、お前は戻れ。良いな」
「あ、ちょ……篝姉さん！」

楓をその場に残して、避難する生徒達の間を掻い潜りながら駆け出す。

観客席やピットがダメなら、アリーナに繋がる設備は……試合の中継室しか無い。

私は苦勞して避難する生徒の中を潜り抜けながら、通路の反対側の廊下へと進む。

少し進むと、鉄製の電子扉があった……当たり前だが、関係者以外が入れないようになってるのは、不思議なことでは無い。

やはりここも、入れないのだろうか……と、思って扉の前に立つ。

「……っ」

シュツ……と音を立てて、扉が開いた。
扉の向こうには、無人の通路が続いている。
どうやら、すでに避難が済んでいるらしかった。
なのにごうして、ここだけ……？

……考えていても仕方が無い、進もう。

周囲を見渡して、誰にも気付かれていないことを確認した後・・・中に入った。
後ろで、電子扉が閉じる音が聞こえる。
その後、いくつか扉があったが・・・全部、勝手に開いた。
まるで、誘われているような気さえした。

「一夏・・・っ」

そして、到着した。
中継室、誰もいないが機材の電源は生きている。
私は実況用のマイクを手に取ると、アリーナの全体スピーカーに繋げる。

アリーナの中央では、一夏とあの中国の代表候補生が、得体の知れない侵入者と戦っているのが見える。
ぎゅっ・・・無意識に、マイクを握り締める手に力がこもった。

「い・・・一夏あっ!!!」

叫ぶと、アリーナのスピーカーを通じて私の声が響く。
観客席から避難している途中の生徒が立ち止まる程の音量、一夏達も気付いた。
見るからに、苦戦している様子で・・・声を出さずには、いられなかった。

男なら・・・一夏なら。

そんな敵、簡単に、倒せるだろう・・・！
身勝手な願望、そんなことはわかってる。
だけど、言わずには、願わずにはいられなかった。
一夏は、私よりもずっと強いはずだと。

『箒　　つつ！！』

中継室の集音機材から、アリーナの一夏の声が聞こえる。
そして次の瞬間、アリーナ中央の敵が手をこちらに向けて。

砲撃。

中継室に爆風が吹き荒れて、私は小さく悲鳴を上げる。
周囲の機材や壁が揺れて、天井部分が吹き飛ぶ。
・・・だが、私自身には傷一つ無い。
何故・・・と、思ったのは一刹那。

「な、な・・・？」

私の目の前に、不思議な物があつた。
私の前と言うか、中継室の前方に、「それ」は浮かんでいた。
それは6つの剣のような、杭のような物体。
円環状に並んだそれは、『ブルー・ティアーズ』のビットのようにも見える。

決定的に違うのが、円状に並んだ剣型のビットの間に不可視の盾のような物を形成している所だ。

防御のためのビット・・・ISか？
だが、誰が・・・。

「大丈夫、姉さん・・・？」

声は、すぐ傍から。

首だけ回して振り向けば、そこには自分と同じ顔。

・・・楓？

「大丈夫、篝姉さんは私が守るよ」

私の隣に立っていた楓の身体を、光の粒子が包む。
ぶわっ・・・楓の短い髪が、風に揺れる。
天井を失った中継室の中で。

「だから・・・おいで、『黒叡』」

『黒叡』

・・・こく、えい？

次の瞬間、楓の姿が闇色に染まった。

Side 篠ノ之 楓

身体を締め上げる感触と、コアと意識が融合するこの瞬間。

私はISと一体化するこの瞬間が、凄く好き。

自分の中に、何か^{はい}が這入ってくる感触。

ぶるっ……と身体を小さく震わせながら、小さく息を吐く。

目の前に並ぶのは、私とお姉ちゃんが作った第3世代型IS『^{こくえい}黒叡』のスペックデータ。

いくつものディスプレイに、様々な数値が並んでは消えて行く。

ガキンツ、と音を立てて、『^{こくえい}黒叡』の腰部のホルダーに^{ソード}剣型ビットが戻る。

6基あるそれは、特殊な盾を形成する自衛用の刃……名前は『^{こく}黒翼』。

「楓、お前……?」

傍らの篝姉さんに、にこつ、と微笑んで見せる。

私のIS、『^{こくえい}黒叡』の機体カラーは黒、肩や腰部が丸みを帯びた流線的なデザイン。

背中にしよった2基のタンクが、可愛いでしょ?

「一夏さん、あと・・・えーと、凰さん！ 姉さんは大丈夫です・・・
やっっちゃってください！」

オープン・チャネルでISの通信回線を開いて、アリーナの2人に
そう伝える。

中継室、吹っ飛んじやったし・・・他に通信手段が無い。
まあ、別に良いけど。

『か、楓か！？ お前、その機体・・・』

「細かい話は後！ やっっちゃってください！」

『あ・・・ああっ！』

一夏さんが頷くのを確認すると、私は次の行動に移る。
腰部から再びソード・ビットを展開、正面からの衝撃に備える。
篝姉さんを『黒叢こくそう』の陰に隠すようにしながら、私は4つのディスプレイと4つのキーボードを開く。

「え、援護しないのか？」

「無理、攻撃用の武器が無いから」

「・・・は？」

いや、そんなぼかんとした表情をされても。

姉さんに返したように、このISに攻撃用の装備は無い。

ソード・ビットも防御・自衛以外には使えない。
ぶっちゃけ、このISで戦闘は無理。
模擬戦なんてしたら、10秒で負ける自信があるよ！

でも、箒姉さんが望むなら。

このISに武装は無い。

でもその代わり、東お姉ちゃん製のセンサー機器類は他のISとは比較にならない感度・精度を持つ。

元々、宇宙空間で活動する他のISを支援・補助するのが目的で設計したから……。

そして……開始する。

「じゃあ一夏さん、行きますよー？」

『何を！？』

「細工は流流、後は仕上げを御覧じろ！」

『だから何を！？』

それ以降は通信を遮断、集中しないと使えない。

ガコンツ、と音を立てて……背中の中から黒い何かが溢れ出る。

私の機体を伝って床に降りたそれは、次第に薄くなって空中に掻き消えて行く。

ナノマシン型兵装「黒叡」。

この機体の名前の由来、束お姉ちゃん製作の驚異のシステム。
コアへの干渉を可能にする、技術。
コアの開発者である束お姉ちゃんだからこそ、コアに干渉できるシステムを作れる。

・・・ただ、私が使うには手間も時間もかかり過ぎる。

「一夏っ・・・！」

私が合計8枚のディスプレイとキーボードに視線と指先を集中させている間にも、アリーナ中央では戦闘が続いている。

中継室近辺にも、流れ弾が飛んでくる。

けれどそれは、私のソード・ビットの盾で防げる。

箒姉さんはソード・ビットの盾越しに、一夏さんの戦いを見る。

私のISのことも気になるだろうけど、一夏さんの方がもっと気になるのだと思う。

・・・了解^{ロケ}、箒姉さんがそれを望むなら。

「・・・行くよ、『黒叢』」

その瞬間から、私の意識から全てが消える。

視界に映るのは、必要な時間と工程表。

指先に感じるのはキーボードの感触のみ、それ以外は何も知らない。

何も、いらぬ。

私と『黒叢』の、2人だけの世界。

・・・と言つかさ、アレ作つたの誰？

無人機かあ、それはそれでロマンだよな。

Side 鳳 鈴音

ザアア・・・と、耳元で鳴るはずの無い音がした。

ISのハイパーセンサーに一瞬だけ、黒い影みたいなのが映つた。
でもそれらはすぐに消えて、元通りの映像状態に戻る。

「何・・・？」

こんなのは、今まで一度だつて無かつた。

気のせいかとも思うけど、その「気のせい」すら起こさせない高性能な機械がISよ。

当然、不調でも無い。

だけど『甲籠』^{シムロン}のハイパーセンサーには、何も映つて無い。

ただ、周囲の光景がクリアに見えるだけで。

じゃあ、何・・・？

「……って、考えてる場合でも無いわね！」

どぼっ……と言う擬音が合いそうな勢いで、敵ISが光弾をバラ撒く。

全方位攻撃、でも狙点が甘い。

ISの機動力なら避けられる……アリーナの地表や壁の各所が爆発する。

ピッ……と中継室の方を確認すれば、あのビットの盾が正面を守っているのが見える。

あの黒いIS、どこの機体？

公式発表されてる機体じゃ無いわよね、日本の機体……でも無い
か。

「でやあああああっ!!！」

「え……あっ、バカ！」

一夏が、エネルギー残量も無いのに突っ込んだ。

近接ブレードしか無いのに……案の定、敵ISの太い右腕で受け止められる。

左腕が動く前に私も加速、その左腕に青竜刀を叩きつける。

それで一旦動きが止まる……けど。

「……！」

敵ISの腕の砲塔から閃光が走るのと同時に、私も『龍砲』を撃つ。エネルギーがぶつかり合って爆発、3機が離れる。

「ちょ……一夏！？ 作戦も無しに突っ込んで勝てる相手じゃ無いでしょ!？」

「良くわからないけど、楓が何かするらしいんだ！」

「はあ？」

楓って……あの黒いISの子よね。

確かに凄そうな機体だけど、でもそれが何よ。

「いや、わからん」

「アンタね……で、賭け甲斐のある賭けなんでしょうね？」

「いや、わからん」

ぶん殴ってやるうかしらコイツ。

つまり何の根拠も無しに信じてるってわけ？

だとしたら、本当にバカだわ。

……ま、一夏らしいけどね。

とはいっても、私もエネルギー残り少ないし、そんなには保たない。実はもう『龍砲』も撃てない、つまり大ピンチ。

さーで、面白くなってきやがったわねえ……。

「……楓！」

『……了解』ログ

タンツ……何かのキーを押す音が、どうしてか耳に響いた。
妙に機械的な返答は、もしかしなくても楓って子の声。
直後、一夏のISの様子が変わる。

近接ブレード『ゆきひらにがた雪片式型』が、強い輝きを発した。

刃が2つに割れて展開、そこから白いエネルギーの刃が飛び出す。

『メッシュ甲龍』のハイパーセンサーには、『びやくし白式』のエネルギー轉換率が
急激に上昇したことを示すデータが映ってる。
な、何……何で急に？

『エネルギー轉換率90%オーバー！ ISコア稼働率80%突破・
……一夏さん、やつちやつてください！』

「お……おう！ コイツで斬れば良いんだな!？」

オープン・チャネルで響く楓とが言う子の声。

え……ってことは、一夏のアレはあの子が……？
……どうやって？

「よし！ 行くぞ鈴！」

「ああ、もう！ 指図さしずすんじゃ無いわよ！」

言いながら、すぐに行動。

敵に接近しながら段階的に加速、まず私が突撃。

ヒュゴツ・・・音を立てて、青竜刀が地面を砕く。

右隣、回避した敵。

そしてその背後に、『瞬間加速イクニッション・ブースト』で一夏が肉薄する・・・！

「うおおおおおおおっ！！！」

白いエネルギーの刃を振り下ろす、敵の右腕を斬り飛ばす。
そして返す刀で・・・って所で。

「・・・げ」

やる気満々で太刀を構えた一夏、その機体からキュウウウ・・・
んって力の抜けるような音。

・・・『白式バクシキ』のエネルギーが、切れた。

え、何それ、その機体ってそんなに燃費悪いの？

嘘・・・え、本気で？ 馬鹿じゃないのおっ！？

次の瞬間、残った左拳が一夏を殴り飛ばした。

「一夏!!」

最後の加速、敵ISと一夏の間を割って入る。

敵ISの砲塔がゆっくりと上がる・・・エネルギーが切れた今の一夏ならどんな衝撃でもヤバイ。

反射的に、倒れた一夏を背中に庇う。

私の機体は、まだ盾になれる・・・!

「・・・鈴!」

一夏の声、大丈夫、死にやしないわ。

・・・その後のことは、ちょっとわからないけどさ・・・!
と、私が映画のヒロイン的に覚悟を決めた瞬間・・・。

「・・・へ?」

ガンツ、ガガガガガガ、ガガンツ!

甲高い音を立てたのは、無人機の装甲。

撃ち込まれたのは実体弾、もちろん私達は装備してない。

一夏に至っては近接ブレードオンリーだしね。

何かと思って顔を上げると、観客席に10機ほどのISが見える。

機体は第2世代型量産機の『打鉄』うちがねと『ラファール・リヴァイヴ』。

武者鎧のような日本製のISとネイビーカラーのフランス製ISが

居並ぶ姿は、何だか壮観だった。
その中の1機・・・先頭に立っていた『ラファール・リヴァイヴ』
が、手にアサルトライフルを持っていて、銃口からは煙が上がって
る。

「学園の・・・」

私の声が届いたわけじゃないでしょうけど、先頭の『ラファール・
リヴァイヴ』の操縦者がアサルトライフルを肩に担ぐ。
乗っているのは20代の女性、バイザー型のマスクをしているから
顔はわからない。

だけどその機体には、IS学園の校章。

その女性 たぶん先生の誰か が、口を開く。

『ウチの生徒が随分と世話になったみたいじゃねえか・・・ああ？』

次の瞬間、遮断フィールドで遮られているはずの観客席から、先生
達の機体がアリーナに踊りこんでくる。

あ、あれ・・・シールドは？

私が少し困惑している間に、アリーナから撤退するように千冬さん
から通信が入る。

無人機は・・・何と云うか。

・・・虐殺？

「・・・そんなわけで、お前達には罰を与えねばならないわけだが、どうだ、嬉しいか？」

誕生日に子供にプレゼントをあげた母親みたいな声音で、千冬姉がそう言う。

でも全然、内容は嬉しく無い。

ちなみに俺、鈴、篝、楓の4人がピットで千冬姉に正座させられて・・・あれ？

「えーと、千冬姉。ひよつとして俺達怒られてる？」

「死にたいのか？」

「生きたいデス」

いや、まあ、かなり無茶したとは思っ。

何と言つても、遮断シールドに対するあの無人機の干渉がなくならなかったら、俺達死んでたかもしれなかったらしいし。

・・・試合は当然、無効。

忙しいのに『瞬間加速』イグニッション・ブーストや『雪片』ゆきひらの使い方を教えてくれた千冬姉には、本当に申し訳ない気持ちだ。

「心配かけてゴメン、千冬姉」

「織斑先生だ」

「……織斑先生、えーと……他の3人はさ、俺を助けようとしてくれただけだし……」

「別に心配はしていない」

何てお優しいお言葉。

「……が、鳳はもう良いぞ、弟が世話になったな」

「い、いえ、幼馴染ですし……」

鈴の言葉に、隣で正座してた箒がピクツ、と反応する。

でも千冬姉の前だからか、大人しい。

千冬姉の前でこれ以上何かすると、逆に何をされるかわからん。

鈴は許され、俺は反省文10枚を言い渡されて解放。

箒と楓は、別件でさらに叱られるらしい。

……楓のISについて聞きたかったけど、まあ、今度で良いか。たぶん、束さんに貰ったんだと思うし。

「あー……鈴、すまん、いろいろと」

「もう良いわよ……私だって、ムキになってたしね」

千冬姉の説教でグロッキーだからか、鈴も何だか素直だった。
・・・あ。

「あー・・・思い出した、約束。正確には『料理上手になったら、私の酢豚を毎日食べてくれる?』だったよな」

「う、うん・・・ま、まあ、ほら、誰かに食べて貰うと上達するでしょ? それだけよ・・・ほ、本当にそれだけだからねっ!」

「お、おう・・・まあ、あの親父さんに習ってんなら、上手くなるだろ」

ピットから更衣室へ続く廊下を2人で歩きながら、ポツポツと話す。そんな中で、俺は鈴ががつきり親父さんに料理を習ってんだと思ってたけど・・・鈴の両親が離婚して、親父さんとは1年以上会っていないってことを初めて聞いた。

「家族って、難しいよね」

深いため息を吐きながらそう告げた鈴の顔が、とても印象的だった。家族・・・家族、俺にとっては、千冬姉だけだ。家族を、篝や楓、鈴や俺に関わる人全部を守りたくて、ISの訓練も耐えてきたけど・・・。

良くはわからないけど、あのエネルギーの刃・・・『零落白夜』も出せたけど。

実際には、エネルギー切れ起こしてお荷物だ。
・・・強く、ならないとな。
今日一日で、俺は改めてそう思った。

S i d e 篠ノ之 篇

・・・私達が織斑先生の説教 反省文・各方面への謝罪文その他 などから解放されたのは、一夏達が解放されてからさらに3時間、夜10時を過ぎてからのことだった。
危険地帯に自ら飛び込んだ馬鹿、織斑先生に15回ほど連続で言われて流石に落ち込むが。

「まあ、今回は緊急事態だ・・・本来は正式に罰則を与える所だが、今日の所はこれで勘弁してやろう」

とのことで、何とか解放された。
本来なら停学を飛ばして退学でもおかしくは無いが、諸事情でそれもできないそうだ。
織斑先生は理由を告げなかったが、私にはわかる。

私達姉妹が、「篠ノ之束」の妹だからだ。

姉さんの存在は、それだけ重い。
嫌だと思っても、消えてなくなるわけじゃない。
そしてそれが、自分を守っている。
・・・都合の良い時にそれに助けられ、また甘える自分が本当に嫌になる。

「ああ、篠ノ之・・・ああ、ややこしいですね、篝さん。寮の部屋の調整が付きましましたので・・・明日中に、お引越ししてくださいね？」

「え・・・？」

「返事はどうした、篠ノ之姉」

「は、はいっ！」

去り際、山田先生に一夏とのど、同居が終わったことを知らされた。そ、そうか・・・まあ、普通はそうなる、よな、うん。

自分にいろいろと言いつい訳しながら、私はアリーナのピットから出て行った・・・。

「あはは・・・ゴメンね姉さん。私、出て来た意味、あんまり無かったよね・・・？」

一緒に解放されたわけだから、当然、寮までは楓と一緒にだ。
正直、こちらもどう接したら良いのかわからない。
いや、楓自身をどう・・・とかは、思っていない。
だが・・・。

「・・・あ、このISはね、私が東お姉ちゃんと一緒に作ったんだよ。基本設計は私・・・可愛いでしょ？」

「か、可愛い・・・？」

「うんっ」

可愛い、と言うのはわからないが・・・待機状態なのだろう、左手の黒いひし形の指輪を見せて来る楓の顔は、笑顔だった。

織斑先生に叱られた直後だと言うのに、にへら、と笑みを浮かべている。

その笑みは・・・昔見た、あの人の笑みに重なって見えた。

そして、IS・・・姉さんと一緒に作ったと言う、専用機。

国籍は無い、所属は・・・「篠ノ之東の個人所有」。

正直、国際IS委員会や政府が黙っていないだろうと思うが・・・そこまでは、私にもわからない。

だけど・・・。

「あ、それとね・・・実は、東お姉ちゃんから、伝言があって・・・ずっと言わなくちゃって思ってたんだけど・・・」

「伝言？」

「・・・『篝ちゃんのも、ちゃあんと用意してあるからね』・・・だっ」

私のも、用意してある・・・その言葉の意味を。

私はおそらく、正確に把握している。

「じ、じゃあ・・・おやすみなさいっ」

私はパタパタと寮の中に駆けて行く楓の後ろ姿を、見つめるしかできなかつた。

・・・私は。

姉さんには、頼りたく、無いのに・・・。

あの人に、だけは。

Side 千冬

ガキ共への説教を終えた後、私と山田先生もアリーナから移動する。学園の地下50メートルの地点にある、特殊区画。レベル4の権限を持つ人間しか入れない、隠された空間。

例の試合に乱入してきたISが運ばれ、解析されているのもここだ。私が一夏や篠ノ之姉妹を留めている間に、全てが進行していたわけだ。

それに、私の権限ではイツらに叱責以上の罰は「与えられない」。

「・・・解析結果、出たようです」

「ああ、どうだった？」

「はい、アレは・・・無人機です」

世界中で様々な国が技術の粋を集めて開発しているIS、それにはまだ確立されていない技術もある。

その内の一部が、リモート・コントロール・スタンド・アローン遠隔操作と独立稼働だ。

つまり、ISの無人化・・・判明した時点で、学園関係者に緘口令が敷かれた。

もしこの技術が外に漏れれば・・・。

「・・・コアは？」

「未登録・・・467の登録コア以外の、新しいコアです」

「そうか・・・」

自壊システムが組み込まれていたのか、解析した段階で機能中枢のデータは全てデリートされていた。

積み重ねていたISCコアは、現時点ではただの素材の塊に過ぎない。つまり・・・现阶段では、確たることは何も言えない。

だが、ISのコアを作れるのは世界でただ一人。もちろん、決めつけるのは危険だが・・・。

「それにしても・・・楓さんの専用機、やっぱり問題ですよね」
「・・・ああ」

今回、篠ノ之妹は姉を守るためにISを使った。

基本的なスペックデータは他の専用機持ち同様、学園に提出されて

いる。

束の個人所有のコアと機体、と言うことで・・・委員会と政府も扱いに苦慮しているようだが、束がはっきりと「これは私のだ」と宣告している以上、手は出せないだろう。

・・・やり過ぎるなと言ったはずだぞ、束。

篠ノ之妹の専用機「黒叡」の能力は、ナノマシンによるコアの活性化だ。

それが、ISのコアに直接干渉する・・・そしてISの稼働率を高め、ワンオフ・アビリティ単一特殊技能に目覚めさせるだど・・・？

それは、下手を打てば世界の軍事バランスを崩しかねない程の能力。

「・・・」

今回、土壇場で無人機側からの遮断シールドへの干渉が止んだ。

それが無ければ・・・教員部隊はアリーナへ突入できなかっただろう。

どうして急にシールドのロックが解除されたのか、わからない。

・・・タイミングとしては、一夏が『零落白夜』を出した次の瞬間に干渉は止んだ。

まるで、目的は達したとでも言わんばかりに・・・。

・・・結果論、だが。

家族が死ぬのは、寝覚めが悪い。

そういう意味では、助かったと言つべきなのだろうが。

気に入らない、な・・・。

「織斑先生、何か心当たりでも・・・？」
「・・・いや、無い・・・今はまだ、な」

私の表情が気になったのか、山田先生が不思議そうに首を傾げる。
そんな私達の目の前では、例の無人機の解体・解析作業が進められていた・・・。

第5話：「クラス対抗戦」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、ようやく活躍できましたー。

いやはや、まあ、あんまり意味無かった気もするですけど。

ちにみに、無人機の動きを止めたのは私じゃ無いですよー。

だから千冬姉様、そんな探るような目で私を見ないでくださいよー。

篠ノ之 束：

むむ？ ちーちゃんが楓ちゃんばかり？

むー、ちーちゃんを誑かしたのはこのほっぺかー！？

篠ノ之 楓：

へ？ ちょ、束お姉ちゃん、出番はいつも後書き最後・・・うにゃ

ああああっ！？

篠ノ之 束：

げっへへへー、口ではそう言いながらも身体は正直ほんまだのー。

篠ノ之 楓：

うみやみやみや、ふおうふいふえふあー！。

*助けて、篝姉さーん！

織斑 千冬：

・・・馬鹿共が。

過去編：「運命のクリスマス」（前書き）

思うに、キャラクターには歴史を積まさないと・・・。
と言っわけで、ここでちょっとぴり過去編です。
では、ごじぞ。

過去編：「運命のクリスマス」

過去編：「運命のクリスマス」

それはまだ、篠ノ之 東によって変革される前の時代。

IS学園はおろか、人々がまだ「IS」と言う兵器の存在を知るはずも無かった時代。

世界が、1人の天才の「遊び場」になる前の時代。

3人の姉妹と2人の姉弟が、まだ共に在った時代。

まだ・・・何もかもが台無しになる、直前。

これは、そんな時間の物語

。

少年と少女が、向かい合っている。

いや、少年と少女と言うこともできない程に幼い2人は、男の子と女の子と表現すべきだろう。

年の頃は、小学校に入学したかどうか・・・5、6歳ほどだろうか。

1人は黒髪の男の子で、活発さを表すように髪の毛の所々がピンピン跳ねている。

女の子はリボンをつけたポニーテールで、幼いながらもすでに凜とした雰囲気を持っている。

2人が着ている物は道着であり、手に持っているのは竹刀。そして立っているのは、冬の空気が冷たい板張りの剣道場……。

「今日は、俺が勝つ！」

「ふん」

「……だああああっ！」

鼻で笑われたのが気に入らなかったのか、男の子はすぐに竹刀を大きく振りかぶって斬りかかった。

まだ剣道を始めて間が無いのか、その行動はどこか直線的で直情的だった。

対する女の子、こちらは慣れていいのか、冷静に相手の剣先を避けて竹刀を横にして……。

べしっ、ぐしゅっ。

見事に胴が決まり、男の子が剣道場の床に沈む。

それから女の子が型を崩した瞬間、男の子はがばりと身を起こした。その顔は、悔しさで真っ赤になっている。

「あ、明日は俺が勝つからな！ 篤！」

「ふん、その明日はいつ来るのだろうな、一夏」

いつも同じ問答をしているのか、男の子

織斑 一夏と、女の

子　篠ノ之　箒は、どこか慣れたような雰囲気を漂わせている。一夏にしてみれば女子に勝てないと言うのが我慢できず、箒にしてみれば剣道場の娘として始めたばかりの一夏に負けるわけにはいかない、と言う事情がそれぞれにあるわけだが・・・。
お互いにそれを察せられる程には、まだ成長していない。

「・・・くりすます?」

「んだよ、知らないのか?　千冬姉が言ってたぞ、ケーキとか食う日だよ」

2人しかいない剣道場で、自分の道具を手入れしながら　篠ノ之道場の伝統である　一夏と箒は12月25日と言う今日、クリスマス話題に興じていた。
厳密にはクリスマスはケーキを食べる日では無いわけだが、そこは子供、細かい点は無視である。

「けーき・・・?」

「知らねーのか?」

「ば、馬鹿にするな!　それくらいは知っている!」

もちろん、箒はケーキと言う食べ物は知っている。

ただ家が神社でしかも剣道場なため、クリスマスと言う習慣とは无缘なのである。

箒自身、そう言うナヨナヨしたイベントは好まないわけだからして・・・。

「……篝姉さん？」

その時、2人きりだった剣道場にもう1人、客が現れた。いや、客と言うのもおかしい……何故ならそれは、ここ篠ノ之神社の娘の1人なのだから。名前を。

「楓！」

妹の名を呼んで、篝が立ち上がる。

そして道場の入口まで駆けて行く小さな背中を、一夏はぼんやりと眺めていた。

ああ、明日は勝ちてえなあ

と、そう思いながら。

篠ノ之 楓と言う名の少女
ける子供だった。

女の子は、どこか儂げな印象を受

おかつぱの黒髪に、日の光に当たったことが無いかのような白い肌。道場の引き戸に半分隠れている小さな身体には、白い襦袢を纏っている。

どこか不安そうだった表情は、姉である箒が駆け寄ってくると明るい物に変わる。

普通なら日が差したような明るさとして表現する所だが、この女の子の場合は雪に月明かりが反射したような、静かな明るさと言うのが相応しいだろう。

姉・・・箒がその薄い肩に触れると、妹の身体がひどく冷えていることに気付く。

「ダメじゃないか、寝ていないと・・・こんなに冷えて」

「大丈夫だよ、今日は気分も良いし・・・空気が冷たくて気持ち良いくらい」

「ダメだ、昨日もそう言っただけで熱を出したばかりじゃないか」

蚊の鳴くような小さな声で応える楓に、箒は厳しい言葉を返す。

箒は、真っ赤な顔をして目を回していた昨夜の妹の様子を覚えている。

そんな姉の気持ちはわかってる物の、楓は姉のように動き回りたいたいと言う気持ちを抑えられない。

なので、割と揉める2人でもあった。

「箒、俺もう帰るぜー？ 千冬姉がうるせーから」

「あ、ああ、また明日な」

「おーう・・・ちゃんと寝てるよ」

最後の言葉は楓に向けて、一夏は姉妹の傍を駆け抜けて行った。

彼は彼で、自分の姉の待つ家へと帰りたくなつたのである。
箒はそれを目だけで追つた後・・・再び妹を睨んだ。

・・・なお箒本人は睨んでいるつもりは無いのだが、ツリ目のためかそう見えてしまうのである。

そこは、本人も少し悩んでいる様子である。

それはそれとして、箒は楓の背中を押しながら。

「ほら、早く部屋に戻るんだ」

「箒姉さん、今日はケーキ食べるの・・・？」

「何だ、聞こえていたのか？　うちは神社だぞ、ケーキなんて出ないに決まっている」

「あ・・・そう、なんだ・・・」

箒に背を押されながら、しょぼん、と沈む楓。

そんな妹の様子に片眉をピクリと動かしながらも、箒は楓を部屋の布団に戻そうと・・・。

「・・・こほっ、こほっ」

「ああ、ほら。早く布団に入って寝るんだ、また熱が出るぞ」

「・・・うん」

軽く咳き込み始めた楓の背中を撫でてやりながら、箒は心配そうに楓の顔を覗きこむ。

少し赤みを帯びた頬が、白い肌に映えて妹の可憐さを彩っている。

だがそれが良く無い　　体調を崩す　　兆候であることを知っ
ている筈は、心配でならなかった。

身体の弱い末の妹、楓。

一日のほとんどを布団の中で過ごす、双子の妹。

・・・この時、筈は妹のために小さな、そして大きな決断をした。

カシャンッ・・・多少くぐもってはいる物の、陶器が割れたような音が響く。

そして実際、ような、では無く割れた物がある。

新聞紙に包まれたそれを丁寧に扱うのは、幼い少女・・・筈だった。

側には小さなトンカチがあり、新聞紙の包みからは薄桃色の陶器の破片が出て来た。

そして破片に塗れるような形で、何枚かの硬貨が見える。

薄桃色のそれを繋ぎ合わせると、豚のような形になったかもしれない。

とどのつまり、豚さんの貯金箱を割ったのである。

「ひい、ふう、みい・・・の・・・」

たどたどしい手つきで数を数えながら、筈は膝の上に置いていた赤

いがま口に硬貨を大事そうにしまっている。

それは、箒が今まで貯めて来たささやかな貯金だった。

それを今日、使う。

・・・妹のために。

「・・・よし」

がま口を首から下げて、部屋を飛び出す箒。

隣の部屋　　楓が寝ている　　の方を見て、箒の表情は決意の色に染まる。

そして・・・。

「箒ちゃん、どこに行くのぉ？」

縁側に面する部屋の襖が開いたかと思うと、ズルズルと何かが這い出て来た。

のんびりした動作と口調、しかし伸ばし放題になった長い髪が廊下の板に広がっていて、幼い箒は少し怖かった。

「姉さん」

「堅いよー、楓ちゃんみたいにお姉ちゃんって呼んでよー」

「・・・嫌だ」

「ええええ」

駄々っ子のようにその場でゴロゴロしているのは、篠ノ之 束と言
う名の少女だった。

篠ノ之家の長姉であり、風変わりな娘として周囲から敬遠されてい
る。

とは言え、2人の妹にはいつも優しい、そんな姉だった。

どこかの村娘のような、村人のような、黒い西洋風のドレスのよう
な服。

コンセプトは、「1人ヘンゼルとグレーテル」。

年齢の割に豊満な胸が、窮屈そうにブラウスの中に納まっている。

「むぎゅー」

「ね、ねね姉さん、離して……っ」

「お姉ちゃんって呼んでよー」

「……」

「んー？」

束に身体を掴まれて引き倒され、柔らかな姉の身体の上でモフモフ
される筈。

その顔は、トマトのように赤い。

でも嫌がられてはいない、だから束もニコっつと笑っている。

筈は右に左に視線を彷徨させた後、普段からは想像もできない程に
小さな声で。

「……お姉、ちゃん……」

「か……可愛い……！」

「ね、姉さん、ね・・・っ!？」

散々姉に抱き潰された後、箒は息を荒げながら束から離れた。

束はニコニコと上機嫌そうに笑っていたが、箒の首に下がったがま口を見て首を傾げる。

はて、どこかに行くのだろうか？

「箒ちゃん、どこに行くの？」

「ちょ、ちよつと商店街まで・・・」

「しょーてんがい？」

うん？ と首を傾げる束。

箒は少し恥ずかしさが残っているのか、赤い顔のまま姉に背を向けて駆け出す。

「静かにしててね、楓が寝てるんだから！」

「え、うんー」

頭の上に「？」をいくつも浮かべながら、束は活発な妹を見送る。

この時点で、1人を除いて並ぶ者が無い程の才能を発揮している彼女。

そんな彼女をしても、人の心は複雑怪奇にして摩訶不思議、その深さの全てを知ることはいできない。

だからこそ、興味がある・・・相手が大事な妹となれば、なおさら。そう思い、束はもう1人の妹が寝ているであろう隣の部屋へと視線を向けた・・・。

織斑 千冬と言うのが、その少女の名前だった。

艶やかな黒髪、はっとするほど整った顔、雪よりも白く映えるきめ細やかな肌。

モデル並の長身を学校の黒い制服で包むその姿は、男女を問わず通りすぎる人々の視線を惹きつけてやまない。

鋭さとキツさを併せ持つ切れ長の瞳は、吸いこまれそうな程に美しい黒。

彼女がそこにいるだけで、周囲の空気までもが張りつめた物になりそうな程だ。

実際に声をかける勇氣ある男性もいるが、その全てが視線一つで追いつかれてしまう。

そんな彼女の心配事は、たった1つ。

「・・・遅くなってしまった。一夏も腹を空かせて待っているだろう」

ポツリと呟いたその言葉にだけは、鋭さとは無縁の温かな感情が見え隠れしている。

特に「一夏」・・・弟の名を紡ぐ時、その表情に浮かぶ感情は冷徹さよりも温かさの方が勝っているように思える。そんな彼女の手には、大きく膨らんだ買い物袋。

彼女が今まさに商店街で購入した食材であり、今日の夕飯の材料である。

料理はあまり得意では無い千冬だが、クリスマスくらいは弟に温かい食事を食べさせてやりたい。

両親が蒸発して以降、弟の世話だけが千冬にとって・・・。

「・・・うん？」

商店街の端にまで来た時、千冬は足を止めた。

はたと立ち止まって見つめるその先には、剣道着姿の小さな女の子がいる。

道行く人の多さに戸惑っているのか、酷く困っている様子だった。普段なら気にも留めない千冬だが、それが良く知る顔だっただけに無視はできなかつたのである。

「・・・箒？」

「あ・・・千冬さん」

そこにいたのは、箒だった。

千冬にとっては通っている剣道場の娘であり、親友たはねの妹である。加えて言えば、千冬の弟の友達でもある。

「どうした？」

「あ、その……」

胸の前で手を握り締める箒に、千冬はしゃがみ込んで視線を合わせる。

いつも明瞭な受け答えをする箒にしては珍しく、どうも言いにくそうである。

千冬は内心で頭を掻きながら、根気強く待った。

だがむしろ、幼い箒は千冬の視線の鋭さに気圧されていたわけだが……。

……この点、千冬と箒は共通の悩みを抱えていると言える。

「……実は……」

やがて、ポツポツと箒は自分が1人で家を出て来た理由を告げる。それを聞いた千冬は、話の最中に頷きを返しつつ事情を了解した。箒が行きたい場所は……。

「……良くわかった」

ぽんっ、箒の頭に手を置きながら、千冬は厳格に告げる。

「では一緒に行こう、ちょうどうちの予約した分を取りに行く所だ」
「・・・い、良いん、ですか？」
「構わないさ」

そこで初めて笑って、千冬は立ち上がる。
そして箒に手を差し伸べると、箒は戸惑いつつもその手を取った。
2人は手を繋いだまま、商店街の雑踏の中に消えた。

・・・なお結果として、箒が持っていた分のお金では目的の物は買えなかった。

千冬が箒から受け取った分にそつと1000円玉を足してレジの店員に渡したのは、また別の話である。

「・・・つたく、千冬姉はどこに行ったんだよ」

たつたつたつ・・・と道を走りながら、一夏は不満そうに唇を尖らせる。

家にいるはずの姉の姿は家に無く、一夏は姉を求めて近所を駆けずり回っていたのだ。

本人は絶対に認めないが、つまりは姉が恋しいのである。
箒と楓を見て、影響されたのかもしれない。

「……つたくよー、箒はよー」

思い出したせいかわ、一夏は別の意味で唇を尖らせる。

寒い冬の空気の中で、一夏はどうしたら箒に勝てるかを考える。

……が、妙案は何も思い付かなかった。

「あーくそー……勝ちてえなあ、勝てねえかなあ……」

元々、姉の千冬に無理矢理やらされていた剣道。

だが、箒の存在が一夏のやる気を刺激している。

同い年の女の子に勝てないと言っつのは、幼い男の子のプライドに大きな傷をつけているのである。

だが実直な姉の影響か、一夏は原因を自分の力不足に求める。

箒のことは気に入らないが、それで箒自身をどうこつとは思わない……。

「……あ？」

いくつ角を曲がったあたりで、一夏は足を止める。

目を細めて先を良く見ると……。

……そこに、数人の男子に囲まれた箒の姿を見つけた。

商店街で千冬と別れた後、箒は急いで家に帰ろうとしていた。もつすぐ日が暮れる時間で、トタトタと走る。もつとも、子供なのでそれほど速くは無いが……。

あと少しで神社……家につくと言う所で疲れたのか、肩で息をしながら立ち止まる。

はぁ、はぁ……と息を吐きながら、箒は自分の胸元に視線を落とす。

そこには、両手で大事そうに抱えた白い箱があった。

箒はその箱を見ると、かすかに笑みを浮かべて……。

「あ、男女だ！」

「本当だ、男女おとこおんながいるぞ！」

「……？」

その時、道の向こう側から2、3人の男子がやってくるのが見えた。箒と同じ年の男子で、箒も知っている顔だった。かと言って、それは仲が良いことを意味しない。そもそも仲が良ければ、箒のことを「男女」とは呼ばない。

「おい、男女、今日は木刀持ってないのかよ」

「喋り方も変だもんな、俺知ってるぜ、武士って言うんだ」

「武士って男だもんな、やっぱり男女だよな」

木刀では無く、竹刀だ。
だがそれを訂正する気にもなれない、箒は今度は本当に相手を睨んでいる。

剣道を習っている箒は、基本的に同い年の男子よりも強い。
それが原因で、こう言うことは何度もあった。

「あれ？ コイツ今日リボンしてるぞ、男女のくせに」
「わっ、ほんとだ、似合わねー」

箒は普段から髪を縛っているが、基本的にリボンはつけない。
リボンをつけるのは、一夏との稽古の日だけだ。
だがそれにも、箒は手にした箱を抱き締めるだけで何も言い返さない。

「・・・何だ？ その箱」
「・・・っ、触るな！」

ぱあんっ・・・乾いた音が響く。
箒の持つ箱に触ろうとした男子の顔を、箒が片手で張った音だ。
頬を張られた男子は少しよろめいた後、顔を押しさえながら。

「な・・・何すんだよ、コイツ！」
「やっちまえ！」

男子達が箒に掴みかかろうとして、そして箒が両手で箱を庇おうとした時……。

「よってたかって、何してんだお前ら」

「……一夏！」

家に帰ったはずの一夏が何故ここに、と言う疑問を箒が感じている間に、一夏は3人の男子相手に喧嘩を始めた。箒も加勢したかったが、両手が塞がっていてできない。

……と言うか、剣道に加えて千冬に武術の基礎の基礎を習っている一夏は、途中から3人の男子を一方的に殴っていた。むしろ、一夏が苛めているようにも見えるから不思議である。

「ぱ、パパに言い付けてやるからな！」

「お、覚えてるよ！」

「へっ、おとといきやがれってんだ」

覚えてたての言葉を無駄に使いながら、一夏は舌を出して男子達を追い払った。

流石に無傷では無いが、逃げて行く男子達に比べれば軽い物だった。ぐいっ……手の甲で頬を擦りながら、一夏は「へっ」ともう一度鼻で笑う。

「い、一夏……」

「ん？ ああ、大丈夫かお前」

「あ、ああ……」

どことなく視線を彷徨わせながら返事をする筈、一夏は心の中で「へんなやつ」と思うが、それを口にはしなかった。

「べ、別に、お前の助けなんていらなかったんだ」

「別にお前を助けたわけじゃねーよ。ただ男のくせによつてたかっつてのが気に入らなかつただけだ、勘違いすんなよ」

「ふ、ふん。そうか、それなら良いんだ」

そっぽを向きつつも、筈はチラチラと一夏のことを見る。

一夏は逆に、頭を掻きながら筈から目を離す。

筈は、箱をぎゅっと抱き締めながら……。

「あ……あ、あり、ありが「ああ、それよりさあ」と……何だ？」

「千冬姉、知らね？」

「……もう、帰ってると思うぞ。さっき商店街で別れた」

「マジ！？ ヤッベ……！」

「あ、おい……」

そのまま別れも告げず、一夏は一目散に駆けて行く。
伸ばしかけた手を引っ込めて、箒はそんな一夏の背中を見送る。
一夏としては、千冬に叱られたくないがための行動である。
とは言え、箒としては拍子抜けも良い所だった。

「じゃーな、箒！ また明日な」
「・・・ああ！」

それでも、一夏の声に手を振って応じる。
また明日、その言葉があればそれで良かった。
箒は手を振った拍子に落としかけた箱を、慌てて持ち直す。

再び顔を上げた時には一夏の姿は見えなくなっていて、溜息を吐く。
・・・それから、思い出したかのように駆け出した。
家へ・・・妹の、所へ。

軽く咳き込む音と、熱に浮かされたような呼吸。
姉によって布団に押し込まれた後、やはりと言うか何と言うか、
楓は体調を崩していた。
箒が心配していたように、身体を冷やしたのが不味かったのかもし
れない。

母親は風邪だろうと言い、楓に少量のおかゆと薬を飲ませた後、楓を寝かしつけた。

楓が目を覚ましたのは、夜になってからのことだった。

障子の向こう側は真っ暗で、自分がまた1日を布団の中で過ごしたことを嫌でも思い知らされた。

それが幼い楓には辛くて悔しくて、仕方が無かった。

「……はあ……」

熱を孕んだ吐息を漏らして、楓は半身を起こす。

その時、はらりと額に乗っていた濡れタオルが落ちる。

それから体調を崩した時に特有の寒気を感じて、自分の身体を抱くようにする。

楓は思う、幼いながらに。

自分もつと、いや、ほんの少しで良い。

丈夫な身体で生まれて来ていれば、良かったのに。

「お姉ちゃん達は、良いな……」

2人の姉は2人とも、病気とは無縁の生活を送っている。

上の姉は良く分からない人だが、とても頭が良くて明るい。

下の姉は楓の憧れで、毎日を健康に健全に生きて、剣道では年上にも勝つ程だと言う。

2人の姉はあんなにも、輝いているのに……。

「……にゃんにゃにゃーん……」

「え……?」

その時、楓の寝ている部屋の襖がゆっくりと開いた。

暗がりの中、そこから頭を出したのは……大きなクマさんだった。クマなのに何故「にゃ」なのかは、不明である。

「にゃにゃにゃ、おはようにゃーん」

「……東、お姉ちゃん?」

「ギクウツ! 何故にバレたにゃ?」

楓よりも大きそうなクマさんの影から出て来たのは、東だった。

楓が起きるのを待っていたのかどうなのか、そそくさと部屋の中に入ってきて……。

筭と同じように、楓を抱き潰しにかかった。

「にゃるるん、楓ちゃんは可愛いなあ」

「わぶつ……!」

「ん? んん? 楓ちゃん、身体がポカポカだね。どうしたの、オーバーヒート?」

普通に熱っぽいだけである。

「ほいほーい、お姉ちゃんからのクリスマスプレゼントだよん」
「・・・くまさん？」
「むふふ、見て見て楓ちゃん！ これねえ、ここを押すと」
『やふー、東お姉ちゃんだよん！ 今日もらぶりい？』
「ほらほら、お姉ちゃんの声で喋るんだよ、凄いでしょー？」
「う、うん・・・」

これでいつもお姉ちゃんと一緒にだからね、と笑う東の顔を、楓はと
ても眩しそうにしながら見上げる。
東は、本当に何でもできる。
自分とは、大違いだと思いながら・・・。

「・・・お姉ちゃんは、凄いな」
「うん？ むふふ、そりゃあ天才の東さんだからね。仕方無いよ、
お姉ちゃんが凄いの生まれの時から決まってることだもん。で、
で？ 嬉しい？ 楓ちゃん嬉しい？」
「う、うん、ありが「楓ちゃん可愛い〜！」もががが・・・っ」

むぎゅうつ、と抱き締めたり頬をスリスリしたり、やりたい放題な
姉であった。

とは言え、東の体力に楓がついていけるはずも無く・・・。

「・・・こほっ、こほっ」
「おやおや？ 楓ちゃん風邪？ キャッチコールド？」

「ん……ぐすつ……」

すんすん、と鼻を嚙りながら咳き込む楓を、束は不思議そうに覗き込む。

「お姉ちゃんは、良いな……」

それは、羨ましさを通り越して羨望ですらあった。外を走りたい、遠くに行きたい。自分の足で駆け回って、いろいろな所へ。

「楓、お外で遊びたい……」

「ふーん、そうなの。変なお願いだねえ、ふうーん」

束は首を傾げて妹を眺めた後、ふむっ、と腕を組んで思考の海に沈む。

ぽく、ぽく、ぽく……ちーんっ。

まさにそのような感じで、ぽんっ、と手を打つ束。

「おーけー、おーけー、任せて楓ちゃん。お姉ちゃんがぜえんぶ、何とかしてあげるからねっ。大丈夫、束お姉ちゃんは世界一の大天才だかね、ドクターゲ も真っ青さ！」

「どく……?」

「うんうん、楓ちゃんはなあんにも、心配しなくて良いからね。全

部お姉ちゃんがやったげる、何もかも隅から隅まで塵一つ残さず、綺麗さっぱり全部！ うん、もういつそのこと星の外まで行っちゃう感じで・・・ああ、うん、良いねそれ・・・」

ぐしぐしぐし・・・妹の頭を撫でて、束は立ち上がる。

鼻歌など歌いつつ出て行く姉を呼び止めようとするも、楓の小さな声は届かない。

こほっ・・・小さく咳き込みながら、楓は姉を見送るしかなかった。

上の姉の考えていることは、幼い楓にはわからない。ただ、疲れたように息を吐いて・・・。

「・・・楓？ 今、姉さんが来ていたのか・・・？」

そして、もう1人・・・下の姉が、楓の部屋を訪れた。その手に、小さな箱を持って・・・。

「・・・ほら」

「・・・？」

そっぽを向きながら筭が押しつけて来たのは、小さな白い箱だった。

押しつけられる格好となった楓は、不思議そうな顔で手元のそれを見る。

何かが入っているのか、少し重い……。

「これ、何……?」

「良いから、開けてみる」

そつぽを向いたままそつ告げる姉、楓は小さく首を傾げながら箱を開ける。

そこには……。

「わぁ……」

そこには小さな苺のショートケーキが、一つだけ入っていた。しかも、砂糖菓子のサンタがちょこんと鎮座している。楓の目が、一瞬だけ輝いて見えた。

箒は妹が目を輝かせるのを見て、少しだけ嬉しそうな顔をしたのだが……。

楓が自分のことを見ると、慌てて仏頂面でそつぽを向くのである。

「は、早く食べる。父さんに見つかったら、叱られるぞ」

「う、うん」

付属のプラスチックのフォークを使って、楓は小さく切り取ったケーキを口に含む。

クリームの甘さに、熱とは別の種類の赤みが頬にさす。

本当は、体調が悪い時にケーキは食べない物だが……。

「う、美味しいか？」

「うん、うん……」

「そ、そうか。もっと食べる」

「ん、ん……」

口一杯にケーキを詰め込んで頷く妹に、箒はほっとしたような表情を浮かべる。

その時、不意に楓は箒を見た。

そして少しだけ首を傾げて……。

「……箒さんは、食べないの……？」

「わ、私は……こ、ここに来るまでに食べてしまったのだ。だから気にするな……ほら、早く食べる！」

「う、うん……」

姉に急かされて、楓は慌ててケーキを食べるのを再開する。

……本当は、箒もケーキを食べたかったのだが。

それでもケーキを食べる楓を見てみると、箒は小さな胸に温かい何かを感じることができた。

筭にとって、楓は守るべき大切な妹で。
その妹を言ばせられるのが、どうしようも無く嬉しかった。
それは・・・そんな夜の、出来事だった。

クリスマスから幾日かが過ぎて、年も改まったある日。

千冬は篠ノ之神社への初詣のついでに、唯一とも言っても良い親友を訪ねた。

両親や妹まで 例によって寝込んでいる楓は別として が
忙しくしている中、巫女としての役割を欠片も果たしていない親友を。

「東、いるのか？」

勝手知ったる何とやら、居住スペースの屋敷の縁側を歩きながら、
千冬は東の名前を呼ぶ。

普段はやかましいくらいに付きまとして来る親友が、この1週間は音信不通。

本人は認めないだろうが、千冬も心配になってきていたのである。

そうこうしている内に、東の部屋の前に到着する。

耳を澄ましてみれば、部屋の中からは何かの電子音や何かを削っているような音が響いている。

和風の家には、似つかわしく無い音だった。
とは言え、それは今に始まった話では無い。

「東、入るぞ」

千冬は軽く眉を顰めて襖を開けて・・・結果、さらに深く眉間に皺を寄せることになる。

意外と広い畳の部屋、そこには・・・。

白銀の、鎧のような「ナニカ」があった。

周辺は奇妙な機材やコードで溢れており、気のせいで無ければ化学薬品の匂いや何か焦げているような音すら聞こえる。

和風な部屋には似つかわしく無い物が、その部屋には揃い過ぎていた。

そして数々の計器の中に埋もれるように、1人の少女が何かをしている。

その少女、篠ノ之 東は千冬に気が付くと、にへら、と頬を緩めた。

「ちーちゃん」

「・・・何を、しているんだ？ 東」

「え、これ？ うふふ、まだ内緒だよん」

ニヤニヤと、悪戯を仕掛けている最中の子供の顔で東が告げる。

千冬はそれに対して、さらに顔を顰める。
何故なら今の束の顔は、とんでもないことをやらかす時特有の物だったからだ。

「うーん、でも私これ乗れないしなあ・・・そだ。ねえねえ、手伝ってよ、ちーちゃん」

「手伝う?」

「うんうん、2人の愛の共同作ぎよおおおおおお・・・!??」

千冬のアイアンクローにバタバタと悶える束、それを無視しながら千冬は部屋の真ん中で鎮座する無骨な鎧のような「ナニカ」を見上げる。

鋭く、目を細めて・・・。

「・・・で、束。コレは何だ」

「え? うーん、まだ名前とかは決めて無いんだけどねえ・・・とりあえず・・・」

千冬のアイアンクローからしれつと逃れて、束は楽しそうに白銀の「ナニカ」を見上げる。

まだ誰も知らない、世界で2人しか知らない「ナニカ」を。
むふふと笑って、束は告げる。

「『白騎士』ってのは、どうかなあ?」

その時の束の顔を、この後、千冬は生涯忘れないことになる。
何故ならそれは、運命の瞬間だったのだから。

過去編：「運命のクリスマス」（後書き）

篠ノ之 楓：

懐かしいなあ、いつのクリスマスだっけ。

あの頃はまだ身体が弱くて、ほとんど寝てばかりだったけど・・・。

篠ノ之 箒：

そう、だったな・・・。

篠ノ之 束：

あの頃は箒ちゃんも「お姉ちゃん、お姉ちゃん」ってお姉ちゃんの後についてきてくれてたんだけどねえ、懐かしいなあ。

篠ノ之 箒：

う、嘘を言わないでください！

と言っか、何でいる・・・！？

篠ノ之 束：

箒ちゃん、ひどういつ！

ねえ、楓ちゃん、酷いよねえ！？

篠ノ之 楓：

え、ええええ・・・。

第6話：「金と銀」

第6話：「金と銀」

Side 織斑 一夏

俺以外は女性しかいない、そんな環境でもいつかは慣れるものらしい。
幼馴染達と再会したり、ISでの実戦に明け暮れたり……。
そんな波乱づくしな学園生活だったが、ここ1週間は平穩そのものだ。

筈との同居生活も終わって精神的にも平和だ、男の子的に女子と同居はキツかった……。。

先週末の休みには、弾の家に久しぶりに遊びに行ったしな。

ああ、ちなみに弾って言うのは俺の中学時代からの悪友で、五反田定食って言う定食屋が実家。

弾には蘭って言う妹がいるんだけど、まあ、そこらへんはまた紹介するよ。

……。って、誰に言ってんだろうな、八八。

「……てな具合に、平穩だったんだけどなあ」

「え、何？」

「ああ、いやいや、独り言」

急に声を出したからか、教室の俺の隣の席の子が振り向いて来た。その子に手を振って謝った俺の視界、そこには教壇の横に立つ2人の男女がいる。

・・・そう、「男」女だ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

にこやかな顔でそう言うのは、ブロンドの髪が眩しい白人美少年。礼儀正しい立ち居振る舞いと中性的な顔立ち、長い金髪を首の後ろで丁寧に束ねている。

本当に男かつて思うくらい小柄で華奢なのが気になるけど・・・「男」だ。

正直に言おう。俺は今、猛烈に感動している・・・！！

入学から1カ月と少し、ようやく・・・ようやく！

ようやく、男が俺1人だけと言う苦しい状況から脱却できるんだからな！

いろいろと困ることもあるだろうから、先輩として、そして友人として助けてあげよう。

俺は固く心にそう決めた、本人の許可はまだ得ていないけど。

他の女子はシャルルの儂げな美少年ぶりに黄色い声を上げてるけど、それすら今は気にならない。

「・・・挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

「ここでは織斑先生と呼べ。大体、私はもうお前の教官じゃない」

「了解しました」

そしてもう一人は、何と云うか特異だった。

教室に入ってからこっち、軍人然とした雰囲気です。千冬姉に接してるし・・・今のやりとりの間も、ビシツとした敬礼の姿勢。

教官・・・そう言えば千冬姉は昔、1年だけドイツで軍の教官をしていたと聞いたことがある。

それ関係だろうか、その場合、あの子はドイツの軍関係者と言うことになるわけだが。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

以上、簡潔な自己紹介だった・・・って、俺も似たような物だったような気が。

腰近くまで下ろした長い輝くような銀髪、赤い右眼に、左眼は黒い眼帯で隠れている。

シャルルよりも小柄だけど、全身から放つ冷たい威圧感が彼女・・・ラウラを大きく見せている。

と、俺がそんなことを考えていると・・・。

パンツ！

・・・今の音は、俺がラウラに顔をはたかれた音だ。
平手、しかも逆手打ち。
と、冷静に考えている場合じゃねえよ！

「いきなり何しやる!？」

「・・・貴様があの人の弟？ 私は認めない、貴様など」

意味がわからない。

ラウラはラウラで、その後はスタスタと教室の後ろに用意された自分の席に歩いて行きやがるし。

・・・何なんだ、コミュニケーション障害か何か？

「・・・以上でホームルームを終了する」

「え・・・あ、えと！ では今日は2組と合同でIS模擬戦をします。全員、ISスーツに着替えて第2アリーナに集合、急いでくださいー！」

そうこうしている内に千冬姉がホームルーム終了を宣言、山田先生が慌てて次の予定を告げる。

と言つか千冬姉、今のをスルーですか。

「織斑、デユノアの面倒を見てやれ・・・同じ男だろう」

「あ・・・ああ、はい！ わかりました！」

よし、気持ちを切り替えよう。

何はともあれ、男の知り合いができるのは嬉しい。

いろいろと・・・うん、いろいろと苦労するだろうから。

俺が、面倒を見てやらないと・・・！

Side シャルル・デュノア

シャルル、それが僕に与えられた新しい名前。

まあ、そのことについてとやかく言うつもりは、今さら無いのだけ
れど。

「よし、到着だ！ とにかく急げよシャルル、ここは俺達男には
優しく無い作りになってるんだからな・・・！」

「う、うん」

挨拶もそこそこに、一夏（そう呼んで良いつて）は僕を第2アリー
ナの更衣室にまで連れて来てくれた。

何でも、教室ではすぐに女子が着替え始めるからって・・・男は、
使うアリーナのロッカールームで着替えるように言われてるんだっ
て。

正直、最初はどうしていきなり手を引かれているのかわからなかつ
たけど・・・。

・・・そっか、男の子は別の場所で着替えないと不味いよね。それにしても、ここに来るまでにたくさんの女の子に追いかけられたけど、何でなんだろう・・・。

「そりゃ、男は俺達しかいないんだから、そうなるだろ?」

「え・・・あ、そっか、そうだよね! あはは・・・」

会話もそこそこに、一夏は来ていたシャツを一気に・・・って、わわっ、わ・・・っ!?

僕が慌てて一夏から目を背けると、一夏は不思議そうに(上半身裸で)僕の方を見て来た。

わ、わわわ・・・っ。

「どうしたシャルル? 早く着替えないと・・・うん、本当に早くしないと、織斑先生に凄いことをされるぞ?」

「逆に聞くけど、凄いことって?」

「・・・世の中、知らない方が良いこともあるさ。なあ?」

何故か、綺麗な笑顔でそう言われた。

その後、一夏は何か遠い目で何かを思い出して・・・あ、今の内にISスーツに着替えよう。

ISスーツはISを装着する際に基礎となる衣装で、肌にぴったりとくっつくスーツ。

まあ、スポーツウェアみたいな物かな・・・たくさんの企業がこの

製品を作っていて、僕のはデュノア社製のオリジナルのフルオーダー。

まあ、個々人が気に入ったスーツを着るのが一番とされているね。

「うおっ、シャルル着替えるの早いな・・・何かコツでもあるのか？」

「いや、別に何も・・・」

「そうか・・・これ、肌に密着する分着辛いんだよな・・・引つかって」

「・・・ひ、引つかかる・・・」

「おっ」

その後、一夏の着替えが終わるのを待つてアリーナへ。ここでも、僕は一夏に手を引かれて案内される。

・・・ど、どうして手を繋ぐのかな？ 別に良いけど。

「・・・そう言えばさあ、シャルルのファミリーネーム、どっかで聞いた覚えが」

「デュノア？ うん、フランスで一番大きいES関連企業だね。僕の実家、お父さんのね」

「へえ、じゃあ社長の息子なんだ？ どうりでこう・・・いいところの出！ って感じの気品がすると思ったよ」

・・・いいところ、ね。

「・・・一夏こそ、あの織斑千冬さんの弟さんなんでしょうっ？」
「ハハハ、こやつめ！」
「・・・へ？」

探るように視線を向けると、一夏は快活に笑いながらそんなことを言ってきた。

こや・・・え、何？

「い、いや、何でも無い。お互いに地雷を踏んだってことで・・・」
「・・・ふ、ふーん？ 良いけどさ、別に」

お、男の子って、良く分からないな。
それとも、僕が変なのかな・・・？
男の子とこうして触れ合うの、初めてだからわからない。

・・・まあ、ギャグセンスはどうかと思うけどね。
少しずつ、慣れていくしか無いかな・・・。
そして、僕達は第2アリーナに到着した。

S i d e 篠ノ之 楓

クラスの皆は学校指定の紺色のISスーツ、箒姉さんも同じ物。

でも私はすでに専用機持ちとして周知されてしまったので、自分のISスーツを着てる。
まあ、イメージとしては黒のレオタードにニーハイソックスでも思い浮かべてくれれば。

後は、翼を象った銀の様が入ってるくらいで……。
でもコレ、身体にぴったりと張り付くから身体のラインがはっきりとわかってしまう。

箒姉さんと私、お揃いで無いのはスーツだけでは無くて……。

「な、何だ……?」

「うっん、何でも無い」

心無し胸を庇うように腕を汲む箒姉さんに、私はプルプルと首を横に振って見せた。

……牛乳味の飴、買おう。

効果があったことは、1度だって無いけど。

「これより、格闘・射撃を含む実戦訓練を開始する」

第2アリーナの中央、1組と2組の合同訓練（60人弱）。

それと、第2世代型量産ISが何機か。

広いアリーナの真ん中で、千冬姉様の声が響く。

「今日は戦闘を実演してもらおうとしよう、ちょうど活力に溢れた10代女子がいるしな・・・凰！オルコット！いつまでも蹲って無いで前に出る！」

「うう・・・何かにつけて人の頭をポンポンと・・・」
「一夏のせい一夏のせい一夏の・・・」

なお、凰さんとオルコットさんは列の外で頭を押さえて蹲ってる。

一夏さんがシャルルさんを連れて来た後、教室でボーデヴィツヒさんに一夏さんが叩かれた件でお喋りしていたから、千冬姉様の出席簿が火を噴いたわけ。

・・・オルコットさんは親切で凰さんに教えてただけなのに、とばつちりかも。

「ほら、さつさとISを展開しろ、専用機持ちの方が早いんだ」

「な、なぜ私までもが・・・」

「・・・まあ、一夏に良い所見せるチャンスとでも思えば」

オルコットさんと凰さんがブツブツ言いながらも、それぞれのISを展開。

赤みがかった黒のISと、蒼穹の色のISが2人の身体を包み込む。どうやら、あの2人が模擬戦でもするようで・・・。

「ああああ　　っ、ど、どいてください　　っ!？」

「へ・・・え!？　　う、うおおおおっ!？」

・・・その時、空から山田先生が落ちて来た。
ネイビーカラーのISに身を包んだ山田先生は、へろへろした軌道
で一夏さんに衝突した。
・・・今の、一夏さんが『白式』びやくしきを展開するのが1秒遅かったら、
凄いことになってたかも。

「な・・・い、一夏っ!?!」

「大丈夫だよ姉さん、一夏さんだもん」

「それで全てが解決できると思うなよ!?!」

一夏さんを心配する篝姉さんと、のんびりする私。

ISの展開さえ間に合ってれば、よほどのことが無い限り操縦者は
死なない。
死なない。
死ねない。

衝突した際、絡み合うように地面に穴をあけた一夏さんと山田先生
はと言うと・・・。
煙が張れると、何と一夏さんが山田先生を押し倒して・・・子
供は見ちゃいけないような体勢に。
15歳だから、私も見ちゃいけない。
束お姉ちゃんとの、約束。

「いつつまで、先生に乗っかってんのよ!?!」

むしろ私としては、凰さんが2本の青竜刀を連結させた武器『双天

牙月』の方に興味が。

斬撃用の武器を投擲用の武器として用いるには、素材の強度を部品ごとに微妙に比率を変えて繋げる必要があつて技術的にとても難しいわけで……。

短い間隔で、砲撃のような音が2発。

山田先生が、一夏さんを押しつけるような形でアサルトライフルを構えているのが見える。

甲高い音を立てて、空薬莖が地面に跳ねる。

一夏さんに向けて投擲された『双天牙月』を、撃ち落とす。

五十一口径アサルトライフル「レッド・バレット」、米国クラウス社製。

「山田先生は日本の元代表候補生だ……何を驚くことがあるんだ？」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

悪戯を成功させたような顔で笑う千冬姉様と、恥ずかしそうにはにかむ山田先生。

……入試の時も、私、普通に負けた。

「黒叡」は非戦闘用だから、別に戦闘で負けても良いもん……。

「な、何を泣いてる？」

「泣いて無い……」

隣に立っている篝姉さんが、少しうるたえたような声を出す。
最近、近くに寄っても逃げない篝姉さん。
ちよつと、嬉しい。

「さて・・・では鳳、オルコット。今から山田先生と模擬戦だ・・・
何、心配するな、今のお前達ならすぐに負ける」

そんなわけで、授業開始。
千冬姉様の合図と同時に、3機のISが空を飛んだ。

S i d e 織斑 千冬

すぐに負ける 私の言葉にプライドを刺激されたのか、鳳とオルコットは血気盛んに山田先生に向かって行く。
しかしそこは腐っても代表候補生、無闇に飛び込むような真似はしない。

鳳が前衛、オルコットが後衛と役割を決めた上で行動する。

「・・・ああ、そうだな。デュノア、せっかくだから山田先生が使用している機体について皆に教えてやれ」

「あっ、はい」

私の言葉に、デュノアがハキハキとした声で答える。

「世界で2番目にISを動かした男」との名目でここに来たデュノアは、空中の戦闘を見ながら山田先生の使用している機体について説明する。

篠ノ之妹でも良いが、何せデュノア社の人間だからな。

「山田先生の使用されているISは、デュノア社製の第2世代型『ラファール・リヴァイヴ』です。第2世代型最後の機体で、現在12カ国で制式採用され、7カ国でライセンス生産が・・・」

デュノアの説明を耳にしながら、空中の戦闘をみやる。

山田先生が両手に持ったアサルトライフルで鳳とオルコットを牽制しつつ、アリーナを広く使った高速移動で2人の連携を断とうとする。

もちろん、鳳もオルコットも山田先生の意図を読んでいる。

オルコットはビットで山田先生の進路を塞ぎ、鳳が青竜刀で斬りかかる。

しかし、山田先生は鳳の接近を許さない。

両手のアサルトライフルを連射し、半月を描くように横滑りしながら鳳を誘導する。

そして、ある地点で急に攻撃対象をオルコットに変更、射撃。

「そんな射撃、当たるわけ・・・へ!？」

「げ」

オルコットが回避した先に、近接戦闘を諦めて衝撃砲の発射態勢に入っていた凰がいた。

2人が空中で衝突した瞬間、山田先生の攻撃が2人を……。

「……特筆すべきはその操縦の簡易性と多様性マルチロール・チェンジ役割切り替えを」

「ああ、とりあえずそこまで良い、もう終わる」

「……へ？」

私の弟が間抜けな声を上げた瞬間、山田先生が投げたグレネードが直撃した凰とオルコットの2人が、折り重なるようにして地表に落ちて来た。

2人ともシールドエネルギー残量は0、山田先生は無傷。
圧倒的だな。

「く、くうう……まさか、この私が……！」

「な、何で回避先が読まれんのよ……？」

山田先生と候補生では、キャリア経験が違うからな。

候補生は優秀かもしれないが、それはあくまで素質の上だからな。特に10代の場合、IS適正の高さで決まるが……20歳を過ぎれば、そもも言ってられない。

まあ、それでもそれなりに頑張った方だろう・・・流石は現役候補生。

学生の中では、見所がある方かな。
せいぜい励めよ、10代女子。

「さて、これで皆にも教員の實力の程がわかったろう・・・以後は敬意をもって山田先生に接するように」

最近山田先生のことを「山ピー」だの「マママヤ」だの呼ぶ奴もいたからな、これで意識を切り替えてくれると良いのだが。
それはそれとして、本格的な授業に入るとするか。

「専用機持ちは・・・6人か。では7人組になれば、グループリーダーは専用機持ちがすること」

「あ、あの・・・私も？」

「当たり前だ、篠ノ之妹」

「あ、当たり前・・・当たり前なら、仕方無いですね」

溜息を吐きながら、篠ノ之妹がすすごと列に戻る。

専用機と言っても、篠ノ之妹の機体は他のと少し勝手が違うが・・・

・・・まあ、良い。

用意してある『打鉄^{うちがね}』と『ラファール・リヴァイヴ』は合計6機、
班ごとに1機ずつだ。

午前中は、まあ、動かす所までで良いだろう。
午後には、整備をさせて・・・静かに進められると良いが、無理だ
ろうな。

Side 篠ノ之 篇

ま、まったく、一夏め・・・山田先生のその、か、身体ばかり気に
しおって・・・。

わ、私と部屋を同じくしていた時は、別段意識していなかったでは
無いか。

・・・まあ、意識されても困るのだが・・・。

「箒・・・おい、箒！」

「・・・な、何だ？」

「次、お前の番だぞ」

ISをすでに展開している一夏が、自分の後ろを親指で示す。

そこには、訓練機『打鉄』^{うちがね}が立ち上がった体勢のまま停止していた。
どうやら前に使用していた人間が立たせたまままで装着を解除したら
しく、操縦席に足が届かない状態のようだ。

「と言うわけで、織斑君にだっこして運んで貰ってくださいね」

とは、山田先生の談。

先程の模擬戦以降、いつもより5割増しで自信と言うか威厳が漂っている気がする。

・・・いや、いつもは威厳が無いと言っわけでは無く。

・・・っつて、抱っこ!?

そ、そそ、それはもしや、伝説の「お姫様抱っこ」と言う奴なのでは・・・?

「篝姉さん篝姉さん」

「な、何だ?」

別の班のグループリーダーであるはずの楓が、黒いISに身を包んで正直、少し微妙な心地になるが私に対して親指を立ててウインク。

声こそ出さないが、唇が「が・ん・ば・れ」と・・・っつて、何を頑張れと!?

「ほう、リーダーなのに余所見か。随分と余裕があるようだな、篠ノ之妹」

「い・・・!?!?」

そしてその楓は、ISを展開しているにも関わらず生身の織斑先生に引き摺られていった。

打鉄^{うちがね}』に乗り移る。

乗ったのは初めてでは無いし、むしろ一夏と模擬戦をしたこともある機体だ。

歩行するくらいは、問題無い……が。

「そ、そのだな、一夏……昼は何か予定があるのか……？」

「ん？ いや、特に無いけど」

「そ、そうか！ ならたまには、昼食と一緒に取るとしよう！ せ、せつかくだし屋上で……あ、購買で何か買ってきたりするんじゃないぞ！」

「お、おう……別に良いけど」

良し……良し！

今朝早起きして用意した秘策もある……部屋をかわってから会話する機会も減ってしまったし。

今日は、一夏とたくさん話を……。

Side 織斑 一夏

「……どう言うことだ」

「え、何が？」

昼休み、屋上。

そこには俺と箒……の他に、鈴とセシリアと、あとシャルルがいる。

それと、楓もいるぞ。

「私としたことが……！」

箒に誘われたって話をした途端、屋上の地面に手をついて何か悔しがつてるけど。

おーい、戻って来いよー。

IS学園の屋上には、綺麗な花壇と石造りの丸テーブルがあって、憩いの場として生徒に開放されている。

うん、誘ってくれた箒に感謝だな。

飯は大勢で食べた方が美味しいし、それにシャルルは転入したばかりで右も左もわからないだろ。

放っておくと女子に囲まれるし……シャルル本人は貴公子の微笑みと優しい言葉遣いで華麗に回避してたみたいだけど。

「そ、それは……そうかもしれないが……」

「だろ？　じゃ箒はそっちな、楓の隣」

「……う、うむ」

ちなみに席順は、俺の両隣りにシャルルと鈴、向かいに右からセシリア、箒、楓。

楓は箒が自分の隣だと聞くと、機嫌を直して戻って来た。

箒の隣が嬉しいらしい、当の箒はちょっと表情が固い気がする。でも、一緒に飯を食べば仲良くもなれるだろ・・・なあ、シャルル？

「え、あ・・・うん、誘ってくれてありがとう。でも本当に僕が同席して良かったの？」

「良いって良いって、男同士なんだし、仲良くしようぜ。わからないこととか困ったことがあったら、何でも聞いてくれよ・・・IS以外で」

「アンタはもう少し勉強しなさいよ」

「うるせ・・・って、酢豚！？ 鈴が作ったのか？」

「ふふん、アンタの分もあるわよ」

そう言っつて、隣にいるにも関わらず酢豚の入ったタッパーを投げて来る鈴。

投げるなよ、食べ物。

だが、ご飯無しの酢豚オンリーとは・・・。

「・・・ほら」

「お・・・え、俺の分？」

「他に何がある」

「いや・・・うん、サンキュな」

すると、箒も俺の分の弁当を作ってきてくれていたらしい。何だこの幼馴染ズ、素晴らし過ぎるだろ。

「ちなみに私は何も作ってきていません！ 何故なら箒姉さんの邪
ばっ！？」

元気を取り戻したらしい楓が何か言おうとしたらしいけど、箒に殴
られて静かになった。

・・・な、仲良く、な？

「早く食べないと、お昼休みが終わってしまいますわよ」

「おお、そうだな・・・じゃ、頂きます」

どこか澄ました態度のセシリアの声に、皆がそれぞれ食事を始める。
鈴の酢豚も美味そうだが、箒の弁当も凄く手の込んでそうな作りだ
った。

特にこの唐揚げなんて、しかも隠し味におろしニンニクと大根おろ
しと言うコンボ。

今度、俺も真似して千冬姉に作ってみよう・・・って、アレ？

「どうして箒の弁当には、唐揚げが無いんだ？」

それ以外は、同じ物が入っているのに・・・。

「いや、それは上手くできたのがそれしか・・・」

「へ？」

「い、いや、私は・・・そう、ダイエット中なのだ！ だから一品

減らしたのだ」

「ダイエット・・・？ いや、でも別に太って無いだろ、箒」

次の瞬間、俺は女子から猛攻撃を喰らうことになった。

「あー、男って何でダイエット〃太ってるの構図なのかしらね」

「そうですね、デリカシーがありませんわ」

「よ、良くないと思います、一夏さん」

鈴にセシリア・・・って、楓までもか！？

いやでも、実際ダイエットが必要なように見え・・・。

すると、箒が俺の目から身体を隠すように自分の身体を抱き締めた。

「・・・！ ど、どこを見ている、どこを！」

「何を堂々と女子の胸を見てんのよ、アンタは！」

「女性の身体を凝視するなんて・・・非紳士的ですわ！」

「よ、良くないと思いますよ、そう言うの」

まさに集中砲火状態、凄いな女子、何故に男に対しては無条件で共同戦線を組めるのだろうか。

ま、まあ、とにかく・・・早く食べないと昼休みが終わっちゃうぜ。何しろ、俺とシャルルはアリーナの更衣室までダッシュしなきゃいけないんだからな。

「ああ、午後の授業は格納庫でのIS整備ですもんね・・・楽しみ」
にへら、と楓が嬉しそうに笑う。
「そういや、そうだったな・・・まあ、いずれにせよいちいち着替えるのが面倒なんだよな。」

「何よアンタ、いちいち着替えてるわけ、ISスーツ？」
「女子の方々はほとんどが着たままですわよ、汗も吸収してくれま
すし・・・動きやすいので」
「え・・・そうなのか？」

まあ、女子のは男子よりも簡単な造りだもんな・・・露出が多くて
目のやり場に困るけど。
だって着たままズボンを履くとゴワゴワしそうだし・・・。
・・・ってことは、箒や鈴も楓も、着たままってことか？
箒・・・は不味そうなので、楓をじっと見つめてみる。

そうしたら、意外なことに箒が楓の前に手を出して俺の視界から隠
した。

おお、何か姉っぽい行動だ。

「だから、どこを見ているんだ一夏！」
「意味がどうあれ、非紳士的ですわ！」
「そつよそつよ、このスケベ！」
「・・・！」

いやいや、だから何故に見てただけで集中砲火！？
と言つか楓、顔を赤くして篝の背中に隠れるのはやめてくれ、精神的にキツイ。

・・・でも反論は無意味だと思う、だからシャルルの方を見ることにした。

「どうしたの、一夏？」

「いや・・・男同士って、良いなと思って」

いや、本気で。

この学園における頼もしい味方、それはシャルル・デュノア。それとさっき聞いた話だと、フランスの代表候補生で・・・。

「そういえばさ、一夏は放課後にISの訓練をしてるんだよね？」
「あ、ああ、クラスの女子にでも聞いたのか？俺は皆から遅れるから・・・地道に訓練時間を重ねて行かないといけないんだ」

放課後、俺は篝や鈴、セシリアや楓に付き合って貰って『白式』（びやくしき）の訓練をしてる。

千冬姉に課された訓練メニューは本当にキツイけど、まあ、俺が弱いんだから仕方ない。

「僕も加わっても良いかな？ 一応、専用機持ちだし・・・少しく

らは何か役に立てると思うんだ」

「マジで？ そりゃ助かる・・・いやあ、男同士って良いな、本当！」

うん、冗談抜きで仲間ができたのは嬉しい。

もしかしたら女子の反発でダメになった大浴場の使用許可も、下りるかもしれない。

「・・・男同士が良いって何よ・・・」

「灯台もと暗しに気付かぬ愚か者め・・・」

「ね、姉さん、頑張って・・・！」

鈴と篝と楓が何か言ってたけど、俺の視界にはもはやシャルルと言
う心強い味方しかいない。

男同士・・・良いな、本当に、うん。

Side 篠ノ之 楓

シャルルさんの転校から5日が過ぎて、土曜日のアリーナ（自由に
使用できる日）。

今日は皆で、一夏さんの訓練のお手伝い。

私の他には、一夏さん、シャルルさん、篝姉さんに鈴さんとセシリ
アさんがいる。

ちなみにあの昼食以来、女子グループは名前で呼び合うことになった。

これは、お友達が増えたと仮定しても・・・？
早速、オレンジ味の飴を配ろうと決意する私だった。

「ええと、一夏が鳳さんやオルコットさんに勝てないのは、射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応、理解しているつもりだったんだが・・・」
「うーん、知識として知ってるって感じかな。さっき僕と模擬戦した時も・・・」

その一夏さんは、シャルルさんによるIS戦闘の理論講習中。

一夏さんのIS『白式』は、射撃戦闘のプログラムがされていない格闘戦オンリーの機体。

その分、射撃の特性を把握していないと勝てない・・・らしい。

戦闘に関しては、私も細かいことはわからない。

私は模擬戦もあんまりしないし・・・興味無いし。

早く姉妹で宇宙に行きたいなあ・・・。

「いや、シャルルの説明はわかりやすいな・・・今までののは、こう、ひたすら感覚の話だったから」

「あんなに親切に教えてやったのに・・・」

「私のアドバイスの何が不満なのだ？」

「私の理路整然とした説明が何か……？」

「い、いや、うん、何でも無い」

鈴さん、篝姉さん、セシリアさんの非難が込められた視線に、一夏さんがたじろぐ。

いや、まあ……「くいつて感じ」とかじゃ伝わらないと思うよ、篝姉さん……。

ここ数日、一夏さんが同性であるシャルルさんへの精神的な比重をどんどん強めている気がする。

それは困る、一夏さんには篝姉さんと仲良しになって貰わないと……。

「話を戻すけど、一夏のISには後付武装イコライザが無いんだよね？ 拡張バース

領域ロットに空気が無い……それはたぶん、唯一仕様特殊才能の方に容量を振り向けてるからだよ」

「ワン……ああ、『零落白夜』か」

『零落白夜』……唯一仕様特殊能力。ワン・オフ・アヒリテイ

本来は第二移行セカンドシフトした後にISに目覚める、ISのコアが操縦者のために生み出す特殊技能。

一夏さんの場合は、『雪片』によるシールド無効化攻撃。

でも、むしろ目覚めるISの方が少ない……だから第3世代型の機体は、それが無くても特殊技能が使えるように設計されてる（例：セシリアさんの射撃ビット）。

後付武装イコライザと言うのは、ISに装備の情報を量子変換インストールして使う武装。
一夏さんの場合は『雪片』しか無いけど、本当は銃とかいろいろ・
・使えるはずなのだけど。
でも『白式』こやくしには拡張領域パススロット・・わかりやすく言うと、空き容量が
無いパソコンみたいな物で、もう何もインストールできない状態。
まさに、近接格闘オンリー。

「お姉さんと同じ特殊技能アビリティ・・それも一次移行ファーストシフトから使えるのは凄
いよ、前例が無い。まあ、それは今考えても仕方ないよね」

ちなみに、シャルルさんの機体は『ラファール・リヴァイヴ・カス
タム?』。

山田先生の『ラファール・リヴァイヴ』をカスタムした専用機で、
基本装備の一部を外して後付武装イコライザの拡張領域パススロットを倍にした優れ物、機
体色はオレンジ。

量子変換インストールした武装だけで20以上とは、本人の談。
まさに、歩く火薬庫。

「20・・・大した数ですわね」

「そうね、どんだけたくさん武装を積んでも、同時に使えるのは限
度がある。それでも積んでるってことは・・何か特殊なスキルを
持ってるってことかしらね」

鈴さんとセシリアさんが、候補生の顔で一夏さんに「射撃を知る所
から始めよう」とアサルトライフルの撃ち方を教えてるシャルルさ
んを見つめている。

・・・あ、私は私で、「黒叢」のディスプレイを開いてデータ収集中。

うーん、これだけ専用機が揃うと壮観だよね。

「ん・・・騒がしいな」

篝姉さんの声に振り向くと、アリーナの中央にもう1機、黒い専用機が。

アリーナの生徒の囁き声を聞く限りでは、ドイツの第3世代型IS『シュヴァルツェア・レーゲン』。

ドイツ本国でもトリアル段階、欧州連合の中でセシリアさんの『ブルー・ティアーズ』と次期主力IS選定で競合するタイプなのだから。

右肩の大型レールカノンが、「戦るか？」な雰囲気バリバリ醸し出してる。

「おい、貴様」

その操縦者にしてドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒさんがISのオープン・チャンネルで私達に　　と言うか、一夏さんに　　話かけてきた。

転校してからと言う物、お友達を作ろうともしない奇跡の少女は、とても冷たい目で一夏さんを見ている。

「貴様も専用機持ちだそうだな・・・ならば、私と戦え」

「……理由が無い」

「貴様には無くても……私には、ある」

最初は冷たかったその目が、徐々にいろいろな感情で染まって行く。何と言うか……怒ってる感じ？

「貴様さえいなければ……教官が大会2連覇という偉業を達成されただろうことは容易に想像できる。だから私は……貴様を認めない」

教官「たぶん、千冬姉様。」

大会2連覇「ISの世界大会「モンド・グロツソ」のことかな。千冬姉様は、2回目の大会の決勝戦で不戦敗と言うのが、現役最後の公式記録。」

そのことを言っていると、思われ……。

「また今度な、学年別個人トーナメントもあるだろ」

「逃げる気か……なら、戦わざるを得ないようにしてやるっ!」

宣言と同時に、「黒叢」が私に警告を告げる。^{アラート}

たぶん、他のISにも……何故なら、ボーデヴィツヒさんのISのレールカノンにエネルギーが充填されたことに対する警告だから。そして次の瞬間、現実にレールカノン発射……って、えええっ!?

ゴガギンッ！

金属がぶつかり合うような、鈍い音がアリーナに響く。

それはラウラさんのカノンを、シャルルさんが盾で弾いた音だった。

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は沸点が低いんだね。ビールだけじゃなく頭もホツツてことなのかな？」

「……貴様、フランスの第2世代型アンティークごときで私の邪魔をするか？」「量産化の目途が立たないドイツの第3世代型ルキよりは、動けるだろうからね」

おお……何だかよくわからないけど、独仏開戦？

あえて言わせてもらうと、専用機にも量産期にもそれぞれ良い所が私としては、シャルルさんの装備展開の速さとポーデヴィツヒさんの火力の強さに興味が……。

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

「……ふん、運が良いな。今日は退こう」

アリーナの先生の声を鬱陶しそうに聞き流しながら、ポーデヴィツヒさんがISを解除して背を向ける。

……つて、ええ……やり逃げ？

まあ、ドイツ製の武装のデータ取れたから良いけど。

あそこの機体、無意味に万能機だから……。

「一夏、大丈夫？」

「ああ、サンキュ、シャルル……」

一夏さんは、シャルルさんにお礼を言いながらも……ボーデヴィツヒさんの背中をじっと見つめてた。

……まさか、今ので興味が湧いたとか？

Side シャルル・デュノア

事情は良く知らないけど、驚いたよ。

実際、アリーナはたくさん生徒がいたのにレールカノン撃つとか。

隣国の候補生に対するイメージ、かなり悪くなったかも。

……それにしても、一夏はあの子と何かあったのかな？
必要になれば自分から言うだろうし、根掘り葉掘り聞くのも失礼だから、聞かないけど。

「本当にありがとな、シャルル。助けてくれて」

「え……ううん、何かあったら何でも言ってるね」

「おう、シャルルも何かあったら見えよ」

そう言つて笑う一夏、場所はアリーナの更衣室。

一夏は当然のように僕に遠慮無く着替え始めてるけど、僕はまだI
Sスーツのまま。

うーん、これさえ無ければもう少し……。

男同士つてことで、一夏とは寮の同じ部屋で過ごしてる。

僕は気を付けているんだけど、一夏はシャワールームから平気で上半身裸で出てきたりする。

男同士だからって、いやでも、もっとちゃんとしてほしい。

「シャルル？ 着替えないのか？」

「え？ ああ、えーと……あはは、ちょっと用事があるから、先
に行つてて良いよ？」

と言つわけで、更衣室での着替えはいつも一夏が先に終わる。

僕は1人になってから着替えるんだけど……って、アレ？

何か、一夏が物凄くじとつとした目で僕を見てる。

「何と言つか……距離を感じるんだが」

「ええ？ いや、そ、そんなことは……」

「なあシャルル……どうしていつも一緒に着替えないんだ？ い

や、この聞き方だと誤解を生むかもしれないが、流石に5日も続く
と気になるんだが」

「え、ええと・・・その、は、恥ずかしい・・・から？」

う、うう・・・どうしてこう言う時だけ、勘が良いのかな？

その後、一夏は異様な熱意で僕を説得にかかった。

何でも日本では「裸の付き合い」という言葉があつて、一緒にお風呂に入ったりして親睦を深める文化があるとか・・・でも。

「僕達、大浴場使えないよ」

「そ、そうだったな・・・男子の前後に風呂とかあり得ない！って不特定多数の女子が主張して使えないんだよな・・・風呂、好きなんだけど」

「はいはい・・・じゃ、この話はおしまいね」

とりあえずISスーツの上から制服を着て、僕の着替えも終了。後でシャワー浴びる時にも脱ごう、今までもそうしてきたし。

「あ、織斑君、デユノア君、ちょうど良い所に」

ロッカールームから外に出た時、廊下で山田先生に会った。

山田先生は、大浴場の男子使用の許可が出たってことを教えにわざわざ・・・ええ！？

「本当ですか！ 嬉しいです！ 助かります！ ありがとうございます！
まず、山田先生！」

「い、いえ、先生ですから・・・」

山田先生の手を取って大喜びの一夏、そんな一夏を見て照れくさそうに笑う山田先生。

一方で僕は、ちよつと困ってた。

ええ・・・どうしよう・・・と言うか、いつまで手を握ってるの？

「あ、それとですね、織斑君。『白式』びやくしきの正式な登録に関する書類があるのです、一緒に来てほしいのですけども・・・少し、時間がかかるかもしれません、良いですか？」

「あ、はい、わかりました。じゃあシャルル、先に部屋に行ってくださいよ」

「あ、うん」

ぱたぱたと手を振って、一夏と山田先生を見送る。

うん・・・どうしよう。

まあ、時間がかかるらしい・・・部屋に帰って、シャワーでも浴びて気分を変えよう。

うん、それが良いよね。

Side 織斑 一夏

書類は名前を書くだけだったんで、すぐに終わった。

事務的な物だから、特に何かが今までと変わるわけじゃない。でも一応、これで俺は正式に『白式』^{じやくしき}のマスターになったってわけだ。

「あー・・・今日はエライ目にあつたな」

アリーナではラウラに絡まれるし・・・ドイツ、大会、千冬姉。

そのキーワードは、俺にとっては良い思い出が無い。

千冬姉が第1回の「モンド・グロツ」優勝者であることは有名だけど・・・実は第2回大会でも、勝つのは千冬姉だと思われてたんだ。

でも、千冬姉は決勝戦で棄権した。

理由は、俺が「謎の組織」に誘拐されたからだ。

謎の組織って何だよ・・・って感じだが、実際に正体も目的も謎なんだから仕方が無い。

千冬姉は大会2連覇の名誉を蹴って、ISでまさに「飛んで来て」助けてくれたんだ、俺を。

暗闇に閉じ込められた俺、光を纏って現れた千冬姉^{めがみ}・・・俺はあの光景を、たぶん一生忘れない。

・・・で、その時に千冬姉はドイツ軍に借りができたらしく、1年間ドイツでIS部隊の教官をやった。

たぶん、ラウラはその時に千冬姉と・・・。

それから10分後、俺とシャルルはそれぞれの自分のベッドの上に座って向かい合っていた。

シャルルはジャージを着ているんだが、どう言うわけか今は「胸」がある。

今までは男のフリをするために特製コルセットで締めていたんだとか・・・発育に悪いだろそれ。

いや、それはともかく。

シャルル（女）は、男のフリをして入学してきた。

理由は、デュノア社の社長（父親）の命令だったから。

ただシャルルは愛人の子で、しかもIS適性がたまたま高かったから拾われたんだそうだ。

何だよそれって思うが、シャルル自身は何か諦観していて、もう気にしていないらしい。

「・・・で、今、デュノア社は経営危機、なんだよな？ ISシエア第3位なのに」

「うん、第3世代型が開発できないから・・・欧州連合の事業からも除名されたし、下手すると今期でフランス政府からの助成金も無くなるから。ISを開発できるだけの資本力も無いし、後は潰れるのを待つばかり・・・って感じなんだ」

で、そこで起死回生とばかりに「ISを動かせる唯一の男」である

俺に近付いた。

男のフリは、そのためだったらしい……いや、無理だろどう考え
ても。

何でも、『白式』^{ちやくしき}のデータを盗んでくるように言われたらしいが・
。

「その場合は、身体を使えって言われたよ」

「……何だよ、それ」

身体……この場合、それがどう言う意味なのかはガキの俺でもわ
かる。

俺も男だから、わかりたく無いがわかる。

それが、父親の言うことじゃ無いってことも。

正直に言っつて、俺は今、かなり頭にキてる。

そしてそれは、シャルルの親に対する怒りであると同時に……俺
と千冬姉の親に対する物も混じってる。

俺達の両親は、俺達を捨ててどこかに消えた……それで千冬姉が
どれだけ苦労したか、俺は知ってる。

それでシャルルだ、正直、親と言う存在のイメージが最悪になりつ
つある。

「それで……シャルルはこれからどうする？」

「どうするもこうするも、バレちゃったし……フランス政府がデ
ユノア社を詰問して、僕も良くて牢屋とかじゃない？」

「……良いのかよ、それで」

「良いも悪いも・・・世の中、自分の意思でどうにかなることの方が少ないよ」

それは、15歳の女の子が言う台詞じゃ無かった。

その表情は、15歳の女の子がする顔じゃ無かった。

・・・そしてそんな友達を助けられない、無力な自分が嫌だった。

「・・・だったら、ここにいろよ。特記事項21だ、この学園にいれば、国や企業に帰属しないしで済むし、そう言う勧誘は本人の意思で断れるんだろ？」

「・・・良く覚えたね、55もある特記事項」

「勤勉なんだよ、俺は・・・」

3年間、どんなに頑張っても3年間。

そして俺の言ってることだって、たぶん、かなりおめでたいことなんだろうと思う。

だけど・・・でも、良いのか、こんなことが許されてさ。

そんなの・・・違うだろ、何かが。

「・・・考えてみるよ、僕も。ありがとう、一夏」

だけど・・・そう言って微笑むシャルルは、とても綺麗だった。

俺は急に照れくさくて、そっぽを向く。

ま、まあ、アレだな・・・当面は男のフリを続けなとな、うん。

その後、箒と鈴が晩飯を食いに引っこくと誘いに来て……女の子状態なシャルルを隠すのに苦労したけど。
とにかく……本当に、今日はいろいろあった。

Side ラウラ・ボーデヴィツヒ

私にあてがわれた寮の部屋で、私は一人でベッドに寝ている。同室者がいないのは良かった、いても邪魔だからな。
明かりはつけない、つけなくても全てが私の目には見える。

もし、この部屋に誰かがいたのなら。

闇の中でかすかに輝く私の瞳に気が付いたかもしれない。
この私の、呪われた右眼に。

「……教官」

意識が覚醒した時 つまり、「生まれた」時 私は、すでに闇の中にいた。

闇以外は知らなかったし、それ以外の何かを知る必要も無かった。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

それが自分の名前だと認識してはいるが、それに何か意味があるとは思えない。

意味があるとすれば、それは教官に……あの人に呼ばれる時だけだ。

あの方が私の名前を呼んでくれる時だけが……私に意味を与えてくれる。

「あの人の存在と、強さとが……私の目標、存在理由……」

初めて、自分を誰かに重ね合わせたいと思った。

この人のように、なりたいたと。

歓喜と熱、それが私の全て。

それなのに、その完璧で完全な教官に……汚点を残させた奴がいる。

織斑一夏、教官の弟。

奴さえいなければ……教官は、世界大会2連覇と言う輝かしい功績を打ち立てていたはずなのに。

奴さえ、いなければ。

教官の人生に、汚点など残らなかったらどうに……。

「……排除する、力尽くでも」

そのために、私はここに来たのだから。

このようなISをファクションか何かと勘違いしているような連中の溜まり場に、どうして教官がいるのかはわからない。

それはもしかしたら、あの織斑一夏が存在があるのかもしれない。

ならば、余計に排除しなければならぬ。

アレは、教官の邪魔にしかならないはずだから。

「・・・眠ろう」

目を閉じて、闇の中に意識を鎮める。

夢など見たことは無いが、きちんと休息を取らなければ身体は十全に動かせない。

これも・・・教官が教えてくれたことだから。

「・・・」

イギリス製第3世代型『ブルー・ティアーズ』。

中国製第3世代型『シエンロン甲龍』。

フランス製第2世代『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。

・・・データで見た時の方が、まだ強そうではあったな。

あの篠ノ乃博士の妹の乗っていた機体は、一つはたかが量産機。もう一つは、学園のデータベースによれば『コクスイ黒叢』。

それと織斑一夏の『白式』……。

「……ふん……」

……どれも、これも、有象無象。

私と『シュヴァルツエア・レーゲン』の、敵では無い。
調査任務など、簡単に終わらせて……そして……。

第6話：「金と銀」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうも楓です、専用機が増えてホクホクです。

データ盗・・・げふんげふん、参考にしましょうそうしましょう。いやー、欧州の時期防衛計画の主力機候補をこんなに見れるなら、学園に帰って来た甲斐があるよね。

・・・おお、ではここでこの物語における「欧州時期防衛計画」をちよろつと解説、本編に登場するかは激しく微妙な設定ですけど。ま、新聞記事みたいなレベルで聞き流すと良いよ・・・おっと、良いですよ。

欧州連合のIS（オリジナル設定込み）：

欧州連合は英仏独伊西など数力国がISコアを所有、「マイルシュトローム（第2世代・イギリス）」、「テンペスタ（第2世代・イタリア）」、「ラファール・リヴァイヴ（第2世代・フランス）」などなど、多彩なラインナップが特徴です。なお、英仏独伊西など9カ国で共同開発した「ユーロ・トランシェ5」と言う第2世代型のISもあります、面白いですよ。

で、第3次イグニッション・プラン・・・まあ、つまり上に並べたISの発展形で、どの機体を欧州連合の合同即応部隊の主力機として採用するかと言う話ですね。

英国、ドイツ、イタリアの次世代型が有力視されていますが、さてどうなりますかねー。

篠ノ之 束：

かーえーでーちゃん・・・何コレ、プラモ？

篠ノ之 楓：

束お姉ちゃんだけはそれを言っちゃあダメだよ……!?!?

第7話：「黒い雨」（前書き）

今年最後の更新ですね。

皆様、良いお年を。

では、どうぞ。

第7話：「黒い雨」

第7話：「黒い雨」

Side 篠ノ之 東

・・・つまんなーい。

ゴロゴロゴロゴロ、東さんはあんまりにもつまらなくてゴロゴロするんだよ。

何と言うか、刺激が足りないんだよ。

「楓ちゃんは普通に学校に馴染んじゃってるし、篝ちゃんは電話してこないしなー」

楓ちゃんが専用機持ってるってわかったら、ぜったい電話してくると思ったのに。

うーむ、パンチ足りなかったのかなあ？

やっぱり一号じゃダメかなあ、普通に負けたしねえ。

もうちょい粘らせれば良かったかな。無人機じゃ限界あるけど。

ISは、人が動かさないと完璧には動かない。

大体そうでないと、ちーちゃん達と遊べなかったしさあ。

あー・・・暇、つまんない。

全くもって・・・つまらない。

まあ、別に良いけどなー、いつものことだし。

「簡単過ぎて困るよね、生きるって」

ちやららんっ、と呼び出すのは空中投影ディスプレイ。

片手で箸ちゃんとダイレクトで繋がる携帯電話をポンポンしながら開くのは、楓ちゃんからのラブメール。

「あのね」から始まって「お姉ちゃん大好き」で終わるメール、まさにラブ。

楓ちゃんは昔から可愛いかったもんねえ・・・とと、これがこの間送って来たドイツの機体かあ。

・・・ボロいね、これ。

東さん的には時代遅れだよ、他の国のもだけど。

・・・うん？ うんん・・・？

ほほお・・・うわっ、ダサッ、今時こんな不細工な代物仕込んでるんだ？

「ふーん・・・・・・おおっ！」

来たよ来たよコレ、ピコンツと思いついちゃったよ流石私。

だよねだよね、いつまでもものんびりしてちゃダメだよね。

つままないなら、お姉ちゃんが面白くしてあげれば良いんじゃない？

だって見たいもんねえ・・・もう一度。
体感したいもんね、もう一度。

あの「瞬間」を。

10年前の、楽しさを。

「・・・かーえーでちゃん、あつそびーましょっ」

ふんふん、そうと決まれば善は急げだよね。

「・・・ほーおーきちちゃん、あつそびーましょっ」

大丈夫大丈夫、篝ちゃんと楓ちゃんは何も心配しなくても良いからね。

お姉ちゃんが、全部やっとしてあげるから。
いっくんと一緒に、強くなれるから。

強くして、あげるから。

そしていつか、お姉ちゃんを楽しませてね。

「あるとき「みたい」」。

・・・あは。

「うふふふ……」

まあ、じゃあ……まずは楓ちゃんからかなあ。

いつまでも、呑気に遊んでちゃダメだよ……っと。

うふふ……ちーちゃんがどんな顔するか、楽しみだよ。

Side 篠ノ之 楓

IS学園、第2整備室。

学年別個人トーナメントが近いからか、やたら賑やか。

金属を削る音や電子音、機体整備に関する議論がBGMみたいに響く。

「うーん、この賑やかさは東お姉ちゃんの所には無かったよね」

「……何か……言った……?」

「あ、ううん。何でも無い、ごめんね」

構わない、と言って目の前のディスプレイに視線を戻すのは、更識さらしき簪かんざし。

私は「簪ちゃん」って呼んでる、整備科志望の女の子。

簪ちゃんが乗っているのは『打鉄式式』、まだ未完成の彼女の専用機。

元は倉持技研って企業が製作してたらしいんだけど、一夏さんの『白式』に人材を集中させたいからって放棄されたんだって、酷いよねー。

「・・・あれ？ 『白式』って結局お姉ちゃんが完成させたんじゃない無かったっけ？」

データ取りと新武装開発に人材全部回すって、企業としてそれってどうなんだろうね。

そんなわけで、私は簪ちゃんの専用機開発（独力）を手伝ってる。何でって・・・お友達だから？

「ごめん、遅れたよー」

その時、私が簪ちゃんとお友達になれた主要因、本音さんがドタドタと到着。

生徒会の会議（本人は「寝てる」らしいけど）で遅れたんだって。いつものようにのんびりとした口調と足の速さでやってくる本音さん、簪ちゃんは何となく嫌そうな顔。

「姉さんに言われてなら・・・いらなから・・・」

「えへへー、違うよー、私はかんちゃんの専属メイドさんだから、手伝うのは当たり前です」

「・・・その割に、あんまり・・・」

「ええっ、酷いよー」

とか何とか言いつつ、『打鉄式』の装甲チェックを始める本音さ

ん。

ちなみに簪ちゃんの「姉さん」は、何とこの学園の生徒会長さんだとか。

まだ会ったことは無いけど、本音さん曰く「凄い人」らしい。

・・・何が「凄い」んだろう？

と言うか、何で本音さんが簪ちゃんの「専属メイド」なんだろう。2人とも教えてくれないんだよね、幼馴染ってことしか。

・・・ま、いつか。

ISの完成度には、関係無いもんね。

「・・・各駆動部の反応が悪い、どうして・・・？」

「えー？ あゝ、タイプ向いて無いのかも。ほら、コアから火器へのエネルギー供給にバラつきが・・・やっぱり全距離対応機にするのは難しいんじゃない？」

「でも・・・うーん・・・」

顔を合わせず、ディスプレイ上のデータのやり取りで会話する。

束お姉ちゃんの所にいた頃は、良くやってたんだけどね。

そもそも・・・操縦の安定性以外は第1世代と変わらない『打鉄』。その後継機を全距離対応型のISに組み上げるって言うのは、『黒叢』に戦闘用の武装を積むくらい難しい話で・・・火器管制システムも組めて無い今の段階だと、かなり厳しいよね。

武装とか装甲、つまりハードの部分だってまだ4分の1くらい未完成だし。

独力でISを実用化すること自体が厳しいんだけど・・・簪ちゃんはその譲らない。

最初は、手伝わなくて良い的な空気だったんだけども。

でも私のお姉ちゃんが「篠ノ之 束」だって気付いてからは、何でか手伝わせてくれる。

うーん、何でかはわからない。

とにかく、ハードもソフトも一から組み直さないと・・・。

「・・・でも・・・マルチ・ロックオン・システムは外せないし・・・」

「そこは外せないよね！ うん、頑張ろう！」

「・・・う、うん・・・」

だってマルチ・ロックオン・システムだよ、マルチでロックオンができるシステムだよ？

技術的に第3世代型だと思うけど、でも多重同時標的指定とか凄くロマンだよな。

この機体だとミサイルにしか使わないけど、将来、別の分野に転用できるかもしれない。

そもそも束お姉ちゃんの作ったISは、それが目的なんだから。

その後は、ホームルーム直前までお互いの空中投影型ディスプレイをやり取りしながら相談したり。

同時にコア周りの動力部の回線を繋ぎ直したり、推進ユニット・システムの最適化方法をどうするか考えたり・・・朝は朝で6時からやるから、おかげで毎朝毎朝遅刻寸前だけど、楽しい。

「あ、そうそう、かんちゃんと楓ちゃんは知ってる？」

「……何……？」

「えっとねー、おりむーの噂なんだけど」

「一夏さんの？」

ホームルームの時間が近くなってきた7時、機材の片付けをしながら取りとめのない会話をする。

簪ちゃんは一夏さんに特に興味は無いみたいだけど……ぷいつと顔を背けて機体の調整に戻っちゃった。

あ……と、『おしくや白式』のことを気にしてるのかなあ？

それはそれとして、一夏さんの噂には興味あるよ。

私じゃなくて、ほら、篝姉さんのために。

でも、噂って……？

「えっとねー、今度の学年別トーナメントでねー、優勝したらね？」

「うん」

「おりむーのね、恋人さんになれるんだってー」

「へー、そうなん……ええええええ！？」

学年別トーナメントって、アレだよな。

エントリーしたら誰でも出れる奴で、学年最強を決めるやつ？

私はどうせ出ないし……って、それは今はどうでも良いよね！

え、ちょ・・・何それ、本当？

でも本音さんが言うには、当の本人以外は皆が知ってる噂らしくて・・・。

・・・ね、姉さん！ 篝姉さ んっ！！

Side 鳳 鈴音

「と言うわけでさあ、最近、一夏ってば付き合い悪いのよね。どう言ってもりかしらアイツ」

「と言うよりも、それを私に言ってどうなさりたいんですの・・・？」

うっさいわね、アンタくらいしか愚痴を言える相手がないのよ。場所は放課後の第3アリーナ、今日は月末の学年別トーナメントに出る人間にだけ開放されてる。

ちなみに私の隣にいるのはセシリア、こここの所、そこそこ仲が良いかも。

篝ともそれなりに仲良いと思うけど、あの子は一夏を巡るライバルだから、ライバル。

強敵と書く方ね、もちろん。

ま、ISバトルは私の方が強いけど・・・でもそれって、恋愛的には役に立たないのよね。

むしろ女の子的に「彼氏より強い」って、ある意味でどうなのかし

ら・・・？

いくら世の中が女尊男卑って言っても、そう言つのはまた別だしね。

「食事にでもお誘いすれば良いのではなくて？ 殿方の誘い方は良く知りませんが」

「そんなことはもうやったわよ。でもこの間夕飯に誘ったらさあ、『悪い、これからランニングなんだ』とか言つてさあ、お前はどこの野球部だ！？ って感じで」

「まあ・・・レディの誘いを断るなんて、非紳士的ですわね」「でしよー？」

ISを展開する前に念入りにストレッチしながら、セシリアとお喋り。

今度のトーナメントはセシリアも含めて専用機持ちが6人もいるから・・・ま、念のためにね。

それに優勝したら・・・い、一夏と付き合えるらしいし？

いや、別に噂を鵠呑みにするわけじゃないのよ？

でもほら、私と一夏がくみたいな噂が、出ちゃうわけじゃない・・・って、勝つたらの話だけど。

だから、負けられないってわけ。

で、せっかくだしセシリアに訓練に付き合つて貰つてるってわけ。セシリアは一夏にちょっかいあんまり出さないから、その分気楽だし。

あー・・・でも一夏の方が・・・って、それは無いか。アイツ、超朴念仁だし。

「じゃ、とりあえず軽く模擬戦から・・・」

しよつか、と言おうとしたその時。

『シエンロン甲龍』から緊急警告が飛んで、私はその場から大きく後ろに跳ぶ。セシリアも自分のISから同じ警告を受けたのか、私とは反対側に跳んでる。

そしてほぼ同時に、お互いのISを緊急装着。

原因は、いきなり私達の間撃ち込まれた超音速の砲弾。

それは私達から外れるとアリーナの地面に着弾、けして小さく無い爆発を起こした。

・・・挨拶にしては、随分とアグレッシヴよね。

『シエンロン甲龍』のセンサーには、撃ち込んだ犯人の名前が出る。
機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者・・・。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・」

私とセシリアの声がハモる。

そこには、漆黒のISに身を包んだ銀髪の女の子・・・。
ドイツの、代表候補生。

「・・・何？ いきなりぶっ放すとか、良い度胸してんじゃん」

『龍砲』を準戦闘態勢に移行、一発は一発よね？
そしたら何？ あのラウラって子、私達を見て鼻で笑ったのよ？
殴って、良いわよね？

「中国の『甲龍』^{シエンロン}にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か・・・デ
ータで見た方がまだ強そうではあったな」

「え、何？ 私はマゾだから殴ってくださいって？ OK OK、わ
ざわざドイツのジャガイモ農場から出て来てご苦労なことね」

「うふふ、鈴さん、きつとこちらの方は言語をご存知で無いのです
わ・・・犬ならワンと鳴くはずですよ」

「2人がかりで量産機に負けるような人間が代表候補とは・・・数
が多いだけの国と古いだけの国の人材など、その程度か」

・・・何、コイツ。

言葉以上に、その上から視線が死ぬほどムカつく。
けど同時に、意図が読めない。

私達2人を挑発して、どうしたいわけ？

私達個人と祖国を侮辱して、コイツにどんな得があるのか・・・目
的が読めない。

セシリアも同じことを考えているのか・・・目を細めてラウラのこ
とを観察してる。

ドイツの、代表候補生・・・か。

「・・・まあ、何とかと言う種馬をどこの雌猫と取り合っている
メスに専用機を与えるなど、それはそれで国の程度が知れると言う
物だな」

「あ？ 今なんつった？ 私の耳には「どうぞ殴ってください」っ
て言ってるように聞こえたけど？」

「この場にはいない人間をも侮辱・・・品位が知れますわね。同じ欧
州連合の候補生として、恥ずかしいですわ」

私とセシリアが、ISの安全装置セーフティを解除する。

と言うよりラウラは最初からそんな物、かけて無いみたい。
つまりハナっから、私達と戦やり合うつもりでここに来てる。

一夏のことまで侮辱したのは、本気で許せない。
でもそれ以上に・・・それ以上の目的が、読めない。
頭の片隅が、急速に冷えて行くのを感じる。

「かかって、来い」

「上等（ですわ）！！」「」

セシリアと2人、ラウラと対峙する。

なるべく、手の内は晒さない方が良くも・・・そう思いながら。

S i d e セシリア・オルコット

ドイツの第3世代型『シュヴァルツェア・レーゲン』。
ドイツが、欧州連合の第3期イグニッション・プランの次期主力機
として提案しているISですわ。

厳密には、レーゲン型と呼称される機体の^{モデル}1機。

「・・・僥倖ですわ」

こんな所で、その機体との交戦経験を得られるなんて。

ここIS学園は国際協定に縛られずに機体・装備の実戦経験が詰める唯一の場所であり、そして同時に「他国のIS」の情報を収拾できる唯一の場所でもありますの。

日本に来てからと言う物、これほど他国の専用機を目にする機会に恵まれようとは。

ある意味において、ここに送られる代表候補生の任務の一つは「他国のISと交戦すること」なのですわ。

そうすることで「敵」軍の機体のデータを得れて、しかも「自」軍のISコアを成長させられる。

でもそれは・・・向こうも同じことですけど。

先程の挑発も、つまりはそう言うことの一環・・・と言うことでしょうか？

「ティアーズ！」

先行する鈴さんの機体の四方を囲むように、ビットを走らせる。
中国の・・・他国の機体との連携戦闘の経験値も、とても重要な
もの。

それに、個人的に敗北は趣味で無くてよ。

「でえええええいつ!」
「ふん・・・!」

鈴さんが中国の実体剣せいりゅうけんを振り下ろすと、ラウラ・ボーデビツヒ・・・
ラウラさんは、赤く輝く手刀を両手に展開、鈴さんのそれを受け止
めましたわ。

あれは・・・ビーム状の刃、BT兵器!
ドイツのレーゲン型モテルも、BT兵器のサンプリングのためにここに送
られてきたと言うことでしょうか?

「鈴さん!」
「・・・ちえあつ!」

ごがぎんつ、と金属が打ち合う音が響いて、鈴さんが無理矢理に刃
の面をズラして弾く。
同時に蹴りを放つと、ラウラさんが衝撃に耐えきれずに数メートル
下がる。

流星はパワー型タイプ、近接での力比べなら負けはしませんわね。
鈴さんに離されたラウラさんに対して、ビットで四方から射撃。

「・・・イギリスのBT兵器か、だが」

しかしそれを、ラウラさんは機体を軽く翻すだけで悉くかわす。連続で四方から射撃されるビームの弾丸を、いともたやすく。

幾度も機体を翻し、前に後ろにと機体を運動させて、ビームの雨の中を掻い潜る。

それは大規模な動きでは無く、最小限の動き。

こちらのビツトの特性を・・・！

「本体との併用は不可能、そしてスカート部の隠しミサイル・・・種が割れてしまえば、いかにBT兵器と言えど大したことは無い」

「・・・つ、流石は」

流石は、イタリアのテンペスタを除けば欧州で我が国のティアーズモデル型と競合できる唯一の機体と言った所でしょうか・・・。

ラウラさんは、空中で衝撃砲の構えを見せている鈴さんに視線を移します。

その目は、まるで何かを観察しているような・・・。

「・・・中国の第3世代。衝撃砲の理屈さえわかってしまえば防ぐのは容易い。そして近接攻撃は・・・私には、通じない」

「見た目の割に、良く喋るわねアンタ」

私と鈴さんに挟まれていながらも、ラウラさんは自信を崩しません。

その瞳に不敵な色を浮かべながら・・・そして実際、向こうの装備はほとんどわかりません。
私のISのセンサーの数値の変化は、先刻からずっと私に注意を喚起していますわ。
・・・プライドに賭けて、引き下がることはできません。

でも私は、ISコアのモードを戦闘から保護へと移行します。
おそらく、鈴さんも同じ措置を自分の機体に施しているはずですわ。
私のプライドと機体、どちらが大切かと言えば・・・言うまでもありませんわ。
さて、では・・・行きましようか。

S i d e 篠ノ之 篇

学年別トーナメントで優勝すると、一夏と恋人になる権利が与えられる。

その噂を楓から聞いた時、私がどれほど動揺したかわかるか？
表情には出していないから、楓には悟られなかったろうが・・・。

「な、なななな、何故そんなことに!？」

「わ、わかんない、わかんないけど・・・何か、もう全校の女子に
広まってるって」

「ぬ、ぬぬぬ・・・!」

放課後、第3アリーナへ続く道を足早に歩きながら、楓とそんな会話を
する。
未だに接し方に悩む昨今だが、今はそんなことを気にしているべき
では無い。
何故なら……。

それは元々、私が言い出したことだからだ！

い、いや、一夏の部屋から引越すときに、私が一夏に言ったのは
正確には少し違う。

あくまで「私が」学年別トーナメントで勝ったら、と言うことであ
って。

実の所、昔に同じような約束を……いや、昔の話は良い。

と、とにかく、一夏が言いふらしたはずも無い……から、どこか
から漏れたのだろう。

「ど、どうしよう、篝姉さん」

「ど、どうするもこうするも……」

ちなみにどう言うわけか、楓は私と一夏のことをその……献身的
に、応援してくれている。

どうにか私と一夏が2人きりになれない物かと考えてくれているよ
うで……まあ、今の所は功を奏したことが無いが。

……ま、まあ、嬉しい……かな。

「・・・あ、一夏さん・・・と、シャルルさん」
「・・・む」

すると、前方にのんびりと歩いている2人の男子生徒を見つけた。
もちろん、一夏とシャルルだ。

2人はとても仲が良さそうで・・・ただ、何か引つかかる気がする。

ある時期から急速に距離が縮まったと言うか、何と言うか・・・。
シャルルの一夏を見る視線に、何かこう、妙な胸騒ぎを覚えるのは
何故だ・・・？

い、いや、うん、気のせい・・・だな、うん。
考え過ぎだろう、流石に。

「・・・一夏、今日は何の訓練する？」

「そうだなあ、やっぱり射撃かな・・・今日使えるアリーナは」

「第3アリーナだ」

「うわぁっ!?!」

足早に近付いて、一夏の言葉に返答するように会話に割り込む。
・・・って、どうしてそんなに驚く・・・？

「い、いや、いきなりだったから・・・なあ？」

「う、うん、急だったから・・・ごめんね？」

「い、いや、別に責めているわけでは・・・」

シャルルのように低姿勢で来られると、どうも氣勢を削がれてしま
う。

こほん、小さく咳払いをして空気を入れ替える。

と言うか楓、両手の拳を握り込んで「頑張れ」的な視線を送るのを
やめろ。

「ま、まあ、何だ。とにかく第3アリーナへ向かうぞ。今日は使用
人数も少ないだろうから、模擬戦も可能だろう」

「今日は、トーナメントに出る人だけの使用日ですからね・・・あ、
その場合、私ってどう言う扱いに・・・？」

「え、楓も出るんだろ？ 専用機持ちって強制じゃなかったっけ？」

「いえ、私のISには戦闘用の装備が無いので・・・」

・・・非戦闘用のIS、だったな。

この前から何度か見ているが、どうにも良く分からない機体だな。
普通、ISとは戦闘用の武装がついている物だろう。

あの人が作った物は、そう言う機械なのだから。

とにかく、第3アリーナへ・・・何だ？

「どうしたんだろ、凄い人だね」

「ああ・・・おかしいな」

何か騒ぎでも起こっているのか、第3アリーナに近付くにつれて人
が増え、慌ただしさが伝わってくる。

観客席から様子を見るかと言う話にもなったが……。

「観客席も人が一杯でしょう。それよりピットから入った方が人込みが無くて楽です」

「それもそうか」

楓の言葉に一夏が頷いて、ピットからアリーナに向かうことにした。そして……。

S i d e 篠ノ之 楓

ドサクサに紛れて、篝姉さん達についてピットからアリーナへ。と言うか、誰にも突っ込まれなかったからそのままついてきちゃった……。

……まあ、それはそれとして。

アリーナに行くと、第3アリーナの空で激しい戦闘が行われているのが見えた。

模擬戦じゃなくて、戦闘……そんな規模の戦いだっただ。

少なくとも、スポーツじゃないよなって感じの。

アリーナの中心で起こった爆煙の中から、3機のISが別々の方向に飛び出してくる。

「あれは・・・鈴、と・・・セシリア!？」

「・・・ボーデヴィツヒさんもいるね」

「何をしているんだ・・・？」

何・・・と言うか、何故・・・と言うか。

ブウン・・・両目にハイパーセンサーを展開。

鈴さんとセシリアさんがお互いを攻撃せずにボーデヴィツヒさんを連携して攻めている所を見ると、2体1での戦闘の模様。

でも、機体のダメージはボーデヴィツヒさんの方が軽いように見える。

鈴さんが『龍砲』を撃つ・・・でも、どう言うわけかそれはボーデヴィツヒさんに届かない。

ボーデヴィツヒさんが右手を掲げるだけで、見えない砲弾が相殺されて消える。

鈴さんが苦々しい顔で何か悪態を吐いた後、今度はボーデヴィツヒさんが攻める。

漆黒の機体の肩から飛び出した有線の刃・・・ワイヤー・ブレード連結刃?・・・が、鈴さんに襲いかかる。

「アレは・・・何？」

教えて、『こくえい黒叡』。

ブウン・・・私の前に空中投影型のディスプレイが展開、情報を集め始める。

身体に纏うのは黒の鎧、アレが何か教えて……。攻撃と防御を複雑に交代させながら、空中の3人の戦闘は激しさを増していく。押しているのは……。2人の攻撃を何らかの手段で封殺している、ポーデヴィツヒさん。

それでも、鈴さんとセシリアさんも負けてない。

互いの死角からの攻撃を一つ一つ排除し合いながら、もう一度距離を詰めて行く。

鈴さんが弾いて、セシリアさんが撃ち抜く。

どう言うわけか直接効かない衝撃砲やビットも、牽制や防御に使って……。

縦に並んで接近する2人は、即席とは言え綺麗に息を合わせてる……。山田先生の時とは、違う。

けど、ここ一番の攻撃が届かない。

「……複数のビットによる連続射撃だけは、避けてる……。？」

単発の攻撃はほぼ完全に止められるけど、連続の攻撃は回避行動。

その微妙な違いに気付いているからか、鈴さんもセシリアさんも自分だけで攻撃しようとはしない。

連携して、連続して、たたみかける。

でも瞬間的な加速で回避するポーデヴィツヒさんは、連結刃と砲撃、そして例の防御で有利に戦闘を展開させる。

「……ヤバい！」

不意に一夏さんが叫ぶ、同時にISの警告音。

どうやら、流れ弾が・・・と言うか、ボーデヴィツヒさんのカノン砲だけ。

同時に前に出るのはオレンジ色の機体、ISを急速展開したシャルルさんが実体シールドを構えて・・・。

ゴガギンッ！

鈍い音と爆発音、砲弾が弾かれる。

でも弾いたのはシャルルさんの実体シールドじゃなくて、別の盾。

・・・円環状に並んだソード・ビットの、不可視の盾。

・・・あ、自動で防御したのか。

「・・・ほう、我が軍の電磁加速砲を避けるでも無く弾くのか。そう言えば貴様も専用機持ちか・・・」

上空から降りて来たボーデヴィツヒさんが、興味を引かれたように声をかけてくる。

・・・あれ？

何か、観察されてる気分なんですけどー・・・？

上空には、放置された形の鈴さんとセシリアさん。

2人とも、怪訝そうな顔でボーデヴィツヒさんの行動を見ている。

あれ、模擬戦してたんじゃない。。。

「面白いな・・・もう一度、やってみせろ」
「なあっ!?!」

ギヤラント・・・ボーデヴィツヒさんの機体から6本の連結刃が射出される。

突然のことに、一夏さんが悲鳴を上げる。

・・・いや、悲鳴を上げたいのはこっちで・・・っ。

でも私が反応する前に、6基のソード・ビットが盾を解除して散開。それぞれが連結刃の切っ先を貫いて、アリーナの床に縫い付ける。
・・・うん、優秀なシステムに感謝。

「なるほど、自動か・・・^{オート}くだらない」

何か、勝手に失望された。

そりゃ、私の反応を見ていれば自動だってわかるよね・・・。
するとボーデヴィツヒさんは、連結刃を起動させたまま肩のレールカノンを構える。

え・・・いやいや、こっちには装備無しの篝姉さんがいるんだけど!?!

「野郎!?!」

「・・・一夏!？」

反応できない私の代わりに一夏さんがISを展開、『雪片』を構えて突撃する。

篝姉さんの声を尻目に、白い機体が一直線にボーデヴィツヒさんへ・・・。

・・・そして、止まる。

まるで時間が止まったかのように、白のISが空中で静止する。でも、時間が止まるわけが無い。

何かの力場が、一夏さんの動きを止めてる・・・。

「「「一夏!」「」」

シャルルさん、鈴さん、セシリアさんが一夏さんを援護する。

衝撃砲とビット、アサルトライフルの弾雨に、流石のボーデヴィツヒさんも一夏さんへの拘束を解いて後退する。

と言うか、専用機を一度に何機相手してるの・・・？

「・・・ふん。ちょうど良い、全員まとめて相手をしてやるっ」

連結刃を戻しながら、ボーデヴィツヒさんが囁く。

あれ、もしかしなくても「全員」って私も入ってる……？
……なんてこつたい。

「一夏……」

「……なんてこつたい……」

篝姉さんを庇える位置に立ちながら、腰部にソード・ビットを戻す。
武装が無いって、言ってるのに……。
ああ、もう……私、何すればいいのさ！

「行くぞ……！」

ラウラさんが『イゲニッション・ブースト瞬時加速』の体勢に入り……一気に加速。
そして……金属の、打ち合う音。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

金属が打ち合う音……ボーデヴィツヒさんの一撃を止めたのは、
千冬姉様だった。

生身で、しかも片腕でISの近接ブレード（170センチ）を操っ
て、ボーデヴィツヒさんの攻撃を叩き落とした。

……いや、人間がして良い行動じゃないですよ、千冬姉様。

「模擬戦をするのは勝手だ、怪我も自己責任で良い……が、アリーナを壊すな、そこは教員として言わせて貰うぞ。勝負の決着は月末のトーナメントでつけるが良い」
「教官が、そう仰るなら」

あっさり……本当にあっさり、千冬姉様の一言でボーデヴィツヒさんが下がる。
気が付けば確かに、アリーナはそこら中が戦闘の跡でボロボロで。それで……とりあえず、騒動は収まった。
……形だけは。

Side 織斑 一夏

「まあ……とにかく無事で良かったよ」
「ふ、ふん……別に助けなくても良かったのに……」
「お前な……と言うか、どっかで聞いたことある台詞だな」

寮の俺とシャルルの部屋、そこで鈴とセシリアとそんな会話をする。別に「助けてやった」なんて言うつもりはないし、むしろ巻き込まれただけな気もするしな俺。
それにしたって、もう少し殊勝な態度でも良いと思うんだけどなあ……。

まあ、確かに俺なんかの助けはいらなかったかもしれないけどさ。たぶん、まだ俺ってこの中で1番弱いしな。でもなあ、もう少し何かあるだろ。

「好きな人にカッコ悪い所を見られて、恥ずかしいんだよ」

「はあ・・・鈴さんはそうでしょうけれど」

「ちょ・・・な、ななな何を言ってるのかしら!？」

シャルルが良くわからないことを言っ、鈴がそれにめっちゃくちゃ反応してた。

いや、まあ・・・落ち着こうぜ、とりあえず終わったんだしさ。それにしても、アイツ、強かったな。

俺達全員を同時に相手にしてアレとか、凄過ぎだろ。

俺がボコ負けする鈴とセシリアを同時に相手にして押しっぱなしとか、どんだけだよ。

つまり俺が3人いても普通に負けるってことじゃんか。

「まあ、それはそれとしてよ・・・あのIS、って言うかラウラ・ボーデヴィツヒ、絶対におかしいわ」

「ですわね・・・いくらなんでも、専用機持ちが5人がかりでこうも一方的と言うのは・・・」

「あ、それなただけどさ。あの時、こう・・・金縛りみないになっただけど、アレ何だ？」

俺が箒や楓達を守ろうとして　　結局、千冬姉が止めてくれたんだけど　　ラウラに向かって行った時、全身を何かに捕まえられたような感覚がした。

何と云うか、まさに金縛りみたいな感じでき。

腕一本、指一本・・・全然、動かせなかった。
何か強い力で、押さえつけられてたみたいだ。

誰かの手に掴まれたら、あんな感じなのかなってイメージでき。
アレは、いったい・・・。

「アレは、アクティブ・イナードナル・キャンセラ『慣性停止結界』と思われます」
「・・・買ってきたぞ、ウーロン茶と紅茶で良かったか？」

その時、飲み物を買って行ってくれていた箒と楓が戻って来た。
鈴とセシリアに飲み物を渡しながら、適当な場所に座る。

・・・おお、何か壮観な面子だな。
何と云うか、全員集合って感じ？

・・・で、楓、何だって？
えー、アクティブ・・・？

S i d e シャルル・デュノア

ISは1つの例外もなく、パッシブ・イナードナル・キャンセル・
・PICと言うシステムで浮遊・加減速などを行っているんだ。
楓さんの言ったアクティブ・イナードナル・キャンセル・・・A
ICはその発展形の第3世代型兵器。

有り体に言えば、ラウラ・ボーデヴィツヒさんの機体は他のISの
PICに影響を与えることができる。

限定空間（範囲はわからないけど）での一対一でなら、ほぼ無敵じ
やないかな。

まあ、もちろんいろいろ弱点があると思うけど。
それは・・・これから研究する必要があるよね。

「AIC・・・我が国でも理論は完成していますが、あれ程の完成
度の物は初めて見ますわ」

「えーと・・・理屈としては衝撃砲みたいな物なのか？」

「ちょっと違いますけど、空間に作用すると言う意味では同義です」

一夏の疑問に、空間投影型のディスプレイの文字列を追いなから楓
さんが答える。

別のディスプレイには、さっきの模擬戦の様子が映し出されていて・
・・『シユヴァルツェア・レーゲン』の周囲の空間の歪みやエネルギー
密度の値とかが映しだされている。

と言うか、3枚も4枚もディスプレイ広げてそれぞれ独立してデー
タ処理してるって、地味に凄いやね。

「言うのは簡単ですけど、技術的な問題は差し引いても・・・これ、普通の人間の集中力じゃ使えないと思うんですけど・・・」

「でも、ラウラは普通に使ってたぜ？」

「そうなんですよね・・・でも、これだけの情報じゃ弱点までは。たぶん複数の対象は同時には止められないんじゃないか、とか、一夏さんの『零落白夜』ならイけるんじゃないか、と言う希望的観測ぐらいしか・・・」

・・・むしろ、そこまで読み切れるだけでも十分だと思うけどね。

楓さんのISは篠ノ之博士お手製って聞くけど、戦闘能力は無いんだよね？

それってたぶん、情報収集とか、他の方面に特化してるからじゃないかな。

ある意味、一夏の『白式』とは逆みたい。

・・・その時、廊下の方からドドドドッ・・・と、物凄い数の誰かが来る音がした。

それから扉がノックされて、返事を出ると・・・。
良く分からないけど、たくさんの女生徒が並んでいた。

・・・へ？

「織斑君！」 「デュノア君！」

「「「これ！」「」」

女の子達の一人が、学年別トーナメントの告知書類を見せてくれた。それによると、トーナメントはペア・・・つまりタッグマッチになつたらしくて。

で、僕と一夏とペアになりたいって・・・え、えーと、こ、困つたな。

一夏以外にはまだ、僕の性別のことはバレてないし・・・でもペアになると訓練とかで一緒になるわけで、バレるかも・・・。

「悪い、俺、シャルルと組むから」

僕が内心で焦っていると、あっさり和一夏がそう言った。

女の子達は「まあ、他の女子と組まれるよりは・・・」って納得してくれた。

・・・幼馴染の篤さんは、ちょっとショックを受けてたみたいだけど。

楓さんは・・・どちらかと言うと、お姉さんが一夏さんと組めなくてショック、みたいな顔。

・・・いつか、謝ろう。

すると、一夏が僕のことを見ながら軽く片目を閉じて見せた。

それは、まるで悪戯の共犯者に向けるような顔で・・・。

・・・僕は、何だか胸の奥があつたかくなつた。

「見てろよ、鈴、セシリア。俺、頑張つて2人の仇を取るからな！」

「か、仇・・・一夏さん？ ちょっと大げさじゃなくて？」

「と言うか、アンタ私より弱いんだから引つ込んでなさいよ。普

通に私達がトーナメントでやるからさ」

「・・・泣いて良いか？」

・・・一夏って、優しいな。

本人は違っつて言うかもしれないけど、誰かのために自然に何かをできるって、素敵なことだと思う。

少なくとも、僕は・・・嬉しい。

本気で、ここに残ることを考えてみようかな。

・・・なんてことを、考えちゃうくらいには、ね。

S i d e 更 識 簪

・・・6月の最終週の、月曜日。

今日からIS学園は全部の授業が休みになって、学年別トーナメント一色。

正直、あんまり居心地、良く無い。

「・・・はぁ・・・」

周りの喧騒から逃げるみたいに、アリーナの隅の方の席に座る。

私がいるアリーナは、1年生の試合が行われる場所だけ・・・凄

い人。

学生は当たりまえだけど、政府の関係者とかIS関連企業のエーリエントとか、研究所のスカウトとかもいる。

日本の代表候補生の監督官の人も・・・さつき、会って来た。

私、一応・・・日本の代表候補生、だから。

でも私の機体はやっぱり完成して無いから、今回もお休み。

クラス対抗戦も出れなかったし・・・こんなじゃ。

こんな調子じゃ、いつまで経ってもあの人に・・・。

「・・・本音・・・と楓、遅いな・・・」

本当なら、2人も一緒に観戦するはずなのに。

と言うか、2人がチケット押しつけて来た癖に・・・。

・・・変な子達、どうして私と一緒にいたがるんだろう・・・。

私は・・・たぶん・・・2人とも、妹・・・だから。

勝手な思い込みだけど、たぶん、同じ・・・だと、思うから。

2人とも、優秀なお姉さんがいる・・・し・・・。

「・・・篠ノ之 束博士・・・」

ISの開発者の妹って、どんな気分・・・なんだろう。

楓も本音も明るいから、私みたいにウジウジしたり・・・しない、

んだろっけど。
でも……。

「あ……」

その時、不意に携帯電話にメールが来た。
アドレス、数件しか無いから……たぶん……
……やっぱり、本音……って、え……？

「……何？」

本音からのメールには、泣き顔マークがたっぷり付いてる。
……でも、肝心の内容が無い。
え、何コレ……？

首を傾げていると、今度は楓からメールが着た。
こっちはやたらに「っ」が語尾について……これはこれで読みにくい。

何で、普通に書かないんだろっ……。

「……来れ、ない？」

要約すると、そんなことが書いてあった。

理由も書いてある、けど……でもコレ。
モニターに注目って……はい？
内容を確認した後、顔を上げる。

するとちょうど、アリーナの巨大モニターに対戦表が表示される所
だった。

どうも、機械の不具合でギリギリまで決まら無かったらしくて……
。注目するのは、第2試合の組み合わせで……。

S i d e 篠ノ之 楓

うわー……見てよアレ、姉さんってペアがラウラさんな上に1回
戦第1試合で一夏さんとだって。

どんだけくじ運無いんだろうね、姉さん……。
ペア無しでエントリーしたのは「4人」だけど、抽選なんてあつて
無いような物だし。

つまりこれ、学園側で「組ませた」って言った方が良いのかな……
。

はは、こんなことなら無理にでも篝姉さんと組めば良かった。

……あ、「いけない」って言われたんだよね、忘れてた。

ふふ、私もさあ、出たら足引っ張るだけだってわかってたしさあ……
。

人数の関係上、仕方無いとは言ってもさあ！
ちなみに本音さんは『打鉄^{うちがね}』でエントリー、箒姉さんとお揃いで羨ましいな。

「ど、どどどどどど、どつしよう楓ちゃん！ 私・・・IS上手く動か
せたこと無いよー!？」

「お、おおお、落ち、落ち着いて本音さん・・・！ 大丈夫、私な
んて武器が無いから！」

3回に1回は転ぶのにー！ っと、本音さんも大慌て。
うん、気持ちはわかるよ。

だって、対戦相手・・・1回戦、第2試合・・・。

セシリアさんと鈴さんのペアだもん。

射撃と斬撃と砲撃に蹂躪される未来が、垣間見えるよ。
知ってるよ、こう言うの死亡フラグって言うんだよね。

・・・た、助けて束お姉ちゃん！ 箒姉さ　んっー!!

「何を騒いでんのよ、アンタ達」

「そうですね、少しは落ち着いたらいかが？」

「気を遣ってるように見せかけて・・・すでに2回戦で当たるボ
ーデヴィツヒさんの機体データの復習してるってどうなのそれ!？」

でも私が鈴さん達でもそうする、だって私、攻撃手段無いもん。
鈴さんとセシリアさんは、今日までの2週間を対ボーデヴィツヒさ
ん対策に費やしたみたい。

あ、あはは………や、優しく、してください。

S i d e 篠ノ之 篇

……Bピットの更衣室で、私は自分のくじ運の悪さをここまで恨
んでいた。

学年別トーナメントを一夏と組めなかった私は、諸々の事情で結局
抽選になったんだが……。

だが、その相手があのラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「……」
「……」

会話などあるはずも無い、私とて仲良く談笑するつもりは無い。

それでも一応、ペアとしての挨拶をしたが……「邪魔はするなよ」と返された。

これで、どうコミュニケーションを取れと言うのか。

しかも、初戦の相手が一夏・シャルルのペアとか……神は私が嫌いなのか。

最悪、そう、最悪だ。

ペア相手もそうだし、対戦の組み合わせ抽選も。

・・・私は、ここまでくじ運の悪い女だったろうか？

はあ・・・と、『打鉄』うちがねを装着した自分の身体を見下ろしながら溜息を吐く。

「・・・はあ」

特に・・・私は、ラウラ・ボーデヴィツヒと言う少女が苦手だった。力が全てで、結果が全て・・・と言う態度を、全身でとっている彼女が、苦手なんだ。

まるで、昔の・・・そして今の自分を見ているようで。

こう言うのを、近親憎悪と言うのだろうか・・・。

「・・・楓に頼めば、よ・・・」

かった、という言葉葉を直前で飲み込む。

深く息を吸って、吐く。

目を閉じて、視界を閉ざす。

・・・昔、「勝ったら付き合う」と言う約束を、実は一夏としたことがあった。

小学校4年生の頃の、剣道の全国大会。

実家が剣道の道場の私は・・・自慢では無いが、上級生を押しつけて優勝候補の筆頭だった。

だから、凄く・・・楽しみにしていた。
ただ姉さんたばねがISを発表して、日本政府に保護されるハメになっ
た。

「・・・」

結果、私は全国大会に出場できず・・・各地を転々とさせられて、
いつの間にか両親とも暮らせなくなった。
一夏との連絡も、第三者に居場所が知られると言う大人達の都合で、
取れなくなった。
嫌だったし、悔しかった、でも仕方無いと思おうとした。

でも、元凶の姉さんたばねが失踪いけだした。

しかも、身体の弱かった楓だけ連れて。
姉妹で唯一残された私は、政府から何度も聴取と監視を受けて・・・
IS学園に、強制入学。
それでも剣道だけは続けた、これだけが一夏と、あの楽しい日々と
の繋がりだったから。
中学生の時に全国大会に出て、勝った。でも、それだけだった。
それは要するに「憂さ晴らし」で、私に負けて涙する相手を見て、
私は・・・私は。

「・・・本物の、強さが欲しい・・・」

隣のペア相手にも聞こえないよう　　ISのセンサーが拾つかもしれないが　　囁きかける。

誰に対してでも無い、自分に対して。
楓に対してどう接するべきかわからないのは、きっと私が弱いせいだ。

姉さんあねさんに対するそれを決められないのも、私が弱いせいだ。

私は、いつになったら・・・。
自分の足で、地に立っていられるようになるのだろうか。

第7話：「黒い雨」（後書き）

篠ノ之 楓：

うわー・・・ヤバいですよあの人、篝姉さんが近付かないように・・・って、ペアだし！

篝姉さん、昔から変な所でくじ運悪かったもんねー。

篠ノ之 束：

商店街のくじ引きでも、決まって残念賞の一個上だったもんねー。

篠ノ之 楓：

そうそう、いつも変なタオルとかで・・・って、それは違う気がするよ束お姉ちゃん！

篠ノ之 束：

ええー、そう？

篠ノ之 楓：

う、うん、たぶん・・・はあ、篝姉さん、大丈夫だと良いけど・・・。

篠ノ之 束：

ねえねえ楓ちゃん、お姉ちゃんの出番はまだかい？

篠ノ之 楓：

知らないよ！？

第8話：「学年別トーナメント」（前書き）

明けましておめでとございます！

旧年は大変お世話になりました、本年もよろしくお願い申し上げます。

これからも、地道に頑張ります。

では、新年初投稿です。

年も変わったことですし、良いですよね（何が）。では、どうぞ。

第8話：「学年別トーナメント」

第8話：「学年別トーナメント」

Side 篠ノ之 楓

あー・・・もう、本気でやってらんない。

何が悲しくて、私がトーナメントなんて出ないといけないんだろう。何か作爲的な物を感じる・・・あ、千冬姉様と言う作爲か。

「まあまあ、なんとかなるよ」

「本音さんの楽道家ぶりが、時に羨ましいよ・・・」

「アンタ達ね・・・」

そんな会話をしながら、私は本音さんや鈴さん達と一緒に更衣室のモニターで学年別トーナメント1回戦の第1試合を見てる。

つまりは、篝姉さんと一夏さんの試合を。

・・・いや、厳密には一夏さんチームと篝姉さんチームだけど。

試合開始と同時にボーデヴィツヒさんに斬りかかった一夏さん、だけどその攻撃は案の定ボーデヴィツヒさんのAICに捕まって止められた。

そのままボーデヴィツヒさんは肩のレールカノンで一夏さんの頭を（比喻でなく）吹き飛ばそうとしたけど、それはシャルルさんが射撃で援護して防ぐ。

特筆すべきはシャルルさんの武装切り替えの速度、アレはちょっと真似できない。

「『フラッシュ・スイッチ高速切替』……」

「ふえ？ 何それー？」

「……戦闘中のリアルタイム武装呼び出しのことだね」

「ほえ、そうなんだ」

セシリアさんの呟きに、私が追加で説明。

何か、最近こう言う役割が多いよね。

ちなみに普通、武装の切替 例えば剣を捨てて銃とか は、

普通の人なら5秒〜10秒かかる。

私？ 私は武装の切替とかしないから。

そうこうしている内に、試合はさらに進行する。

ペア相手への義理が一夏さんへの対抗心か、篝姉さんがボーデヴィツヒさんを守るように前に出ていた。

……姉さん、真面目だから……。

「篝も頑張るわねー」

「篝姉さん、真面目だから」

鈴さんが呆れを通り越して感心してるけど、実際、篝姉さんは真面目。

たぶん、「今は自分のすべきことをしよう」とか考えてるんじゃない無

いかな。

カリカリと口の中の飴玉を噛みながら、そんなことを考える。

ええと・・・試合試合。

まあ、当たり前かもしれないけれど、篝姉さんとボーデヴィツヒさんはバラバラに戦ってる感じ。

むしろ、ボーデヴィツヒさんに歩み寄りの精神が見られない。

そうになると、世代・性能的に『打鉄』うちがねだとキツイわけで・・・。そんなことを考えた、次の瞬間。

「・・・なっ!?!」

ガリツ・・・私は思わず、歯の間で弄んでいた飴を噛み砕いた。

視界には、空中へと放り投げられる『打鉄』・・・つまりは、篝姉さん。

一夏さんやシャルルさんに、やられたわけじゃない。

ラウラ・ボーデヴィツヒが、やたらに邪魔そうに連結刃ロイヤル・ブレードで篝姉さんを、「投げた」。

ちよ・・・え、何それ？

・・・ケンカウツテンノ？

<警告、上空から熱源反応、急速接近中

>

・・・はい？

私がちよつとキレかけた次の瞬間

。

Side 篠ノ之 篇

「な・・・何をする!？」

試合になつたらなつたで、私は私なりにペア相手に気を遣つて戦つていたつもりだ。

一夏と切り結ぶと言うのも、思ったよりは楽しい物だった。機体性能の差か、それとも単純に技量の違いかはともかく・・・私が押されていたのは、確かだ。

だがボーデヴィツヒはあるつことが、私を「投げた」。

それもデュノアの射撃から助けるとか一夏の斬撃の射程外に逃がすとか、そう言う意味では無く・・・まさに、投げ捨てられたのだ。アリーナの床に叩き付けられた衝撃に身体が痺れるのを感じるが、それ以上に憤りが強かった。

「・・・ふ」

「・・・!」

見えた、見えてしまった。

ポーデヴィツヒの唇が、かすかに笑みの形に歪むのを。

私を一瞥した後は、ポーデヴィツヒは一夏に6つの連結刃で近接戦を仕掛ける。

そしてそのまま一夏と切り結びながら、私から離れて行く。

斬撃と突撃を織り交ぜた突進に、徐々に一夏が押されていく。

・・・ガンツ！

もはや何と言つて気持ちを表現すれば良いのかわからなくて、『^{がね}打鉄』の拳を床に叩きつける。

「大丈夫？」

「・・・デュノア」

不意に、オレンジ色の機体が傍に降り立った。

差し伸べられた手には、当然、武装が握られている。

近接ブレード「ブレード・スライサー」・・・『^{うちがね}打鉄』のディスプレイにその武装の名前とスペックが表示される。

次の瞬間には、斬り合っていた。

私とデュノアのブレードが打ち合う度に火花を散らし、ISが衝撃を相殺しているにも関わらず両の腕にズンツ・・・と重みが走る。

「相手が一夏じゃ無くて、ゴメンね！」
「・・・バカに、するなっ！！」

怒号、しかし自分でも力が入っていない声だと自覚している。
だからか、私の剣はあっさりとデュノアのブレードに止められる。
そして、デュノアのISの左手に銃器が握られていることに今さら
気が付く。

・・・武装の高速切替！？

連装ショットガン「レイン・オブ・サタデー」 ディスプレ
イにそう表示された瞬間、私は息を飲む。
凄まじい衝撃が、私の・・・『打鉄』^{うちがね}の腹を貫いた。
それは断続的に撃ち込まれ続け、私のISのシールドエネルギーを
急速に奪う。

「くっ・・・あああああっ・・・！！」

衝撃と静寂、それが数秒ごとに訪れる。
・・・この状況からでも、逃れようと思えばできたかもしれない。
だが、逃れたとして・・・それで、どうすると言っのか。

そんな思いが、私の動きを鈍らせる。
そして、私のISのシールドエネルギーは瞬く間に底をついた。

ガクンツ、とエネルギーを失ったISが重くなり、私はその場に膝をつく。

「……ゴメン、一夏が待ってるから」
「……」

俯いたまま顔を上げない私を置いて、デュノアが颯爽と駆けて行く。ボーデヴィツヒを相手に1人で苦戦している、一夏の下に。どうやら、最初からまず私を倒す作戦だったらしい……。

……つまり、私の方が早く倒せると思われていたと言っことか。
……何が。
何が、勝ったら一夏と……だ……!!

「……っ!」

重いISの腕を振り上げて、もう一度アリーナの床に叩きつける。
……噛み締めた唇からは、鉄の味がする液体が流れていた。

シールドエネルギー残量が100を切った、これ以上は持たない。
ラウラにボコボコに殴られながら、俺は焦ってた。
何と言うか、想像以上に力の差が大きい。

箒を倒したシャルルが戻ってきてくれなかったら、あと3秒で負けてたな。

だけど、シャルルさえ戻ってきてくれれば……！

「頼む、シャルル！」

「任せて、一夏！」

両手で持った『雪片』^{ゆきひら}、その刃が白いエネルギーに包まれる。

『零落白夜』、あらゆるエネルギーをぶち切る剣。

ただし、燃費が最悪……だからもう、本当に後が無いってわけだ。

縦に並んだ俺達をレールカノンで一掃する気なのだろう、ラウラが一旦距離を取る。

そしてそこで、俺達は逆に距離を詰める。

俺はAICで動きを止められるかもしれないが、それは構わない。

「は……特攻か？ 学習しない奴め」

「それしか……できないからなあ……！」

叫んで、それこそ文字通りに「特攻」する。

だけど直線的なそれは、あっさりとラウラのAICの網に捕まって停止させられてしまう。

この感触、何度味わっても嫌だぜ……！

「消える」

ガコンツ、とレールカノンの銃口が俺の方を向く。

直撃コース、当たれば確実にゲームオーバーだ。

……だけど。

ズガンツ！

さっきまで俺のISの陰に隠れていたはずのシャルルが、ラウラの背後にアリーナの床を踏み抜く勢いで着地していた。

一瞬で加速して接近する、奇襲攻撃。

この2週間、これの練習しかしていなかったくらいだ。

何せ、頭、良くないからさ、俺。

「『イグニッション・ブースト
瞬時加速』」

「!?」

ぎゅんつ、とラウラの目が後ろを向く。

その拍子に、レールカノンの照準がズレる。

磁力で加速された砲弾が、『白式』^{（白式）}の左肩の装甲を吹き飛ばす。

だが俺から意識を逸らしたラウラ、AICの拘束が緩む。

「だらあああああっ!?!」

「なっ……この……!?!」

特攻、ラウラの機体に『白式』ごとぶつかる。

『零落白夜』はとづくに解けてる、さっきの一撃でシールドエネルギー残量は何と1!

つまり、体当たりしかできない。

格好悪いし、泥臭い。

だけど……負けるよりは良い!

「だろ? シャルル」

「そうだね、一夏」

シャルルに対処しようと6本の連結刃を射出しようとしたラウラ、だがISの体当たりで流石にバランスを崩す。

もちろん、PICを積んでるISは数秒で体勢を立て直す。

だけど、その一瞬で……。

「獲ったよ」

濁った破裂音、シャルルの機体の盾装甲が弾け飛び、リボルバーと

杭が融合したような武装が露出する。

それを見たラウラが、息を呑むのが聞こえた気がする。
シャルルの武装は、六九口径パイルバンカー「グレー・スケール灰色の鱗殻」。

「シールド・ピアース盾殺し」

次の瞬間、それがラウラの機体の腹部に撃ち込まれた。

轟音と爆発、それが4回連続・・・リボルバー機構でひたすらに連射できるパイルバンカー、怖いよシャルルさん。

よし、このまま !

< 警告、上空から >

『白式』の警告音。

次の瞬間、何だか覚えのある振動が、アリーナを揺らした。
それも、今回は・・・2回。

時を遡ること5分前。

一夏がシャルルと共にラウラと2体1での戦いを繰り返していた頃・・・。

「毎年のことだけど、凄え警備だなあオイ」
「クラス対抗戦の事件もあったばかりだ・・・例年より嚴重なくらいだろう」

IS学園の上空は、陸上海上問わずにIS学園教師陣によって封鎖されていた。

第2世代の機体を身に纏った教師達が、外部からの襲撃に備えて巡回しているのである。

今も、『ラファール・リヴァイヴ』2機での哨戒任務中である。

良く見れば、その内の1人はクラス対抗戦の際に最初に無人機にアサルトライフルでの射撃を行っていた人物である。
と言って、顔はバイザーで見えないが・・・20代後半であろうか、まだ若い。

「お・・・今やってんの、あの時の男子生徒の試合か？」
「らしいな」

所定の位置について振り向いて見れば、ISの望遠映像でアーリーナの様子が見える。

そこでは、3機のIS 3機とも専用機 の戦いが繰り広げられている。

秀团的に、フィナーレが近いようである。

その時、不意に映像が乱れる。

ISにはあり得ない、砂嵐のような波が画像を乱す。
片手を耳に当てるようにしながら、2機の『リヴァイヴ』がよろめく。

次の瞬間、彼女らは「何か」に襲われる。

「て、てめえは . . . !」

墜ちて行く中で、2人は自分達を撃墜した「それ」を見る。

ISのセンサーからすら完璧に姿を隠すステルス機能で、接近を知ることができなかった。

それは . . . 。

Side 織斑 千冬

外回りの教師2人と連絡が取れなくなった。

. . . という報告を受けた直後、アリーナ周辺に侵入者が出たとの報告が来た。

しかも、同時に2か所。

「 . . . 場所は? 」

「だ、第3アリーナと . . . 第3アリーナ、Aピットです! 」

「そうか・・・」

第3アリーナ、つまりは一夏達の試合が行われている場所だな。そしてそのピットの1つに、もう一つの反応。

こちらは・・・篠ノ之妹がいる方が、凰とオルコットも。

私達は今の今まで、第3アリーナ（だけではないが）の試合をモニターで見っていた。

だから、第3アリーナの侵入者は姿を確認できている。

一夏達の試合に乱入してきたそれは、以前の侵入者と似て非なる造形をしていた。

以前は木偶の坊のような造形だったが、今はどこか古代ギリシアの彫刻を彷彿とさせる造り。

石のように凹凸のある白い装甲、両腕は巨大な近接ブレード・・・。

「・・・2度連続で、侵入者を許すか・・・」

・・・失態だ。

各国から生徒を受け入れているこの学園の安全は、何があっても保障されていなければならない。

それが二度続けて侵入者を許すとなると・・・。

普通は、あり得ない。

ここは、最先端技術で封鎖されている施設だ。

そして仮にこれが、前回と同じ存在の手による物だとすれば・・・。

・・・思い当たる節は、1つしか無い。

「か、各方面から、指示を仰いで来ています！」

「・・・対象を仮称『ゴレム?』とし、現時点でもって敵性ISと断定。各教員は所定の規約に従って行動しろ、例の緊急マニュアル通りにだ」

「は、はい!!」

山田先生が端末に飛びつき、私の言葉を各方面に伝える。

観客席や他のアリーナの間達を避難させ、さらに救援部隊を編成して投入する。

やるべきことは、いつだって単純だ。

「・・・・・・お前か」

お前なのか、と。

名前は出さず、口の中だけで呟く。

私が誰を脳裏に思い浮かべているかは、実は誰でも思い付く存在だ。何故なら・・・。

ISのコアは、アイツにしか作れないのだから。

「・・・山田先生、各システムは？」

「が、学園のはダウンしています・・・前と一緒にです、掌握されました。でも教員に配布してる独立端末は無事です」

「そうか、では各員・・・」

せめてもの抵抗が功を奏したとわかり、私はさらさら指示を各方面に出す。

その私の目の前に画面では、一夏達が……。それに、ピットの方にも誰かを向かわせない。

「そっちは、私が行きましょう」

「・・・お前は」

壁際ですつと黙っていた女生徒が、扇子を開きながら声を上げる。

学内警備の相談に来たのだが、話が終わる前に侵入者騒ぎが起きたからな……。

涼やかな雰囲気を持つその女生徒は、この学園の生徒のリーダーでもある。

赤い瞳を細めつつ、そいつは言う。

「私はIS学園生徒会長、ならばそのように振舞いましょうそれに」

真剣な表情を一旦崩して、そいつは言う。

「妹のお友達にも、興味ありますし」

・・・妹の友達？

S i d e ラウラ・ボーデヴィツヒ

何、だ・・・コイツは!?

フランス代表候補生の奇襲に対応しようとした次の瞬間、白い全身装甲のISが乱入してきた。

データが無いのでわからないが・・・イレギュラーか!

「私の、邪魔を・・・!」

両手に近接ブレードを備えたそれは、織斑一夏とフランスの代表候補生には目もくれずに、私に向かってきた。

初撃は回避しきれずにまともに喰らったが、大したことは無い。

問題は、常時加速状態で私から離れないこと。

A I Cの網に捕らえようとした時には、すでに別の場所にいる。

あの巨体で、織斑一夏の機体よりも速いだと・・・?

とっさに6本のワイヤー・ブレードで対処しようとするが・・・それは、できなかった。

「な・・・」

放たれたワイヤー・ブレードは、その全てがアリーナの床に縫いつけられる。

それはまるで、短刀のような形をしたビットにも見えて……。
ドンッ……足で踏みつけられるように、私はアリーナの壁に叩きつけられた。

振動と警告音、そして。

「ぐっ……あああああっ!?!」

白い2本の近接ブレードが、『シユヴァルツエア・レーゲン』の胴体部に突き立てられる。

ダメージはISの防御機能が消すが、衝撃は伝わる。

目前にある敵の顔の顔面の装甲には、私の顔が映っている。

衝撃で眼帯の外れた、金の左眼を露出させた私が……。

ぐ……ま、不味い……!

「ぐ、敗北、する、わけ……ぐううっ!?!」

もう1撃、敵ながら褒め称えなくなる容赦の無さだった。

敗北は許されない、私には他国のISと交戦しデータを採取すると言った任務がある。

そしてそれ以上に、戦うために生み出された私が……戦いで負けるわけにはいかない。

その瞬間から、私は「ラウラ・ボーデヴィツヒ」では無くなる。

織斑教官に与えられた意味を、喪失することになる。

人工合成された遺伝子と鉄の子宮から産まれた私の、おそらくは唯一の意味。

戦い、勝利し・・・そして教官のような、強さを。

それ以外の物など、何の価値も見出せない。

ならばそれだけを追及する、それだけが私の意味、私の証。

「ガ　　!？」

嫌な音がして、『シユヴァルツエア・レーゲン』の内部機関が損傷する。

交互に繰り出される突きに、機体が悲鳴を上げるのがわかる。

ハイパーセンサーが失われ、急速に出力が下がる。

このままでは、コアに取り返しのないつかない損傷を受ける可能性もある。

「・・・そいつを、離せ!!」

不意に、敵ISの背後に白のISが姿を現した。

織斑一夏、だがエネルギーが底を尽きかけている機体では何もできない。

敵ISが片腕で織斑一夏の剣撃をいなし、殴り飛ばす。

「助けなど……いらんっ!」

反射的に叫び、顔を上げると……敵ISの能面のような顔に映る私と目が合う。

金の瞳、『ヴォーダン・オージェ越界の瞳』。

肉眼に『ナノマシン』を移植した、大神オーデインの瞳。

IS適合性の向上のための処置、脳への視覚信号の伝達速度の飛躍的な高速化、超高速戦闘下での動体反射を向上させる『瞳』。

理論上、リスクはゼロ……だが私の眼は色を変え、制御ができなくなった。

だから私は失敗作、敗北すれば無能者となる、許されない。

『何、私が教えるんだ……お前はこの部隊で最強の名を欲しいままにできるさ』

織斑教官がいなければ、私は失敗作のままだった……部隊で最強の操縦者にはなれなかった。

凜々しさと強さ、威風堂々たる姿勢、美貌……完璧な、完全な存在。

だが織斑教官も、「弟」の話をする時だけは……完全では無くなる、完璧では無くなる。

だから、負けるわけにはいかない。
教官を教官で無い「何か」にしてしまっ、あの男にだけは。
敗北など……。

「認め……られるかあっ!!」

叫ぶ、だが『シユヴァルツェア・レーゲン』の装甲はもう保たない。
これ以上攻撃が続けば、ISは強制解除されるだろう。
そして下手をすれば、命を落とす。
いや、命を落とそうとも……存在意義にかけて、敗北だけは……
!

欲しい……強さが、力が。
どんな状況でも……全てを、跳ねのける力、強さ。
教官の、ように……!

<Damage Level ……D>

……何だ?
今、私の中で、何か……。

<Mind Condition ……Uplift>

ぎりり、自分の中の何か・・・何か、大切なモノが。
・・・大切？

<Certification・・・Clear>

何かが、掴まれたような気がした。

<Valkyrie Trace System>・・・boot・

そこから先は、覚えていない。
ただ・・・「変わった」私が、敵ISの頭を斬り飛ばした所までは
覚えている。

その後は・・・少し、曖昧だった。
織斑一夏に、何か言われたような気がするのだが・・・。

・・・記憶が無いとは、軍人にあるまじき失態だな。
そう、思った。

Side 鳳 鈴音

突然ピットの方から爆発音がして、更衣室のある部屋まで揺れた。

直後、更衣室に警告音が鳴り響いて、避難誘導灯に明かりが灯る。何よ何よ、こつこつ言つのデジヤヴって言うんだっけ……！

「……皆！ 出口方向に避難して……！」

周りには私達を含めて……ううん、専用機の無い一般生徒がほとんど。

IS無しじゃ、何かあった時にシャレにならない。

だから私は専用機持ちとして、行動しなくちゃいけない。

「私が先導しますわ！」

「お願い！」

セシリアもそれはわかってるから、一般生徒達を連れて出口方向へ誘導する。

と言っても、半分くらいの生徒はまだ戸惑ってるから……そう言う子達を動かすのは、割と大変。

千冬さんなら、一発で皆動いてくれるんだろうけど。

残念ながら、私やセシリアにはそこまでの威厳は無いわけよ。

と言っか、同い年だしね。

「……楓！ 布仏さん！ アンタ達も早く」

隅っこの方でモニターを見ていた楓達に声をかけると、やけにゆっ

たりと　有り体に言えばトロい　こつちに歩いて来る。
・・・いや、走りなさいよ！　と言おうとした矢先。

爆風。

更衣室のピット側出口が吹き飛んで、他の生徒達が悲鳴を上げる。
そこでようやく、皆が反対側の出口に向けて走ってくれるようになった。

そっちは、セシリアに任せるしか無いわね・・・それよりも。
私は私で、ロッカーをいくつか倒しながら『シエンロン甲龍』を緊急展開。
ああ、もう・・・狭い！

「こいつ・・・！」

彫刻のような胴体部、能面みたいな顔・・・造りがちょっと違うけど。

でも何となく、雰囲気がこの間の奴に似てる。

両腕は大砲じゃなくて、近接ブレード・・・格闘タイプ？

「いったあゝ・・・」

「だ、大丈夫、本音さん？」

「ち・・・！」

ちよ、そのほんわかしてる2人！

爆風で転んだんだらうけど、もう少し危機感持ちなさいよ！

敵　　ってことで良いわよね　　ISが、その場から動かずに

何故か2人を見下ろしたから、私は焦る。

即座に決断して『イグニッション・ブースト瞬時加速』、青竜刀を1つだけ展開して突撃。

「ふやあ~~~~っ」

楓と違って待機状態のISの保護が無い布仏さんが悲鳴を上げるけど、構ってられない。

こっちを抑えないと、悲鳴もあげられなくなる！

青竜刀で白い近接ブレードを弾いて、蹴りを入れて後ろに下がらせる。

それから、敵と楓達の間に入る・・・それにしても狭い、せめてピットに出れば。

ここじゃ、衝撃砲が使えないし・・・。

「逃げ・・・」

なさい、と叫ぼうとした次の瞬間。

白い彫刻みたいな敵ISの背中から、何かが飛び出してきた。

何、ビッ　　!??

高速で三方向から飛来したそれは、私に容赦無く襲いかかって来る。青竜刀に2つが直撃、弾かれて手から離れる。

すぐに後退して回避しようとするけど、空間が・・・!

逡巡した次の瞬間、『甲龍^{シエンロン}』の胴体部と右腕、左足に衝撃が。

「ぐ、この・・・っ！」

ISの警告音を耳に、そして視界に飛び散るISの破片を入れながら。

私はそれでも、次の一撃に対処しようとして・・・。

Side 篠ノ之 楓

「・・・え？」

本音さんを助け起こす十数秒の間に、何度も鈍い音がすぐ後ろで響いた。

そして本音さんを支えながら振り向けば、頭上を何かが通り過ぎて。そして、壁に何か重い物が激突する音。

でも、そっちを見ることはできない。

だって、私の後ろには・・・。

白い、大きなのっぺらぼうみたいなISが、近接ブレードを・・・
つて、ちょっ!?

ズアッ・・・私が反応するよりも速く、『黒叢^{こくえい}』が私の身体を覆う。

本音さんを潰さないように床に手をついた所で……。

「うあつ……!?!」

「わ、わわわ、わゝ?」

ゴギンツ、鈍い音を立てて火花が散る。

腰部から飛び出したソード・ビットが、円環状に並んで防いでくれる。

私の下で悲鳴を上げる本音さんを、庇うように抱き締める。

後ろでは、敵……だよな? 敵の背中あたりから飛び出した何かに反応して、ソード・ビットの盾が崩れる。

飛び出したそれは3つ、私のソード・ビット6つの内3つが盾の列から離れてそれを迎撃する。

あれは……何? まるでソード・ビットだ。

ロッカー・ルーム更衣室の中を、合計6つの短剣が飛び交い、衝突し合う。

ロッカーを薙ぎ倒して、壁を削りながら。

「……つ!?!」

けれどその分、ソード・ビットの盾が薄くなる。

3つで作る盾は円じゃ無くして三角形、近接ブレードを連続で叩きつけられると紫電を飛ばしながらビットが悲鳴を上げる。

「か、楓ちゃん……ヤバい？」
「だ、大丈夫……！」

大丈夫と言った次の瞬間、半分になったビットの盾が碎ける。
シールドエネルギーの欠片がまるで硝子みたいに飛び散って、衝撃が直に背中に。

「ああう……っ!？」

初めて……初めて感じる類の衝撃に、悲鳴を上げる。
目の前に浮かんだ画面の中で、『黒叡』のエネルギーゲージが急激に減る。

と言うか、この減り方はヤバい。
ナ、ナノマシン使おうにも、データ入力ができない。

冗談抜きで、ヤバい。
し、死んじゃう、かも……。
何回も言うけど、『黒叡』には戦闘用の装備が……。

「……楓……！」
「え……」

衝撃に顔を顰めつつ顔を上げると、反対側の壁に3つの短剣で縫い付けられてる鈴さんがこっちを見てた。

その目は、私の側・・・さつき鈴さんが捨てたらしい、青竜刀。
ピピッ・・・目の前の画面に、『使用許諾完了』の文字が浮かぶ。
つまりこれで、あの青竜刀は私も使えるようになった。

・・・いや、私、使ったこと無いし！

それでどうにかしろって、ハードル高いから・・・！
とか考えてる間に、背後からの攻撃は激しさを増す。

どうしてか、背中・・・ナノマシンのタンクのあたりを集中して狙
われる、けど。

「・・・う、ああああ・・・っ!?!」

「か、楓ちゃん!?!」

「・・・っ!」

ぎゅっつ、と本音さんを抱き締める。

攻撃から守る意味もあるけど、顔を見られたくないって言うか・・・
泣いてるかもだし。

『黒叢』のエネルギーが、もうすぐ底をつく。

そしたら「絶対防御」も消えて、私達を守る物は何も無くなる。

全力で逃げれば、もしかしたら・・・なんて、思わなくも無いけど。
ただEISをつけてない本音さんは逃げ切れなと思う、鈴さんだ
って。

だから逃げない、だって・・・。
だって。

「・・・お友達、だもん・・・！」

ボロボロと泣きながら、私は言う。

お友達を置いてなんていけない、だって、初めてのお友達なんだから。

願いつけて憧れて、やっとできたお友達・・・無くしたくない。

でも、これ以上のことは私にはできない。

だから・・・助けて。

「・・・たすけて、ねえさん・・・!!！」

いつも真つ直ぐで、誰よりも強かったあの人が脳裏に浮かぶのと同じ時に。

『黒叢くくえい』のエネルギーが、底をついた。

・・・姉さん・・・!!！」

本音さんを抱き締めて、目をつぶる。

結局、私は武器を取れずに・・・蹲って、次の衝撃を待った。けど・・・来なかった。

その代わり、どこか空気が爽やかになった気が・・・。

「・・・良いわね。その思い、大事にしなさいな」

・・・え？

恐る恐る、後ろを振り返る。

そこには・・・青い、ISがいた。

青いISを纏った女生徒が、白いISを前に私を見て、微笑んでいた。

その人が右手に持った大型の突撃槍ランスが、近接ブレードを受け止めている。

全体的に面積の少ないアーマー、装甲は水色。

装甲の表面は透明な水のドレスみたいなフィールドで覆われていて、まるで水面を纏っているよう。

そしてその涼やかな機体を纏うのは、何だか誰かと容姿がそっくりな女生徒で・・・。

「わ、わー・・・お嬢様だー」

「おじょう・・・？」

「えっと、生徒会長だよ。でも、どうしてここに・・・？」

「あら、そんなの決まってるじゃないの本音ちゃん・・・私はIS学園生徒会長、故にそのように振る舞うのよ」

悪戯好きそうな笑みを浮かべて、生徒会長さんは前を向く。

そしてランスを持っていない方の手を掲げると、何だか周囲の気温・

・・・と言うか、湿度が変化するのがわかる。

な、何・・・ナノマシン？ あれ？ と言っか、生徒会長さんって、
確か・・・？

「・・・『クリア・パッション
清き熱情』」

どう言う原理なのか、相手の白いISがいきなり爆発した。
い、一撃で・・・倒しちゃった。
そうか、これが・・・「凄い人」。

生徒会長・・・簪ちゃんの、お姉ちゃん。
・・・簪ちゃんに、どこか似てる気がした。

Side ラウラ・ボーデヴィツヒ

・・・あの人の強さに、どうしようも無く憧れた。
だけど、その強さがどこから来るのかは・・・結局、わからなかつ
た。
だから私は本当は、とても弱い・・・。

「・・・あ・・・？」

目を覚ますと、知らない天井がそこにあった。
白い天井、病室が研究室にあるようなそれが、目の前にあった。
・・・私、は？

「・・・気が付いたか」

「・・・教官・・・？」

「ここでは、織斑先生と呼べと言ったが？」

どうやら、私は医務室のベッドに寝かされているようだった。
筋肉の疲労と打撲、それらから来る痛みで顔を顰める。
何が、あった・・・？

「一応、機密事項で重要事項だ・・・誰にも口外するなよ」

「・・・」

「お前の機体に、国際条約違反のシステムが仕込まれていた。VTシステム・・・知っているな？」

教官の言葉に、小さく頷く。

VTシステム・・・ヴァルキリー・トレース・システム。

過去のモンド・グロッソの戦闘方法をデータ化し再現・実行するシステムで、あらゆる企業・国家での開発・研究・使用が禁止されている。

機体損傷度や操縦者の私の心理状態などの条件が重なれば、発動する仕掛けだったらしい。

「近くドイツ軍に委員会の強制捜査が入る。お前にもIS学園から監視がつけられる・・・まあ、私だがな。お前はこれから当面は私の管理下だ、異論は無いな？」

「・・・了解」

トレース・システム・・・ああ、そうか、と納得する。
私は、教官になろうとしたのか・・・この人に。
それにすら失敗した私は、もう誰でも無い・・・。

「悩むが良いさ」

「・・・？」

「しばらくはここにいなければならん、人生はまだまだ続く、大いに悩めよ小娘」

もしかして、慰めてくれているのだろうか・・・？
そんなことを思つくらい、私は弱っているのだろうか。
だが、この人に言われるのならそれで良いと思える。

「・・・き・・・織斑、先生」

「何だ？」

「夢を・・・見た気がします。初めて・・・」

「ほう、興味深いな。どんな夢だ？」

「たぶん・・・あの男・・・織斑先生の弟、織斑一夏と会話を・・・
していました」

憎くて、不要で・・・羨ましかった、男。

教官の「特別」な、あの男と。

どこか・・・不思議な空間で話した。

ISのコア同士の同調で起こると言う現象に、似ていた気がする。

「何と言っていた？」

「自分は強く無い・・・もし強く見えるのなら、それは強くなりた
いと思っっているからだ、と。それはつまり、そう在りたいと願っ
ているのだと・・・」

自分がどうしたいか、それがわからなければ強い弱い以前に、歩
き方がわからない。

だから、やりたいようにやる・・・後悔はたくさんだけど、と笑っ
ていたような気がする。

あの夢の・・・空間の中では、奇妙なくらい素直でいられた気がす
る。

素直に・・・言葉を、噛み締めることができたと思う。

それは、生まれて初めてのことだった。

・・・織斑教官、以外では。

「そして・・・本当に強くなれたら、誰かを守ってみたい、そう言
っていました・・・」

「・・・そうか、青いな」

「はい・・・でも」

それはまるで、貴女のようにだった。

「・・・ふん、一つ忠告しておくぞ?」

「・・・? はい」

私の顔を興味深そうに見ていた教官が、ニヤリと笑いながら口を開いた。

その表情に、何故か私はモヤモヤした物を胸に感じる。

「心を強く持て、アレは未熟者だが妙に女を刺激する・・・油断すれば、惚れてしまうぞ?」

「惚れる・・・? 教官もですか?」

「姉が弟に惚れるか、馬鹿め・・・まあ、お前はそこから始めても良いのではないか? ラウラ・ボーデヴィツヒ」

教官は立ち上がると、私に背を向けて出口目指して歩き出した。

「まあ、今は休め・・・アイツはどの道、3日間は懲罰部屋から出て来れないしな」

それだけ言って、後はもう何も言わずに医務室から出て行った。

仕事に、戻るのだろう。
はぁ……と、大きく息を吐いた。

「……織斑一夏か」

本国から「第一級観察対象」に指定されている男、教官の弟。正直、何故教官があのような男に入れ込むのかわからない。……とは言え、どうやら私はあの男に助けられたらしい。……まだ、判断するには材料が足りないな。で、あれば、今後しばらく、観察を続けることにしよう。元々、そう言う命令で日本に来たのだから。

……む？

気のせいかな、何だか隣の個室が騒がしいな……。どこかで聞いたような声が聞こえるが。

S i d e 篠ノ之 楓

いやあ、今回はリアルに死ぬかと思った。

『黒叡』もダメージレベルBまで行っただし、危なかった。レベルCを越えるとデータ飛ぶかもしれないから、本気で危なかったよ……。

はぁ・・・怖かった。

生徒会長さんが来なかったら、今頃・・・。

・・・想像するだけで、寒気がするや。

「楓ちゃん、助けてくれてありがとう」

医務室で一応の診察を受けた後、着替えてたら本音さんにお礼を言われた。

私しばちくりと目を瞬かせていると、にへへ、と笑って。

「私、あんまり動きとか早く無いからー・・・楓ちゃんがいてくれなかったら、ヤバかったよー」

「え、えー・・・でも、結局は生徒会長さんが助けてくれたわけだし・・・」

と言うか、そもそもあの場所にいたのだって私のせいみたいな物だし・・・。

生徒会長さんが来てくれなかったら、どの道、本音さんも私と一緒に酷いことになってたと思うし。

「でも、庇ってくれたのは楓ちゃんだよ。・・・だからっ、楓ちゃんにありがとう、だよ」

ぺかー・・・気のせいかな、本音さんの周囲に光が溢れてるように見えた。

太陽みたいなほんわかかな笑みを浮かべて、お礼を言ってくれり。それはどこか照れくさそうにも見えて、本当に可愛かった。

そして私も、本音さんのほんわかさに当てられて・・・少し、嬉しくなつた。

本当に怖かつたけど、でも・・・良かったって思えるくらいに。本音さんが無事で、本当に良かった。

「・・・おおよ？ 楓ちゃん照れてる？ ねえねえ、照れてるのー？」

「そ、そんなこと無いよ？」

でもたまに鋭くなる所は、ズルいと思うよ。

その後、ペタペタひつついてくる本音さんから逃げ回っていると、今度は簪ちゃんが部屋に入つて来た。

くつついてる私達を見て、眉を顰めて。

「・・・何・・・してるの・・・？」

「わ、わー・・・簪ちゃん、今日は本当にごめんね！？」

「別に・・・良い。楓のせいじゃない」

「おお、ありがたきお言葉ですお嬢様」

「・・・本音は、ダメ」

「ええっつ」

簪ちゃんは本音さんからふいつと、顔を背けるけど、きつと本音さんのことも心配だったんだよね。
だって簪ちゃんが手に持つてる袋には、ちゃんとカップケーキが3つ入ってるもん。

・・・あ、そうだ。今日・・・。

『私のことは、簪ちゃんには黙っていてね？』

・・・口止め、されてたんだった。

でも、何で口止めする必要があるんだろう。

お姉ちゃんなのに・・・仲が悪い、のかな？

不思議そうに首を傾げる簪ちゃんに、私は曖昧な笑いを返す。

あんまり、深く聞いたこと無かったけど・・・。

簪ちゃんは、お姉ちゃんのことをどう思ってるんだろ・・・？

Side 篠ノ之 篇

病室の中から聞こえて来る楽しげな声に、ドアノブに伸ばしかけた手を引つ込める。

楓と、その友達が・・・楽しそうに話しているのが聞こえる。

「……」

何となく気持ちが悪く、私はそこから踵を返して立ち去る。

……楓の方にも例の侵入者が出たと聞いたが、この様子なら心配なさそうだな。

そう、思ったから。

「入んないの？ 中」

「……友達もいるようだし、邪魔だろうから」

「別に、そんなことも無いと思うけどね」

途中、廊下の壁に寄りかかるようにして立つ鈴と擦れ違った。聞けば、楓を守ろうとしてくれたらしい……礼を、言わなくてはな。

「良いわよ、別に。結局、あんまり役には……それよりもさ、あの子ってさあ」

「……何だ」

「向いて無いんじゃないの？ ……ああ、別にあの子がどつてわけじゃ無いわよ」

誰が何に、向いていないのか。

それは……。

「だってあの子、攻撃って選択肢が無いんだもの・・・あんな状況でもさ」

「・・・それは」

「勘違いしないでよ、別にそれが悪いってわけじゃないの。でもさ、ここには・・・向いて無いと思う」

向いていない。

そうやって鈴は、肩を竦めた。

それを何故、本人では無く私に言うのか。

決まっている、私が楓の・・・あの子の、姉だからだ。

優しいあの子の・・・姉さんだからだ。

結局その場では私は鈴に何も答えられなくて、そのまま別れたが。

「・・・楓、か」

篝姉さん・・・姉。

私を嬉しそうにそう呼ぶあの子は、私の双子の妹。

3年前までは、身体の弱い「守る」べき対象だった。

けど今では、私を守るまでになっている。

・・・ああ、これは嫉妬だ。

でもそれは、何に対する嫉妬なのかわからなかった。

専用機を持っているとか、それとも他の何かなのか。
例えば……。

「……」

寮の部屋に戻ると、同室の者はシャワーを浴びている最中のようだった。

気を遣わせないように静かに扉を閉めて、自分のベッドに向かう。

そこには当然、私の私物がある。

着替えや日用品、剣道の道具や教科書、一夏の訓練用に買ったIS
関連の参考書。

「……一夏」

あの時、泥人形（暴走したラウラ）に捨て身で挑んだ一夏……怪
我也無く無事で、本当に良かった。

だけど、どうしてか素直に喜べない。

どうしてか……？ そんなの、本当はわかってる。

私だけが、蚊帳の外だった。

試合の最中も、それ以外も……私だけが。

剣士として、道具のせいにするのは卑怯だとわかってる。

けれど量産機では……専用機持ちで無い私では、力不足だ。

一夏の傍に、いられない・・・隣に、立て無い。
どろしてだらろろ、そう思うといつも他がどろでも良くなるのは。

「・・・」

ベッド脇の小物入れの引き出しを、開ける。

そこには、私が普段使っているのは別の携帯電話が入っている。

3年前に貰って・・・それ以降、一度も使わなかった。

登録してあるアドレスは、1件だけ。

これは、絶対に使わないと誓っていた物。

だけど、捨てられなかった物・・・。

・・・躊躇しつつ、ボタンをプッシュする。

耳元に響く着信音、心無しか鼓動のようにも聞こえる。

『やあやあやあ！ 久しぶりだねえ！ ずっとずう っと待つ
てたよ！』

ほどなく響いたのは、懐かしい声。

そして・・・一番、聞きたくない声だった。

喜びの色に染まった高い声が、私の耳朶を打つ。

私は服の裾を強く握りしめながら、息を深く吸って・・・。

「……………姉さん……………」

そう、言った。

それだけのことで、電話の向こうから響く声はさらに大きくなる。嬉しそうに、喜びに満ちて。

『うんうん、用件はわかっているよ。欲しいんだよね？ キミだけのオンリー・ワン、オルタナティブ・ゼロ代用無きもの、ハイエンド箒の専用機が。モチロン用意してあるよ。最高性能にして規格外仕様。オーバースペックそして、黒に見守られて白と並び立つもの。その機体の名は

』

姉さん……篠ノ之の長姉の告げた名前を、私は音を出さずに唇だけでなぞった。

シャワーの音が、やけに遠くに聞こえた……。

Side 織斑 一夏

俺が千冬姉によって「懲罰部屋」から出されたのは、実に3日後の

ことだったとき。

・・・いや、ちょっとモノローグみたいな感じにして客観性を持たせないと心が保たなくて。

織斑式懲罰術、何アレ、受けたことは無いけど軍隊の拷問よりキツいんじゃないか？

あの千冬姉の真似をした偽物野郎に一撃を貰った時だって、こんなに効かなかったぜ。

楓が装甲全部出せるようにしてくれて無かったら、死んでたかもな・・・。

「次に勝手なことしたら10日間ブチ込む」

出される時、何故か超笑顔で言われた。

ああ、千冬姉はやっぱり美人だなあ・・・涙が出そうなくらい震えが来るぜ。

いや、うん、俺のことは良いんだ、うん。

早く忘れよう、そつで無いと生きていけないから・・・。

「・・・あ

」
「おつ」

俺が（心無し）ヨレヨレしながら寮に戻ると、廊下でシャルルと出くわした。

シャルルはひとしきり俺の身体の心配（それ以外もあるかもしれん

が)をした後、俺の「大丈夫」との言葉にほっとしたような笑顔を見せてくれた。

「シャルルは大丈夫だったか？　俺は懲罰部屋の外のことはイマイチ知らんのだが」

「あー・・・うん、大丈夫。大事なモノは何も失わなかったから」

「大事じゃ無いモノは失ったみたいに聞こえるんだが・・・」

何故か、シャルルに目を逸らされた。

激しく気になったが、精神衛生のために聞かない方が良い気がした。まあ、とりあえず・・・学年別トーナメントは普通に中止になったらしい。

篝も楓も、あとラウラも助かったらしいこともわかった。

・・・そっか、なら、まあ、良いや。

俺がちよっと千冬姉によつてこの世の地獄を見せられるくらい、何とも・・・何・・・。

「い、一夏？　泣いてるの・・・？」

「いや、大丈夫だシャルル、大事なモノは失わなかったから」

「・・・そ、そう」

それにアレだ、悪いことばかりじゃない。

何でも今日から男子も大浴場を使えるようになったのだ！（曜日制だけ）。

・・・あ、でもなあ、シャルルがいるから・・・どうした物が。

この3日間、考える時間は山ほどあったけど、シャルルの問題の解決策はさっぱりだ。

本人は「もうしばらく、このままで良いよ」と笑ってるが、でもなあ。

やっぱり男と同居なんて気を遣うだろうし、何より嫌だろうし。シャルルのためにも、何とか部屋を分けてやりたいよなあ・・・うーん・・・何とかならない物が。

「だーれだ？」

その時、俺の目の前が真っ暗になった。

誰かの手が、後ろから俺の目を覆っている・・・付属して、楽しさを滲ませた女子の声。

もちろん、シャルルじゃない。

さらさらして、しかもどこか冷たいその手は・・・って、誰？

慌てて振り向くと、見知らぬ女生徒が楽しそうに俺を見ていた。

IS学園の女子制服、リボンの色から2年生だとわかる。

癖毛が外にハネた短い青みがあった髪に、赤い瞳、白い肌。

余裕のありそうな大人びた笑み、だけどどこか悪戯好きそうな印象を受ける。

その手には、何故か扇子。

「え、誰・・・？」

俺の囁きに笑みを深くしたその女性とは、とんっ、と一歩だけ距離を詰める。

そうして、何をしたかと言うと・・・トンツ、と軽い音を立てて。

シャルルの胸に、軽く扇子の先を押し当てた。

きよとん、とした表情を浮かべた後、シャルルは慌てて身を引く。かすかに頬を染めたその仕草は女の子的で、少し焦る。

特製コルセットで胸を隠しているから、大丈夫だとは思っけど・・・。

「うふふ・・・かわいい」

「え、ええっ・・・？」

「い、いやいやいや、キミ誰!？」

困惑する俺達に、その女生徒は自分の口のの前でぱんっ、と扇子を開く。

そこには、『看破』と書かれていた。

・・・はい？

「困ったら、生徒会室に来なさいな・・・助けてあげる」

「はい？」

「じゃーねー」

そしてそのまま、名前も言わずに颯爽と去って行く女生徒。気のせいか、清流のような爽やかな空気を残して。

・・・って、そんなわけ無いだろ。

「な・・・何だったんだ？ シャルル、大丈夫か？」

「う、うん・・・ありがとうー夏」

まだびつくりした表情を浮かべていたけど、シャルルは大丈夫だと言った。

それにしても、本当に誰だったんだ？

生徒会って・・・何で？

まあ、よくわからんが、気にしないことにしよう

「どうした、珍妙なことをして」

「・・・この声は！」

千客万来とはこのことだろうか、さらに俺達に声をかけてくる奴がいた。

それは銀色の髪と黒の眼帯の少女で・・・ラウラ・ボーデヴィツヒと言っ。

学園の制服を着ている点では同じだが、さっきの人とはことなり全

身から威圧感を醸し出している。

「・・・まだ、やる気？」

俺と同じくシャルルも警戒態勢、そりや仲良く挨拶はできねえよな。あの時・・・試合中に乱入してきた敵は、ラウラが倒した。でも変なシステムを使ったらしく、ラウラも暴走した。

乱入者を倒した後は大人しくなったから、『零落白夜』で切れたんだけど。

千冬姉の真似ごととされて俺がキレてたつてもあるけど、今思うと危なかったな。

そりや、懲罰部屋行きだわな。

そもそもシャルルがエネルギーを分けてくれなきゃ、できなかったしな・・・。

「・・・」

「・・・何だよ」

ラウラは俺の目の前まで歩いて来ると、下から睨み上げて来た。気のせいで無ければ、どこか品定めされているような気がする。

「・・・ふむ。良く見れば教官に似て・・・」

「あ？」

「ああ、いや、こちらの話だ・・・何、今日は一言、宣告しにきただけだ。すぐに立ち去る」

何をブツブツ言ってるのかはわからないが、妙に殊勝な態度だった。威圧感も、最初よりは柔らかい。

ラウラはこほんっ、と咳払いした後・・・俺をじっと赤い右眼で見つめて来る。

意味のわからない、沈黙。

数秒か数分か、しばらくしてラウラが動く。

それから無表情に・・・俺を、右手でビシィッ、と指差して。

「織斑一夏、私はお前を観察することにした」

・・・は？

・・・はあああああっっ!？

第8話：「学年別トーナメント」（後書き）

篠ノ之 束：

うふふふ・・・あっはははは！

あはははっ、うっふふふ・・・っ！

篠ノ之 楓：

・・・ど、どうしたのお姉ちゃん、登場からご機嫌だね・・・。
と言っか、軽く危ないよ・・・？

篠ノ之 束：

うっふっふっふっ・・・箒ちゃんが私に電話！

これは喜ばずにはいられないよねっ！

あーはっはっははははっ！

篠ノ之 楓：

・・・ね、姉さん、束お姉ちゃんに何て言ったの・・・？

篠ノ之 箒：

い、いや、別に何も・・・と言っか私は「姉さん」としか言って無
い・・・。

篠ノ之 束：

いやいやいやいやっ！

箒ちゃんの気持ちはずきゅっうんっ、と伝わってきたよ！

もうね、任せといてよ、お姉ちゃんに！

うふふふ・・・あはははははっ！

箒&楓：

こゝ、怖い……。。

篠ノ之 束：

にゅほほほほ

第9話：「そのクラス、休日」

第9話：「そのクラス、休日」

S i d e シャルル・デュノア

夢を見た気がする。

お母さんと、一緒に過ごしていた頃の夢。

お母さんがいて、お父さんに拾われる前の頃の夢。

小さいけれど温かな家、貧しいけどどこか満足感があつた生活。けれど、もう戻れない時間……。だからこそ、懐かしいんだろうと思う。

「シャルル」

不意に、誰かが僕の名前を呼ぶ……。僕じゃ無い、僕の名前を。そう呼ばれるのは嫌いだった、だけどこの声に呼ばれるのは嫌じゃ無い。
この声は……。誰の声だろうか？
そう思つて、私は……。

「……………」

・・・目を開くと、そこは見慣れた寮の部屋だった。
夢・・・だったんだ。

気のせいで無ければ、いるはずの無い誰かがいたような・・・。

「朝・・・」

もぞ・・・と、ベッドの中で寝返りを打つ。

すると、隣のベッドで眠る男の子のことが視界に入った。

最初の数日はびっくりしたけど、今はもう慣れたよ。

むしろ、こっやってこっそり寝顔を眺める余裕まで出てきちゃった
りして。

一夏・・・僕の秘密を知っている唯一の人。

それでも僕のためにいろいろなことを我慢してくれている、男の子。
それでも優しく笑う、男の子・・・。

「・・・うん？」

すうすうと眠る一夏、それはいつもと変わらない。
でも何だろう、違和感を感じる。

一夏のお布団、いつもより盛り上がり大きい気がする。
・・・何だろう？

ちよつと首を傾げながら、僕はベッドから下りる。

一夏を起こさないように近付いて、様子を窺う。

「ふふ、こうして見ると、一夏って可愛いよね……じゃなくて。」

「ん……」

「……へ？」

い、今、何か……一夏のお布団の中から明らかに一夏の声じゃない声でしたよ!?

おっかなびつくり、一夏のお布団をめくる。

いつもならそんなこと、はしたなくてできないけど……え?

一夏のお布団の中に、銀髪の美少女がいた。

しかも、眼帯とレッグアーマー（ISの待機状態らしい）だけで……服、着て無い!?

その女の子は……ドイツの代表候補生、名前は。

「ら、ラウラ……!？」

「んがっ……んあ? 何だシャル、るつづつづつづつ!？」

一夏も起きた、そして大声。

その様子を見ると、その……い、一夏が連れ込んだわけじゃ……

無い、よね？

信じて良いよね、一夏……？

「そんな目で見ても俺は無実だ！！　と言っか、何でラウラがここに
いるんだ!？」

「んう……何だ、朝か……」

「わ、わあああっ!？」

ラウラも目を覚まして、しかもそのまま立ち上がるうとした物だから、僕は慌ててラウラの身体にお布団を被せた。

え、ええと、服、何か服……!

「し、シャルル! ヤバイ!」

「え、え、何、何が……って、わわわ……!」

一夏に言われて気付く、僕って今、コルセットで胸締めて無い……!

お布団の中でもゴモゴしてるラウラを横目に、僕はコルセットを手にシャワールームに駆けこむ。

あ、危な、危なかった……!

僕がコルセットを着けている間にも、一夏とラウラが揉めている声が聞こえる。

「な……何でここに!？」

「言っただろう、お前を観察することにしたと。そうである以上、

可能な限り至近で観察するべきと判断した」

「いや、意味わかんねえよ！」

「何がだ？」

「いや、だってお前……」

……な、何だろう、ラウラの中で何が化学反応を起こしてこんなことに？

一夏の立場から言うと、ラウラって未だに友達を傷付けた悪者なんだよね。

謝罪みたいな物はあつたけど、一言「許せ」だもんねえ……。

と、とにかく、コルセットを締めてパジャマを着直して……よし。

「う、うわあああああつ！？ 立つな！ 隠せ！」

「大声を出すな、常識を疑われるぞ」

「お前が常識を語るな！！ それに、シャルルだっているんだぞ！？」

「む？ しかしアイツは……」

シャワールームから出た僕は、ラウラの不思議そうな視線に迎えられた。

それは、本当に不思議そうで……何と云うか、居心地の悪い雰囲気だった。

嫌な沈黙が、僕とラウラの間……うん、ともかく服を着せよう。一夏が凄く困ってるし、早く何とかしないと……。

「一夏、いるか？ せっかくの休日だし朝食を一緒に……」

短いノックの後、部屋の扉が開く。
声の主は箒さん、そしてベッドの上には一夏とラウラ（服、無し）。
このタイミングで来るって、一夏ってツいて無いよね。

・・・ごめん、一夏。

僕はどうやら、キミを守れなかったようだよ・・・。

Side 篠ノ之 楓

休日の朝、食堂に行くとき首の角度が若干おかしい一夏さんに会った。
それを見て私は、箒さんと一夏さんが今日も仲が良い事を確認する。

うん、良かった。

「・・・本気で言ってるのか？」

「もちろん」

非難がましい一夏さんの声にさらりと返して、私は箒さんと同じ
定食をカウンターから取ってくる。

煮魚とほうれん草のおひたし、ご飯とお味噌汁、日本的。

東お姉ちゃんの所にいた時はこんな料理は食べられなかったので、

凄く良い。

基本的に、形態食糧が1番のごちそうだったからね。

朝食の席には、私と箒姉さん、そして一夏さんとシャルルさん、ラウラさん（名前で呼べ、だそうで）がいる。

・・・いや、何でラウラさんがいるんだろう。

観察って、それつまりス（自粛）。

「おはよー、今日は何だか気温高くない？」

「皆さん、お揃いようですわね」

そして今、鈴さんとセシリアさんが来た。

2人はラウラさんを見ると頬の筋肉を痙攣させたけど、あえて何も言わずに丸テーブルの端に座る。

位置的に言つと、鈴さん、私、箒姉さん、一夏さん、ラウラさん、シャルルさん、セシリアさん。

うーん、何だか揃い踏みって感じ。

「・・・で、今日は何をやらかしたのよ、一夏？」

「人を問題児みたいに言うなよ」

「どうかしらね」

「一夏さんは、すでに問題児ですわ」

懲罰部屋にも行ったしねー。

口にする和一夏さんが遠くを見るような目になるので、口にはしな

いけど。

あー、おひたしウマウマ。

「あー・・・そう言えば、ねえねえ、箒姉さん」

「・・・何だ」

「臨海学校の水着って、どうしてる？」

そう、もうすぐ臨海学校。

日曜日の今日の内にいろいろと準備をしておかないと不味いのだけど、水着が一番面倒。

校外学習とは言え、生徒の自由時間は割と長い。

海に出て遊ばないと死ぬ・・・とは、本音さんの談。

「まあ、スクール水着で良いよねえ、箒姉さ」

「「無い(です)わ!!!」」

「うおう」

何故か、鈴さんとセシリアさんが物凄く食いついて来た。

え、ええー・・・何故に。

良いじゃない、スクール水着。

子供の頃に運動制限でプール授業受けなかった身としては、憧れる。

学校指定水着スクール・・・良く無い？

「「良く無い(ですわ)!!」」
「アンタねえ・・・年頃の女の子がそんなことで良いと思ってるの!?!」
「そうですね、もう少しご自分の身嗜みには気を付けて頂きませんか・・・」
「ええ〜・・・一夏さん、どう思います? スクール水着で臨海学校」

傾いた首をゴギツ、と整体のように直している一夏さんに、聞いてみる。

まあ、ここは男性の意見を聞いてみよう。

「え? 良いんじゃないか別に、似合うと思うぞ」
「そうか、ではやはり私も学校指定の水着で良いな。アレは機能性に優れている」

おお、ラウラさんの賛同まで得られた。

7人中3人までもがスクール水着容認派となった今や、私の意見が通るのも時間の問題。

では、そう言うことで・・・煮魚の身をほぐすとして。

「ダメ・メ・よ! 買いに行くの! どいつもこいつも何にもわかって無いんだから!」

「ええ〜」

「行くのよ! 今日!」

いや、むしろ何故に鈴さんがそんなに気合いが入っているのか。しかもその視線は私では無く、一夏さんに注がれているわけで。「？」と首を傾げた一夏さん、せつかく直したその首が逆方向に傾くまで数秒とかがからなかった。

・・・と、言うわけで。

今日は皆でシヨッピング、と言うことになったらしい。スクール水着、憧れてただけどな。

Side 鳳 鈴音

何はともかく、校内にいたんじゃ埒が明かないわ。そう言うわけで、今日は皆で水着を買いに行くことになったの。と言うか主に篝と楓とラウラの水着、年頃の乙女がスクール水着つて、悲し過ぎるわよ。

「しかし、あの水着は機能が」

「ラウラ、うるさい」

「こっ、憧れる物が」

「プール授業の時にでも着なさいよ」

楓とラウラ　あれ、何で私ラウラと買い物なんかに行くことになつてんのかしら　　がグチグチ言ってるけど、却下よ却下、年頃の乙女が海に行くのにスクール水着とか無いから。
えーと、この辺だとアレよね、駅前のショッピングモールかしらね。

とりあえず食堂で一旦別れて、学園のゲート前で最集合。

メンバーは私とセシリア（意外と付き合い良いのよね）、一夏に等に楓、んでラウラ・・・あれ？

「シャルルはどうしたのよ？」

「え、あ、ああ、何か今日は用事があるらしくて」

「ふーん・・・まあ、良いけどね」

10分後に一夏の部屋に迎えに・・・べ、別に他意は無いわよ、遅れるかもしれないから、来てあげただけよ。

ん、んんっ、とにかく、まず一夏と合流してから皆の所へ行くわ。で、シャルルは来ないって言うんだけど・・・。

まあ、楓達の水着を見に行くんだから、シャルルに付き合い合わせるのは悪いわよね。

「・・・え、それ俺は？」

「うっさい、さっさと来なさいよ」

「そうですわ、レディをあまり待たせるものでは無くてよ」

一夏と一緒にゲート前に行くと、そこにはもう皆揃ってた。

一番プリプリしてるのはセシリア、日差しでも気にしてるのかもしれない。

ラウラは1人、少し離れた位置に立ってて・・・篝の傍には楓、何かディスプレイ出して眺めてる。

・・・人を待つ時でも、性格って出るもんよね。

まあ、とにかくそれじゃあ、行きましようか。

良く考えてみれば、このメンバーで買い物って言うのも楽しそうよね。

・・・あ、そだ。

「そう言えばさあ、予算っていくらくらいあるわけ？」

「む、金か？ 口座に2000万ユーロ程あったと思うが」

「あー・・・アンタ、代表候補生だもんね。にしても持ち過ぎだけど」

ラウラねえ・・・本国からは特に何も言ってきて無いけど。

条約違反のシステム積んでた件は、表沙汰にはなって無いけど。

でも裏ではいろいろやってるらしくて、今まさに英仏伊でドイツを追及してる所らしいし。

ひょっとしたらドイツのIS保有数減るかもってことで、ウチ中国も・・・。

まあ、それは私が考えることじゃないけど。

とにかく、国によるけど代表候補生は軍属みたいな物だからお給金も結構、出てんのよ。

私もそれなりに貯金、あるし。
問題は……。

「……お？」

飴でも食べてるのか、ほっぺが少し膨らんでる。

リスみたいで可愛い……じゃなくて。

箸と楓って、お金あんなのかしら……いや、馬鹿にしてるわけじゃなくて。

「私は、自分の水着を買う金くらいはある」

「そう、えーと……」

「む、その目はもしか、私がお金を持っていないとでも？」

「いや、別にそう言うわけじゃ……」

ディスプレイを消した楓は、立ち上がると服のポケットの中から妙に薄いお財布を取り出した。
そこからゴソゴソと……。

「じゃじゃーん」

何か変なポーズ取りながら、楓が天に何かをかざした。

その手には太陽の光を浴びてキラリと輝く……黒いカードが握られていた。

・・・って、アレってもしかしてブラックカードとか言う・・・。

S i d e シャルル・デュノア

まあ、普通に考えて僕と一緒に水着を買いにいけるわけが無いよね。というかそれ以前に、臨海学校に行つて大丈夫かな・・・まあ、自由時間に海に出なければ大丈夫だね。

仮病で休むわけにもいかないし・・・そんなことしたら、織斑先生が怖いし。

「皆、駅前のお店にもう着いたかなあ」

ふう、と息を吐いて、僕は汗に濡れる顔を肩にかけてタオルで拭う。髪先から汗の滴が落ちて、学園のトレーニングルームの床に落ちる。トレッドミル・・・まあ、トレーニングマシンで走り込みをやつてる僕。

体力作りと身体作りは、ISの操縦者の義務みたいな物だから。それに向こうでお父さんに拾われてからは、他にすることも無かつたし。

僕にとってはもう、日課みたいな物かな。

最近は一夏の寝る前の筋トレとかにも付き合ってるけど・・・。

「あ、あの、デュノア君！」

「え・・・あ、はい、何ですか、お嬢さん？」

「わ、わ・・・こ、これ！」

僕のことを遠巻きに見ていた女生徒

たぶん同学年

が、

僕にスポーツドリンクを渡して来た。

その割に腰を直角に曲げてるから、顔が見えないけど。

たぶん、差し入れ・・・かな。

お礼を言っただけ取ると、その子は顔を真っ赤にしたまま走り去って行っちゃった。

友達なのか、女の子のグループに戻ると「きゃーっ」と言い合いながらトレーニングルームから出て行く。

・・・まあ、何と言うか、可愛らしいね。

でも同時に、少し申し訳ない気持ちになる。

「・・・気分の良い物じゃないよね」

・・・僕は、本当は女の子だから。

冷たいスポーツドリンク　一夏は「ぬるめの方が健康的」って言ってたね　　を手中で弄びながら、僕は何とも言えない気分になっている。

あの子達や他の皆は、僕が男の子だと思ってるからあんな反応をし

てるんだと思う。

僕がちゃんと女の子としてここに来ていたら、別の反応をしたはずなのに。

・・・僕は、どうするべきなんだろう。

「・・・一夏は、優しいね」

そんな僕でも、気を遣って優しく接してくれる。

男の人に優しくされたのは初めてで、とても戸惑うことも多いけど、でもそんな一夏の前でだけ「シャルロットおんなのこ」になるのも、卑怯だね。

トレーニングルームの壁際に鏡、そこには「シャルルおやりのこ」が映ってる。胸を特製のコルセットで締め、オレンジ色のトレーニングウェア姿で。

胸元には、『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』の待機状態の十字のマークがついたネックレス・トップ。

・・・偽りの、僕。

「・・・まあ、とにかく海には行けないね」

僕がここに居続けるための方法、そんなに選択肢は無い。

そしてそのどれを選んで、ハッピーエンドにはなれない。

・・・切ないね。

臨海学校・・・か。

自由時間には海に出れると言うから、水着は必須だな。

流石の私も、15にもなって学校指定水着と言うのもな・・・。

「姉さん、姉さん」

それに臨海学校中には、私の環境も変わっているかもしれない。

目を閉じれば、先日の夜の電話を思い出す。

・・・あの件に関しては、未だに自分の中で決着がつけられないまま
までいる。

私はいつたい、どう言う価値基準で行動しているのだろうか。

いや、それ以前に・・・私は、どうしたいのだろうか。

あの人を断じたいのか許したいのか、愛したいのか嫌いたいのか・・・。

それとも、そのどちらもなのか、いずれも違うのかすら。

「箒姉さん、箒さんってば」

ただわかっていているのは・・・一夏の隣にいたい。
それだけは、私の中で幼い頃から変わっていないことだった。
剣は揺らいでも・・・心だけは、揺らいでいない、はずだ。

「・・・おい、楓」

「わ、やっと返事してくれた」

目を開ければ、そこは駅前ショッピングモールの水着売り場。
デザインや色など、様々な女性用水着が所狭しと並んでいる。
値段も手頃で、しかも女性は試着が自由と言う有難い店だ。

とは言え、私はその・・・そう言う物に対するセンスが無い。
何分、慣れていないから。

それを察してか、楓が甲斐甲斐しくいろいろと持ってきてくれるの
は良い。

・・・が。

「ど、どうしてどれもこれも、派手なデザインのばかりなのだ!？」
「派手って言われても・・・普通のビキニだよ」
「し、しかしだな・・・そ、それでは下着のようでは無いか」

最後の方は一夏の聞こえないように小声だが、とにかくそうなのだ。
楓が持つてくる水着はどれも、布の面積が少ない。

もう少しこう、布の面積を控え目に・・・そう、ワンピースタイプ・・・
つて。

「それ、お前のか？」

「え？ うん、まあ、適当に」

楓は楓で、自分の分らしき大人しめのデザインの水着を持っている。わ、私にもそう言うので良いんだ！
と、言う物の・・・どうしてか楓は表情を暗くして。

「姉さんの身体のサイズだと、ワンピースは種類が・・・」

「わ、私があつていると言うのか！？」

「スタイルが良過ぎて種類が無いの！ 何？ それを私に言わせて楽しいの！？」

「い、意味のわからないことを言うな！」

いや、確かに私は、その、胸のせいでサイズの合う下着や衣服が少ないが。

それに対して楓はスレンダーで、種類が豊富で楽そうと言うか・・・。

・・・どうした楓、泣きそうな顔で蹲つて。

「お2人とも、お店ではお静かになさってくださいな。一緒にいる私まで同じ目で見られてしまいます」

「む、そ、それもそうだな。すまないセシリ・・・アって、な、何だその水着は！？」

「ああ、たまには庶民の店の物でと思ひまして」

別の水着の列からやってきたセシリアは、やたらに布の面積の少ない水着を手にしていった。

そ、そんなに小さな・・・15歳の乙女が着て良い物ではないだろう。

お、欧州では普通なのか・・・？

「・・・鈴さんの所に行きたいな」

「鈴さんなら、あちらですけど・・・」

「・・・ばたり」

私が国と国の文化の違いに衝撃を受けていると、楓が何かセシリアに撃沈されていた。

よ、良く分からないが、大丈夫か。

私は私で、サイズの合う水着が少ないし・・・う、うーん・・・。

・・・い、一夏に見られるかもしれないのだから、下手な物は選べない。

でも自分では選べない、なら楓の・・・いや、だが、しかし・・・くっ・・・いったい、どうすれば良いんだ！

ああっ、もう！一夏のせいだぞ！

・・・な、何か知らんが、凄く寒気がした。
何故だろうな、物凄く謝りたくなってきたぞ。

「ごめん」

「え？ 何？ 私ってば何で謝られてんの？」

「いや、別に鈴に謝ったわけじゃない」

「はあ？ 喧嘩売ってんの？」

ヤバい、今度は正面にいる鈴の機嫌が坂を転がるように悪くなってきたぞ。

だが大丈夫だ、俺には楓と言う経験がある。

俺はポケットから「それ」を取り出すと、そっと鈴に手渡した。

「・・・何、コレ」

「飴玉、オレンジ味」

「子供かっ！」

「あれ？ 楓はこれで機嫌を直すんだけどなあ」

「一緒にすんじゃ無いわよ！・・・と言うか、あの子ってこんなので機嫌直るの？」

楓は普段はぼんやりしてるけど、篝やISのことが絡むと沸点が低い。

そういう時は、飴を渡すのと機嫌を直してくれる。

鈴はまだぶつくさ文句を言ってたけど、俺が渡した飴はちゃんと貰

ってくれた。

そして俺は、飴の効果を再確認したわけで。

「・・・で、どっちの水着が良いのよ？」

「え、いや、どっちも似合うと思うぞ」

「・・・はあ」

俺は今、どう言うわけか鈴と2人きりで鈴の水着を選んでは。

途中は鈴もふざけて際どい水着とか持ってきてたんだけど（本気で困った）、ここに来て行き詰ってるらしい。

今も俺に2つの水着のどっちが良いか聞いて来てるし、鈴も悩んでるみたいだ。

でも俺としては、本当にどれも似合うと思うんだ。

それを正直に言うと、どうしてか鈴は溜息を吐いて持っていた水着を両方とも戻すんだけど。

気に入らなかつたのか、不機嫌そうに別の水着を物色してる。

俺？ 俺は無難にネイビーカラーの普通の水着、男の水着なんてそんなもんだろ。

「・・・ったく、どうしようも無いわねコイツ」

「ん、何だって？」

「何でも無いわよ。私、向こうの見て来るから・・・そこにいなさいよー!」

「お、おう」

臨海学校が楽しみなのか、今日の鈴は嫌に気合いが入ってる様子だった。

少し離れた所には、箒と楓がセシリアと騒いでるのが見えるし……ラウラはどこ行ったんだ？

まあ、女の子は大変だな。

女の子、の部分で学園に残っているシャルルのことを思い出す。本当は、シャルルも一緒に来たかったろうな……。俺の気分が少しマイナスに入ろうとした時。

「何を景気の悪い顔をしている、馬鹿者」

「へ？」

聞き覚えのある声に振り向いてみれば、見覚えのある顔がいた。そこには、千冬姉が水着を片手に立っていた……。

Side ラウラ・ボーデヴィツヒ

私は周囲を見渡す、そこには実に様々な種類の女性用水着が並んでいる。

駅前のショッピングモール「レゾナンス」、市内各所からアクセス可能なここは交通の中心でもある。

この世には、これ程の量の水着があつたのか……。

正直な所、学校指定水着で良いのだが……まあ、必要な物だと言うのであれば、用意するのが妥当だろう。

集団の意思がそうであるのなら、私個人の意思を優先させるわけにはいかんからな。

とは言え、私には判断基準がわからん。

そこで私は、私専用の特殊な通信機　一般人が持つ携帯電話に酷似した物　を取り出し、呼び出し。

『　受諾。クラリツサ・ハルフオーク大尉です』

『ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐。クラリツサ、例のデータをすぐに送ってほしい。潜入監査用の緊急ファイルD-11だ』

『　受諾。して用途は？』

通信相手は本国の私の部隊『黒ウサギ隊』の副隊長、つまり部下だ。我が部隊は3機のISを備える精強な部隊であり、隊員全員が私と同じ特殊な瞳を持つ。

なお、かつて織斑教官が育てた兵で……全員が、教官に敬意を持っている。

「クラリツサ、私は近く臨海学校なる行事に参加する。しかし、どうやら水着を用意する必要があるらしい。私には判断基準がわからん、そちらの指示を仰ぎたいのだが」

『了解、我ら「黒ウサギ部隊」は常に隊長と共に……ちなみに、今の装備は？』

「学校指定水着が一着のみだ」

『了解、では通常の10代女性が着用するであろうタイプの物を指定させて頂きます・・・なお、その行事には織斑教官は参加されるのでしょうか?』

「無論だ」

『了解、ではその前提で』

八キ八キと返ってくる反応に、私は満足気に頷く。

・・・それから10分ほどクラリツサの「スクール水着と普通水着、それぞれを用いた異性間及び同性間交渉の成功確率の差異」について講義を受けた後・・・通信を切り、指定された水着のありそうな列へ移動する。

「一夏。水着、どっちが良い?」

「え、えーっと・・・白かな」

「嘘を吐くな、黒だろう? まったく、弟が余計な心配をするな。」

お前以下の男についていくつもりは無いさ」

「う・・・」

その際、織斑教官の姿を発見する。

どうやら教官も水着の用意に来ていたようで、一夏がそれを手伝っているらしい。

・・・なるほど、観察対象に選択させると言う手もあったか。

流石は教官・・・。

他の連中はどうしたかと思えば、少し離れた位置で山田先生と共に

教官と一夏の様子を見ている。

・・・アレは、何をしているのだろうか。
まあ、私が気にかかる必要は無いだろう。

「千冬姉は、彼氏とか作らないのか？」

「手のかかる弟が自立したらな、考える・・・それに、私はまだ心配されるような年じゃ無いさ」

教官は一夏の頭を撫でた後・・・・・・・・良いな・・・いや、そうでは無く。

教官は黒の水着を持ってレジへ、それで一夏は1人になるわけだが。

「・・・うん？」

何故か、篠ノ之楓が一夏の傍に寄って行っていた。

何をやっているのかは知らんが、一夏に何かを要求しているようだ。

一方で一夏も、「おおっ」と手を打って納得している。

・・・何の話だ？

S i d e 篠ノ之 楓

あー・・・今日は疲れた。

駅前での買い物を終えた後は、千冬姉様も含めて皆で学園へ帰宅。
・・・帰宅って、何か違う気もする。

まあ、アレだね、一夏さんに篝姉さんのお誕生日プレゼントを用意するようお願いもしたし。

・・・健康器具を買おうとする一夏さんを篝姉さんに見つからないように止めるの、疲れた。
でも、これで当日は・・・。

「ただいま」

「おお、おつかえりー、楓ちゃん」

寮の部屋に戻ると、ルームメイトの本音さんが出迎えてくれた。

いつものように、とてもゆっくりとした動作で寝転んでいたベッドから起きて、さらに輪をかけてゆっくりとした動作で私の方へとトテと歩いて来る。

眠そうな顔は、デフォルト。

「おお、水着買いに行つてたんだ」

「うん、何かスクール水着じゃダメだつて言われて・・・」

「ああ、そりゃダメだね」

ここでもダメ出し、スクール水着。

そ、そんなにダメなのかな・・・個人的に、凄く憧れなんだけど。

皆は着飽きたかもしれないけど、私はあんまり着たことが無いから。

「本音さんは、どんなの用意してるの？」

「私はねー、うふふ、当日のお楽しみー」

「えええ・・・」

「一緒にお着替えしようねー」

そ、それは、ちょっと恥ずかしいかも・・・。

そう言えば、お友達と海とかも初めてだよね。

わ、何だか淒く楽しみになってきたかも。

・・・無意識。

そう、あくまでも無意識に、私は本音さんの身体を見つめる。

寮にいる時はいかなる時間帯でもダボダボのパジャマを着てる本音さん、だからわかりにくいけど・・・実は、かなりスタイルがよろしいことを私は知ってる。

具体的に言っと、私よりもレベルが2つも上。

「お？ えつちい視線を感じる！」

「それは怖いね」

本音さんの冗談をさらりとかわして、私は篝姉さんの水着選びに時間の大半を費やした今日と言う休日を振り返る。

篝姉さんとたくさん遊べて嬉しかった、今日の束お姉ちゃんへのメールの内容は決まったね。

その時、部屋の扉がノックされて・・・簪ちゃんが入って来た。

「あの・・・カップケーキ焼いた・・・んだけど・・・」

「お〜、ありがたき幸せですお嬢様〜」

「・・・その言い方・・・嫌」

ふんわりとした甘い匂いに釣られるように、本音さんが簪ちゃんの所へ。

私も、簪ちゃんに近付いて胸元に抱えられたカップケーキを見る。

わあ、とても美味しそうな・・・。

「およよ?」

「え、え・・・な、何で私、抱きつかれてるの・・・?」

・・・お友達。

「お友達だよね!」

「へ? え・・・」

「私達、お友達だよね!」

「え、う、うん・・・」

私の言葉に、簪ちゃんは戸惑いながらも頷く。

他意は無いよ、うん、ただ友情を確かめ合っただけ。

私と簪ちゃんは、ずっと友達だって・・・。

臨海学校でも、一緒に遊ぼうね。

「・・・え？ 休む？」

「いやいや、そう言わずに・・・。」

「・・・あれ、私はー？」

一人、本音さんが首を傾げていた・・・。

IS学園学生寮、某所。

「ねえ、一夏さー」

「おお、鈴」

「一夏つてさあ、私の時は水着選んでくれなかったくせに、千冬さんの時はしっかり選んでたわよね」

「え、いや、あれは・・・。」

「選んでたわよね？」

「いや、だから・・・。」

「選んでたわよね？」

「・・・えっと、はい」

「ふうん、そっかー」

「・・・あの」

「なあに？」

「・・・や、優しくお願いします」

「あはっ、できると思うっ？」

「……無理、ですよね」

「うん」

……以上、一部の会話を抜粋。

その後の出来ごとについて、目撃者であるシャルル・デュノアは固く口を閉ざしている。

理由は、「僕は空気を読んで席を外したからね」だそうである。

第9話：「そのクラス、休日」（後書き）

篠ノ之 楓：

仲間って・・・素敵ですよね。

凰 鈴音：

・・・何で、私を見るのよ。

篠ノ之 楓：

私は1人じゃないんだって思えば・・・生きていけるんですよね。

凰 鈴音：

同意しないでも無いけど・・・何故か、ムカつくんだけど。

篠ノ之 楓：

一緒に戦える仲間がいれば、それだけで頑張れる！

ですよね、鈴さんっ。

凰 鈴音：

だから、何が言いたいのよアンタはあぁっ！！

*以下、見苦し・・・友人同士の微笑ましい会話が続きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293z/>

インフィニット・ストラトス 黒き叡智

2012年1月6日18時01分発行